

閃の刃は大正の世を切り拓く

ロシアよ永遠に

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黒のイシユメルガを滅するため、リインはヴァリマール達と共に自爆した。

だかイシユメルガはしぶとく、異世界へと落ち延びた。

自身の世界の遺恨を滅するため、リインは奴を追う。

その先に待ち受けていたのは…

目次

第1話『バブみ』	1
第2話『親バカの片鱗』	8
第3話『藤襲山へ』	13
第4話『最終選別』	18
第5話『鬼狩り』	23
第6話『手鬼』	28
第7話『されどその刀は烈火の如く』	34
第8話『再会』	40
第9話『一難去って』	45
第10話『お泊まり』	50
第11話『友人として、先達として』	57
第12話『家路へ』	61
第13話『ゲスメガネ前田』	65
第14話『黒の気配』	71
第15話『旅立ちの日』	77
第16話『御剣 獅童』	83
第17話『蝶屋敷』	88
第18話『お人形』	94
第19話『心の壊れた子供』	99
第20話『麻婆の業』	105
第21話『君の名は』	110
第22話『流転』	114
第23話『思わぬ邂逅』	121
第24話『さらなる邂逅の終わり』	126

第25話 『柱合会議』	131
第26話 『上弦の式』	136
第27話 『鬼を討つためにすべきこと』	142
第28話 『夜の終わり』	149
第29話 『人である証』	156
第30話 『夢』	163
第31話 『療養中の一幕』	169
第32話 『馴れ初め?』	177

第1話 『バブみ』

人体の耐えられる限界近い圧が、彼の身体を押し潰さんとする。

昇る

昇る

昇る

自身が駆る灰の騎神。

数年といえども、彼と連れ添った掛け替えのない相棒。その背部のブースターを臨界まで燃やし、成層圏を目指す。

その手には自分のクラスメイトが成り果てた剣。

そして彼らを追うように、蒼い騎神を駆るのは、1つ年上の悪友。

「…いよいよ、か。」

目を閉じる。

今から彼が行うのは、自身が住まう国。そこに蔓延した呪いからの解放だ。

彼の身体は今、その呪いの元凶たる『黒』が寄生している。『黒』の総てを身に宿す今、それを根絶する方法は1つ。

「結局…2人には付き合わせてしまったな。」

『何言ってるのさ。今更だよ、今更。』

『全くだ。ま、俺としちゃ、これで50ミラの利子は帳消しになるってんなら、喜んで付き合うさ。どうせ残り僅かの命だ。』

「■■■■…■■■■…。」

こんな無茶に付き合ってくれる2人には感謝しか浮かばない。

だからこそ…だからこそ…!

『ヤメロ…ヤメロ…!』

「悪いが…付き合ってた貰うぞ…『黒のイシユメルガ』…!」

瞬間、

黒く広がる宇宙そらに閃光が爆ぜた。

「……終わった……終わったのか……？全部……」

黒の世界。

これが死後の世界なのか。

得も知れない浮遊感が身体を包み、しかし意識は鮮明だった。

「……やったと信じたいな……」

これしか無いと、そう意を決した最後の手段。それが奴を取り込んだ先の自爆。自身諸共滅すること。それが唯一にして最後の手段だからこそ踏み切った。

『全く……総てを一身に受けて犠牲とするとは……誰の子だ。』

「あんたの子だからな。血は争えないってことだろ？」

『フフフ……言うようになったな、息子よ。』

振り向かずとも解る。

この低くも艶めかしい声。

威厳と共に優しさと、そして呆れを含むそれは、以前のような威圧と冷酷さを滲ませる物とは打って変わったものだった。

「……ここは何処なんだ？死後の世界か何か……なのか？」

『死後の世界……まあ私が居ればそう捉えるのも無理はないか。強いて言えば……ここは現世と常世の狭間だ。』

彼は言う。

死にゆく身体と魂、それらが等しく通る場であると。

『故に私もこうしてお前とゆっくり語らう事が出来る。……そう踏んでいたのだがな。』

「??？」

『どうやらそれは叶わぬ望みのようだ。』

彼の指差す先。

闇の中で薄らと光るその先に、ソイツは居た。

黒い球体。

そのかしここに気味の悪い目玉を浮かべ、更には数多のうねうねとした触手を弱々しく蠢かせている。

『よもや彼奴まで……ここを通るとは思わなかった。』

父と、そして自身が、命を賭して滅さんとしたそれが、今なお目の前で生きている。

それを見逃すほど、彼は甘くはない。

「イシユメルガ……」

『ヒィ……』

何とも情けない声だった。

まるで怯える小動物の様に震えた声で後退る其奴は、もはや黒の騎神としての威厳は微塵も感じなかった。

「今……トドメを刺す……」

腰に携えた太刀に手をかけ、

一閃。

風切り音と共にその刃を抜き放つ。

「……消えた？」

確かに切ったはず。

だが手応えはない。

まるで霧が散ったかのように、奴はその姿形を消していた。

『ふむ……少し厄介な事になったものだ。』

「……厄介？」

『うむ……息子よ。先程私は、ここは等しく死にゆく身体と魂が常世と現世を行き交う世界と言ったのを覚えているか？』

「ああ。確かにそう言っていた。」

『言い換えるなら、ここは遍く世界を繋ぐ……いわば根のような物なのだ。あらゆる魂がここに集う……つまり。』

「逆にあらゆる世界に行くことも出来る……つてことか。」

つまりイシユメルガはその理を知ってか知らずか用いて、何処かの世界に落ち延びたと言うことなのだろう。

『うむ……だがこれで我等の護るべき世界から奴は去った。我等の目的もこれで果たされたと思うべきではないか？』

「……何を言っているんだ？」

『我等がこれ以上黒に縛られる必要はなからう？死してなお、奴に囚われるなどは……』

「いや、それは違うよ、親父。」

父の案を遮るように、彼は言葉を一闪する。

「イシユメルガは確かに居なくなつた。でもそれは俺達の世界の問題を、他の世界に押し付けただけじゃないのか？俺達の世界の禍根を、別の世界で蔓延らせるなんて、俺は…耐えられないよ。」

『フフフ…そうか。お前も…其方が本心か。試すようなことを言つて悪かつたな、息子よ。』

父の案はやはりブラフだったようだ。

「どうせ親父のことだ、俺が行かないように誘導して、自分自身で決着つけに行つてたんだろ？」

『フフフ…お見通しか。』

「あんたの息子だからな。」

そんな他愛のない親子のやり取りが、何処か堪らなく温かい。義父と語り合うのとはまた違う、どこかホワホワした感覚に見舞われる。

『ならば征け、我が息子よ。我等の世界の悪鬼を、その刃で払うと良い！』

「ああ、ちよつと行つて来る。」

目を閉じ、そして心を研ぎ澄ませる。

自身の中に残る黒の一部。

それと同類の気配を辿り、その向かう先の1つの世界を探し当てていく。

「…見えた！」

僅かに見える、黒の残滓。

自身が辿るべき道。

「じゃ、親父。元気だな。」

『ああ。…気を付けるのだぞ、リイン。』

そうしてリインは、黒のイシユメルガを追い、とある世界へと足を踏み入れる。

それがよもや…

よもや…

「フフフ…リイン…いや、凜。また会うことになったな。」

「ぼんっ。」

よもやよもや、父であるギリアス・オズボーンに抱かれた赤子になっ
ていようとは。

リインが向かった世界…そこで凜と呼ばれる赤ん坊に成り果てた
理由がわからなかった。

とにもかくにも赤ん坊の身体で何を成すことも叶わないため、最早
為すがままの人生…。

母の乳を飲み、

泣きもしないのに父と母にあやされ、

トイレにも行けないから、我慢の限界を迎えておむつを成されるが
ままに換えられる…

正直に言おう。

リインの魂その物が成人した男性であったが故に、この生活は正に
生き地獄だった。

今日も今日とて母の背に揺られ、子守歌を聴かされている。

(…でも…こんな赤ん坊時代を…カーシャ母さんと…過ごしてたん
だな。)

前世の実母をリインはあまり覚えていない。

物心付いた頃に自身と共に猟兵に襲われ、命を落としていたからだ。

だがこうして赤ん坊として母の愛に触れることで、その面影を思い浮かべていた。

(…なんか…悪くない、のかもな。)

「フフフ…バブみというものだな、凜よ。」

そんな自身を茶化してくるこの親父は、大きくなったら絶対殴るとリイン改め、凜は固く心に誓った。

そんなバブみに包まれて、1年の歳月が流れた。

「…で、どういうことなのか、せつめいしてくれるんだろ?」

ようやく話せるようになった凜は、母が居ない間を狙ってギリアス…もとい、この世界では讓治郎という名前の父に尋ねた。

「うむ、赤ん坊が堅苦しい言葉を話すのを見ると、珍妙な光景だな。」
ぶん殴る理由がもう一つ増えた。

「まず1つ。お前が赤ん坊に退化した理由。…厳密には退化したワケではない。」

讓治郎は続ける。

イシユメルガと共に自爆したことで、リイン・シユバルツァーとしての肉体が滅んでしまったため、その魂の拠り所として、未だ魂を持たぬ胎児へと宿り、この世に生を受けたのだと。

「で?…なんでおやじがいるんだよ?」

「うむ、息子が心配でな、追ってきたのだ。…最も、お前が産まれる25年前にだがな。」

だからと言って、再び彼の子として生を受けることになろうとは、

つくづく因果という物は恐ろしいものである。

「だからって…なんでおんなのこになって…」

「ふむ…こればかりは運が悪かったとしか言えぬな。だが、フッフ…中々愛らしいぞ、息子…いや、娘よ。」

もうこの親父はいつかボツコボコにしてやると、凜は強い決意を胸に秘めた。

それから、凜はこの世界について譲治郎から説明を受けた。

ここは日本という国で、世は明治29年であること。

そして前世に居た魔獣や魔物に代わるように、この世には『鬼』と呼ばれる人成らざる者が蔓延る世界であることを。

第2話 『親バカの片鱗』

時は流れ、明治35年。

6歳になった凧は、家の庭先でその手に携えた木刀を構え、大きく息を吸う。

一意専心

意識は総ては振るう刃に集め、自身が前世で修めた流派を思い出す。

「式の型 疾風！」

以前はその名の如く、疾き風の如き踏み込みで間合いを詰めて一閃する速攻の型。その速さはかなりの物だったと自負もある。

だが齡6歳という幼さは、筋力の不足もあつてか、せいぜい以前における普通の踏み込み程度しか出せない。

加えて…

「はあ…はあ…！…やっぱり…1と2発で…限界か…！」

膝に手を着き、大きく肩で呼吸をしながら額から伝う汗を拭う。

肉体的な地力が以前と全く違うため、流派である八葉一刀流の型を連発できないでいた。

「フフフ…娘よ。精が出るな。」

「親父…。」

「違うだろう凧よ。父上だろう？母にもそう厳命されたハズだが？」

「ぐぬ…ち、父上…。」

「フフフ…それで良い。」

凧は前世でのように讓治郎を『親父』呼びして居たところ、母である千代にそれはもうこっぴどく叱られた。

曰く、

「女兒としてのお淑やかさに欠ける」

とのことで、それはそれは凧にとってトラウマとなっていた。床に正座させられ、こんこんと女子の何たるかを、それはもう夜通しと感じるほどに長い説教だった。

「しかしその歳で、速度が足りぬとは言え式の型を放てるとは…やは

り天賦の才と言うものか。」

「いや：俺はただ他の子と違ってズルをしているだけさ。天賦の才なんて、俺はそんなにたいそうなものじゃない。」

凜は前世の『八葉一刀流免許皆伝の剣聖 リイン・シユバルツァー』の記憶を持つて生を受けている。

20年近くという研鑽の日々の思い出は、脳髓にしつかりと刻み込まれており、身体の動かし方や、知識としての技術を既に習得しているのだ。

身体能力から来る力不足は否めないものの、どうすれば力強く、速く、確実に刃を振るえるかを知っている凜は、同じ歳の子供と比べて大きなアドバンテージを得ていた。

「凜よ。自身の呼び気を付けた方が良いぞ。今、俺と言ったな？」

「あ……う……、や、やっぱり慣れないんだよ……。」

「慣れる。でなければ、千代から雷が落ちることになるぞ。」

「…善処する。…所でおや…いや、父上。『黒』について新しい情報は無いのか？」

「うむ…今回の任でも方々を回ってはみたが…真新しい情報は得られなかったな。」

讓治郎の任…それは鬼を狩る組織のもの。

通称『鬼殺隊』

世に蔓延る鬼を人知れず狩る、政府非公認の組織だ。讓治郎はその隊士の中でも、最上位の柱とも行かないが、階級では最上位の甲きのえであり、組織内でも最古参の隊士として重宝されている。

その任務の傍ら、讓治郎は『黒』の情報を求めて、日本各地を駆けずり回っていた。

が、その結果は芳しくなく、徒労に終える物ばかりであった。鬼殺隊としての任を経ての仕事で言えばその限りではないのだが。

「奴のことだ。恐らくはお前達と戦った事による消耗を癒すべく、何処ぞに息を潜めて居るのだろう。あそこまで弱めたのだ。今しばらくは動き出すまい。」

「そうだといいいけどな……。」

「ふむ…凜よ。物事には慎重に捉えすぎるのは如何なものかと思
うぞ。少しは前向きに考えるのも必要だ。」

「…わかった。善処する。」

「わかれば宜しい。…奴が復活するまでの時に猶予があるならば1
つ、来る戦いに備えて、お前に教えておく技能がある。」

「技能？」

「うむ、我等鬼殺隊が強靱な肉体を持つ鬼と渡り合うために用いてい
る、身体能力を高める呼吸法…その名も『全集中の呼吸』」

「全…集中？」

讓治郎曰く、呼吸器官や血流器官を活性化させ、瞬間的に身体能力
を強化する特殊な呼吸法だと言う。

鬼の強靱且つ弱点である頸を強化した身体能力で、特殊な鉾石を用
いた刀で斬り落とすことが可能となる。

「これを会得すれば、お前は更に上を…。」

「父上…。」

つらつらと得意気に話す讓治郎に、凜は申し訳なさそうに怖ず怖ず
と手を上げる。

「多分私…似たようなの…出来ると思う。」

「なん…だと…。」

啞然とする讓治郎を余所に、てちてちと彼から距離を取った凜は、
目を閉じてゆっくり、ゆっくりと息を吸い込む。

「コオオオオ…。」

全身の血管1本1本…その隅々に酸素を行き渡らせるように意識
を集中。

自身の中にある『それ』をあるがままに受け入れる。

自身の身体に、異物である何かが巡るのがわかる。

だかそれを拒まず、万物を受け入れる。天然自然の真理。

それこそ…

「神気…合一…ッ!!」

瞬間、周囲の空気が爆ぜた。

まるで凜を中心とした竜巻のように、砂埃が舞い上がり、

草木はその葉を大きく揺らし、
讓治郎の肌をピリピリと刺す。

そして、力の発動を示すように、前世の義妹エリゼのような艶やかな背程
までの髪は、白銀に染まり、両の眼は焰のように朱く染め上がる。

(ほう、これは…『鬼』の力…！)

前世でリインがギリアスから移植された心臓に宿していた『黒』の
力の一片であり、異能。『黒』の贄として選ばれたリインの一種の副作
用。その力はその名の通り、この世界における鬼の力と謙遜ないほど
に身体能力を高められる。

だがあくまでもそれは前世でリインの身体のことであり、今の凜は
紛れもなく何の変哲も無い、前世の記憶があるだけの人間。鬼の力を
持つことはないはず。

「なぜ…鬼の力が使えるのだ？今のお前は…」

「ああ、普通の人間のはず…。でも、身体の奥底で、感じるんだ…黒の
力を。」

ぎゅつと…以前の鬼の力の根幹であった心臓…それを確かめるよ
うに、凜は自身の胸を掴む。

以前のような痣はない。

だが確かに、自身の深い深い奥底にそれは確かに感じる。

それは自身を蝕もうと虎視眈々と狙っているのか、

それとも…

それを確かめる術は今はない。

流石に鬼の力の解放に慣れているとは言え、肉体的な負担は6歳児
の身体には少々大きいようで、以前のように長時間の解放は出来ず、
程なくして元の艶やかな黒髪に戻る。

「ふう…。」

「やはり長時間は無理なのだ。無茶はするな。」

「ああ…、でも何とか元々の位には使いこなしてみせるよ。」

「そうではない。その力は黒の因子に身体を委ねることで、身体能力
の向上を図っているに過ぎん。いつ、何時お前の精神が浸食し、蝕ま
れるかわからんだ。乱発はやめておいた方が良い。…何せ今のお

前の心臓は、何の変哲のない、普通の臓器なのだ。以前とは全く同じように行くわけではないのだぞ。」

「…善処するよ。」

「それは、あまり当てにならない返事の仕方ではないか。」

呆れる今のギリアス…もとい、讓治郎の精神には、前世のような黒からの浸食はない。以前の彼ならば、自身の目的…黒の殲滅のために、自分自身は元より、実子たるリインですら贄として、駒として扱う、正に二つ名の鉄血に相応しい考えを通していただろう。

だが今の彼は、唯々前世で喪われた自身の子供との掛け替えのない時間…それを取り戻すかのように、リイン…凜との掛け替えのないやり取りに、忘れかけていた家族との幸福を噛み締めていた。だからこそ、凜に対して心配性…やや親バカと化しつつあるわけだが。

「ならば、全集中の呼吸…それを八葉一刀流に活かせるよう、そして鬼の力に依存せぬように鍛練を積み。それは必ずやお前の切り札となるろう。」

「そうだな…確かに神気合一を頼みにし過ぎるのも考えようか。わかった、父上の言うとおりにするよ。」

「フフフ…ならば一つ、親子の触れ合いとして稽古を付けてやろう。」

その後、互いに服がボロボロになるまで呼吸法と剣術の鍛練を積んだ2人は、一家のヒエラルキートップに立つ千代による、それはそれは恐ろしい折檻を受けたという。

その時の讓治郎…鬼殺隊でも柱に並ぶとされる大の男の彼とは思えぬ程に小さく、尻に敷かれた男の鏡のようだったと、後に凜は語る。

第3話 『藤襲山へ』

深く、深く息を吸い込む。

酸素を、五臓六腑に、全身に遍く広がる血液に、細胞に染み渡らせるように。

身体が熱くなる。

心臓の鼓動が早くなる。

「全集中…」

ゆっくり、少しずつ息を吐き出す。

鍛練により、強靱と化したその肺は、多量の空気を取り込み、そして吐き出すことを可能とする。

その膨大な酸素は、彼女の身体能力を一時的とはいえ飛躍的に高めてくれる。

「閃の呼吸 漆ノ型 無想覇斬!!」

踏み込む。

幼き日の式ノ型。それを上回る速度で。

成長した凜のその健康的な足から発せられる踏み込みは、一剣士としての範囲を超えている。

それ程までに洗練され、そして疾い物だった。

「斬ッ!!」

地に立てられた直径二尺はある太い丸太をすれ違い様に居合一閃する。

一閃の後、振り切った刀を鞘に納刀すると、やや遅れて、無数の斬撃が丸太を細切れに切り刻んでいく。気付けば、丸太は数寸の細かな木片と化し、小高い山のように切り刻まれて積み上がっていた。

「よし…型の勘はあの頃と謙遜ない…!」

確かな手応えに、凜は思わず頬を緩める。

讓治郎から教わった呼吸法。それは凜に確かな恩恵をもたらしていた。

成長するに連れて、女子として、男子に多少なりとも見劣りし始める筋力。それを呼吸法で埋めることが出来、元来リインが持っていた

パフォーマンスを発揮することが出来ていたのだ。

「うむ…見事な太刀筋よ。流石は剣聖。やはり女子となってもそれは健在か。」

「これで、父上から見て合格で良いのかな？」

「…致し方あるまい。危険ではあるが、今のお前の実力なら無事突破できよう。」

娘を危険な地に向かわせるのは、子を思う親として承諾しかねるところだが、凜の素養と想いを無為にするのもまた勿体ない。故に讓治郎は凜の希望を？んだ。

「行くが良い、我が娘よ。最終選別…藤襲山へ…！」

「はいっ！」

暁葉 凜 11歳

父と母に見送られ、鬼殺隊入隊への試練たる最終選別を突破すべく、藤襲山への旅路に着いた。

鍛えた足腰と、強靱な肺を用いた呼吸法で、準備運動がてら藤襲山への旅路をひた走る。その速度たるや、一昔前の飛脚も真つ青になるほどのものであり、とても11という少女が出せるものではない。歩けば1週間は掛かろうかという距離を、凜は1日足らずで藤襲山へと辿り着いた…と言うより辿り着いてしまった。

「…ふう、流石に半日以上走り通しは堪えたな。」

所狭しと藤の花が咲き誇る山道を歩きながら、少しばかり上がった息と、ようやく気怠さを感じ始めた足をクールダウンさせる。

「それにしても…見事な物だな。」

視界一面に広がる藤の花は、吹き抜ける夜風に揺られ、空から刺す月光に照らされて、この世の物とは思えないほどに幻想的な物だった。

「こんな花が…鬼を退けるなんて、正直信じがたいけど。」

讓治郎から教わった鬼に対する知識。

その1つに藤の花は鬼を退ける効能がある、と言うもの。

それ故に、藤の花は魔除けの花と世間ではこそぞ噂話になっていくとかいらないとか。

ともあれ、この藤襲山は、その藤の花と鬼の性質を利用して、まるで结界のように山を囲っており、その中に鬼をある程度捕らえて放っている。その结界の中で1週間生き延びること。それが最終選別の合格基準だ。鬼といえども、そこまで実力が高いものでもなく、鬼の中でも下から数えた方が早いぐらいの弱い鬼だ。

しかし弱いと言えども鬼は鬼。その身体能力は人とはかけ離れて強いものなので油断は出来ない。

だからこそ十全な準備をしておくに越したことはない。

「……ここか。」

物思いふけりながらしばらく歩けば、開けた場所に出た。藤の花が咲き誇っていた山道とは違い、土が露出して、人の手が入ったことが窺い知れる。その証左に、石畳が敷かれ、極めつけは鳥居のような朱い柱が手前と奥に1対ずつ立てられていた。

「朱い柱に……石畳。父上が言っていた場所はここで良さそうだ。」

問題なく辿り着けた事に安堵しながら、ざっと集合地を見渡す。見た所、誰も来ていないようだ。

「……私が一番……みたいだ。」

これから『背を預け合って1週間、共に生き延びる仲間』はまだ来ていない。

それもそうだろう。

今日は最終選別の前日なのだから。

「……正直、目測を見誤ってたなあ。もう少し掛かるかと思ってたら、予想外に早く着くんだからなあ。」

まあそれだけ自身の身体能力が向上していた証拠なのだろう。ここは前向きに捉えることとして、凜は広場の端にある藤の木の幹を背に座り、袋に包んでいた刀を取り出す。

「……これが……日輪刀。鬼を滅する刃。」

年中陽光が射すと言われる陽光山で採掘される猩々緋砂鉄と猩々緋鉾石を原料として打たれた、日の力を宿す刀。

凜が今持つそれは、父である讓治郎が、いずれ最終選別に向かうであろう凜のために、自身が最終選別で振るった日輪刀を整備したものだ。その刃たるや、まるで打ち立てのように刃が煌めき、刃毀れ一つ無い。業物と言うに相応しい一振りだ。

「なんか…心強いな。父上が一緒に戦ってくれるみたいで。」

これから、生きるか死ぬかの戦場に赴くことになる。前世では幾度となく命の遣り取りをして、慣れたくはないが慣れてしまっていたこの感覚を、11年ぶりに思い出し、思わずぶるりと震える。

これは武者震いか？

それとも、恐怖から来るものか？

どちらにせよ、黒の情報を掴むためにも、この最終選別を突破して鬼殺隊入りを果たす。

その為にも生き残る。

何としてでも。

確固たる想いが、手の震えを自然と収めていく。

この世界に来たのは、黒を滅するためなのだ。ここで足踏みしていは、いつまで経っても奴に刃を突き立てることは叶わない。

「…よー」

決意を新たに、凜は日輪刀を手にして構え、全集中の呼吸を使う。

まだ時間はあるのだ。

少しでも実力を高めて、少しでも生き残る可能性を高める。今の凜に出来ることはそれだけ。

嵐の前の静けさか。

空を刃が絶つ音が、風で揺れる藤の花の音と共に藤襲山を支配していた。

そして…

「ようやく…最終選別だな。」

「そうだな。長かった。」

「ここで死んだら元も子もない。男なら、必ず生き残って合格し、師範であるあの人に報告するぞ。」

「ああ。元よりそのつもりだ。」

穴色と、そして黒髪の少年もまた、最終選別に向けて、藤襲山に入山していた。

第4話 『最終選別』

その刃は鋭くも流麗だった。

狐の面を側頭部に付けた宍色の髪少年：錆兎は目の前で振るわれる型に、思わず見とれる。

黒の髪を振るいながらの、素早い剣閃と、洗練された動きは、彼に幼いながらもその力量を推し量ることが出来た。

「…凄まじいな。」

隣に居た同門で弟子の黒髪の少年：富岡義勇も思わず口にする。そこまで口数も多くなく、そして口下手な彼が素直に賞賛した。

積み重ねた年月があまりにも違う。

自分達よりも少し幼い外見にも拘わらず、剣を振るうその佇まいは、明らかにそれを凌駕している。

「…ふう。」

一頻り型を振るい終えて、一息つく件の少女。あれだけの動きをしたにも関わらず、薄ら汗を浮かべてはいる物の、呼吸の乱れは見られない。それ程までに肺が強靱に鍛えられている証左なのだろう。

「あれ？貴方達も最終選別を受けるのかな？」

こちらに気付いた少女が日輪刀を鞘に納めると、額の汗を拭いながら尋ねてくる。

その問いでようやく我に返った錆兎は、頭を振るい、気を引き締める。

「あ、ああ。そのつもりだ。それにしても随分早くに君は来ているんだな。俺達も大概早いと思っただけか？」

「恥ずかしながら、早くに出過ぎてね。時間があるならと型の練習をしていた次第なんだ。」

「殊勝なことだ。」

二人目の彼の声に、凜は何処か懐かしさを感じながらも、2人の力量を推し量る。

その身に纏う気や、呼吸の仕方、体格、仕草一つ一つに目を光らせれば、成る程確かに、最終選別を受ける気概と共に、緊張も見て取れ

る。そして実力も、恐らく自身より1つ2つ上であろう彼らは、同年代と比べて高い実力を備えている。きっと良い師に育てて貰ったのであろう。

「…と、自己紹介が遅れたな。俺は錆鬼。水の呼吸を収めてる。…で、こつちが。」

「…義勇だ。」

「…義勇、男ならもつとしつかりとした声で自己紹介くらいしろ。」
「必要ない。」

「…こんな感じで口下手な奴なんだが、よろしくしてやって欲しい。」
なるほど、声色こそ似ていても、性格はまるで逆のようだ。彼は口数が少なく、冷静で、そして少し素っ気ない性格なのだろうと、凜は何となく（勝手に）理解する。

「私は…暁葉 凜。修めてる呼吸法は…閃。よろしく頼むよ。」
「閃の、呼吸？」

聞き慣れない呼吸法に、錆鬼と義勇は互いに目を合わせ、目をパチパチと瞬かせる。

炎、水、風、雷、岩…

基本的にこの5つの呼吸法が鬼殺隊では主流となっている。そこから派生し、様々な呼吸法が芽生えていた。2人の中でも、閃の呼吸というのは、恐らくその派生の物なのだろうという予想が過る。

しかし、凜の中でそれは違った。全集中の呼吸を用いて行う八葉一刀流。唯それだけの物として名付けただけだ。そして頭の一字は、八葉一刀流を収めた者…剣聖には名乗る二つ名が与えられる訳だが、凜が前世に名乗ろうかと思っていた候補の1つである、『閃』を持つてきただけに過ぎないのである。

「まあ…聞き慣れない呼吸法だろうね。私の我流な訳だし、仕方ないか。」

だがここは前の世界とは違う。ならばこちらの型に当てはめることで違和感を無くすのが定石なのだろう。

郷に入っては…と言う奴である。

だが凜としては、八葉一刀流を丸々使って、全集中の呼吸を合わせ

ただけで我流などとは、師であり、劍仙と名高い『ユン・カーファイ』に申し訳ないやらなんやらで、図らずも苦笑いを浮かべる。内心で凜は、(すいません、老師)と届くとも知れない謝罪をしておく。

ともあれ、我流を扱う少女と会えたことにより、鎗兔に興味を持たれて打ち解けてしまうとは、よもやよもやである。

「ともあれ、先程の剣閃を見るに、共に戦う身としては頼もしい限りだ。最終選別、互いに生き残ろう。」

「元よりそのつもりだよ。義勇も、頑張ろうね。」

「人の心配をしている身か？」

「……義勇がすまない。」

「は、ははは……。」

どうにもこの義勇と言う少年は、こちらの問いに対して突つ慳貪な返事しかない。単に人見知りなのかと言われればそうではなく、圧倒的に言葉が足りないのだ。

先程の言葉も、義勇の本心としては、

『人の心配をして自身を蔑ろにするな。自分の身を最優先にして生き延びろ。それ以外にはないはずだ。』

と言いたかったのだが、謎の義勇フィルターによってこうなってしまうていたりする。

ともあれ、こうして打ち解けた？3人は、軽く身体を解す傍ら、軽く打ち込み稽古をしたりと最終選別に向けて入念な準備を熟している。

凜にとって打ち込み稽古の相手は、讓治郎意外で初めてだったので、心なしかワクワクしていたとか何とか。

そして、

あつという間に『その時』は来た。

「刻限になりました。皆様…この度は鬼殺隊最終選別にお集まり頂き、心よりの感謝を致します。」

ポツリポツリと参加者が集まってきた藤襲山最終選別会場。その時を迎えると、何処よりか着物を装いに、白く美しい髪を靡かせた美女が、奥の柱の傍らで言葉を発した。

「ここより先の藤の花が途絶えた先に、生け捕りにした鬼が放たれております。この敷地内で皆様は7日間生き残ること。それが鬼殺隊入隊合格条件となります。」

鬼。

その単語を改めて聞いて、誰かがゴクリと固唾を飲み込む。

夜な夜な人を喰らう怪奇…鬼。

それと今から相對し、生き延びねばならない。

その事実を突き付けられたのだから。

「願わくば…ここにおられる皆様が、1週間後に1人として欠けることなくお会いできますよう、心よりお祈りいたします。」

「それでは…御武運を。」

女性が道を空けるように傍らに退けば、1人、また1人と柱の間をくぐり抜け、試験場へ足を踏み入れていく。

いよいよだ。

凜としては、知識で鬼というものは知っていても、実物を見たことはない。

未知の存在との邂逅に、少しヒヤリとした物が頬を伝う。

だがこの世界に来た理由。それを今一度心にしっかり止め、大きく息を吸う。

(…ここから、私が父上と共に前世からの本懐を果たす第一歩…！)

『黒』を討つ。

その為の一手。

「行こう、鏑鬼、義勇！」

「…ああ。」

「良い気迫だな凜。俺も負けては居られない。男として！」
藤襲山最終選別…開始

第5話 『鬼狩り』

「ヒヤッハー!!」

「新鮮な肉だア!」

(藤の花の) 長いトンネルを抜けると世紀末であった。

人外化した肌の色に、鋭く尖った犬歯と爪、見るからにイッてしまっている目。

これが鬼だった。

「しかも女だア! 女は俺が頂くぜエ! 若エ女の肉は柔らかくて旨えんだ!」

「ちっ…! じゃあ俺はお面の奴2人を貰うぜ…文句はねえな?」

「何を私達が食われる前提で話してるんだか。」

「全くだ。」

既に勝ちの未来しか見ていない鬼2人に、凜は思わず溜息を零す。

彼女が想像していた鬼は、前世では暴走した自身のように、禍々しく、そして殺気立ったものだったのだが、目の前の鬼は、餌を目の前にしたケダモノのようだった。

「女ア! 俺様がペロリと頂いちまうぜエ!」

「全集中 閃の呼吸 伍ノ型 残月」

飛びかかってきた鬼を半身ずらして避けながら、腰撓めに構えた刀を一閃して抜き放つ。

ザン…と言う斬り裂かれる音と共に、地を転がっていく鬼の頭部と胴体。何が起きたのか、首を切られた事実しかわからないままで、女好き(仮定)の鬼はまるで灰のように粉々になって消え失せた。

「全集中 水の呼吸 壺ノ型 水面斬り」

もう片方の鬼も、義勇の一閃によって敢えなく灰と化した。

実に危なげなく、そして余裕の勝利。

「…やるな。」

「そっちこそ。見事な一閃だね。」

「…俺の出る幕はなかったか。」

男らしさを求める錆兎は、自分こそ最前線に立たねばと思う矢先、

女子と弟弟子に先を越されてしまったことに少々苦笑いを浮かべる。

「だが、存外何とかなる。これぐらいの鬼ばかりなのか？」

「いや…油断はしない方がいい。」

すこしだけ心に余裕が生まれた義勇の言葉に、凜は釘を刺す。

さつきからぞわぞわと、この藤襲山に漂う空気に交じった異質なものの…それが凜に警笛を鳴らしている。

「何となく…何となくだけど…嫌な予感がするから2人とも、気を引き締めて行こう。油断なく、ね。」

「そう、だな。俺達は初めて鬼と戦うんだ。努々油断しちやならない。」

特に労せずして鬼を討てた事による慢心を取り除き、今一度気を引き締める3人。

いつ、何処から襲われるのかわからない。その時間が一週間も続く。

その恐怖心が、3人の神経を研ぎ澄ませていく。

「凜、義勇。1つ考えがある。」

「……………？」

「ここは3手に別れ、各々で鬼を討伐しながら、他の参加者を援護する、と言うのはどうだろうか？」

錆兎はいう。

3人だけで固まっているよりも、より多くの参加者を助けることで、互いを援護し、より大人数の生存性を高める、と言うものだ。

「でもそれだと、一人一人の危険も上がるんじゃない？」

「怖いのか？」

「ここで義勇である。」

「怖いのなら、下がっている。」

「(ブチッ) 怖いわけ…ない！」

煽りと受け取った凜は、声高らかに義勇の言葉を突っぱねる。

ちなみに…

義勇としては『戦えないなら下がっている。死なないことが大前提だ。』と思っていたのだが、案の定である。

「それだけの大声が出せるなら問題ないな。」

「問題ないものにも、元からそんなものない！」

「ムフフ……。」

義勇が何やらニヤけている。

凜の気迫が頼もしいとでも思っているのだろうが、見る側からしてみれば、正直ドン引きの笑い方である。

「では……一週間後にここで会おう！」

錆兎の声を皮切りに、3人は散開する。

そうだ、ここで戦っているのは、将来共に戦う輩ともがらなのだ。彼らを助けずしてどうするのか。

怖いはずなのに、自身らの生存性を高めるよりも、他の隊員候補を助けることを考え付く錆兎の勇氣には、熟々尊敬するべき物だ。

彼のような人間が、きつと鬼殺隊の団結力を高めていくのだろう。

「じゃ……錆兎の期待に応えないと、ね！」

早速目の前に鬼が居た。見るに、候補者が一人襲われている。腰が抜けたのか、木の幹を背にして座り込み、威嚇のつもりなのか日輪刀を鬼に対して突き出している。

このままでは彼の身がどうなるのかは、火を見るより明らかだ。

だが距離がある。

鬼が振り下ろさんとしている腕が、彼を引き裂くまでに間合いを詰めることは叶わない。

ならば……！

「全集中 閃の呼吸 陸ノ型 緋空斬！」

鞘から神速の抜刀と同時に、生まれた斬波を横一線に飛ばす。

抜き放たれたその真空の刃は、一直線に鬼に迫り、その頸を両断する。

「ほへ？」

間の抜けた声が出た。

今自分は追い詰めた獲物を前にしていた。

最後の威嚇とばかりに刀を突き付けていて、そんな小動物のような奴を絶命させんとしていた。

そんな矢先、自身の視界が宙を舞った。

否、

頸が宙を舞った。

それを理解したのは、目の前に紺の袴を靡かせて迫る、剣鬼の姿。鬼が最期に目にしたのは、その光景だった。

「斬ッ！」

「…ふう。」

間一髪。

距離をとった状態で攻撃出来る緋空斬が無ければ間に合わなかった。

しかも、日輪刀を直接敵に当てる事が出来ないので、緋空斬で鬼の頸を切つても、奴らに対して致命傷を与えることが出来ない。精々出来て牽制程度だろう。

チン…と鏢と鞆口とが奏でる音を鳴らしながら、凜は型の扱いを改めて考え直す。

実戦だからこそ、型の有り様を考察できる。またとない貴重な機会だ。

ともあれ、

咄嗟の緋空斬で助けられた命があるのもまた事実。

「その…大丈夫ですか？」

腰を抜かした隊員候補に、凜はそつと手を差し伸べる。

一瞬、何が起こったのかわからないのか、彼はポカンと凜を見詰める。

何せ先程まで死が目の前に迫ってきていたのだから、こうなるのも致し方ないだろう。

「えつと…。」

「あ、ああ！大丈夫！大丈夫だとも！」

凜の手を取ることもなく、機敏な動きで立ち上がる少年。どうやら抜けていた腰も問題ないらしい。

「そう。怪我とかはない？」

「大丈夫！ちよつとビックリして、腰を抜かしてただけさ。もうこんな醜態をさらしはしない。」

さつきまでマジビビりだったにも拘わらず、随分と頼もしい言葉が出て来るものだ。凜は思いながらも、腰の抜けたままでないだけマシかと一先ず安堵する。

「大丈夫なら良いよ。じゃ、私は行くから…お互い一週間、頑張つて生き残ろう。」

そう言い残して去って行く凜。

風のように鬼を斬り、そして風のように去って行く。

そんな姿は彼の目には何処までも焼き付いていた。

「…可憐だ。」

そんな言葉を掻き消すかのように、彼の黒くさらさらとしたキューティクルヘアを風が撫でていた。

第6話『手鬼』

思いの外、一週間と言うモノは長い。

一晩中、周囲に気を張りながら他者を援護し、そして山の中を駆け回る。

鬼その物の遭遇率はそれ程高くはなかったが、どれだけの数がこの山に居て、いつ襲ってくるのかわからない状況に、凜は気を抜くことが出来ずに居た。

朝になつたら日が当たる場所で休息を取り、そして再び日が暮れると、山を走り回る時間が始まる。

初日こそあまり苦ではなかったが、緊張の糸を常に張るといのはやはり集中力を必要とするため、日が進むに連れて少しずつ、少しずつ凜の精神を蝕んでいく。

「ぜえ……ぜえ……！」

それは、彼女だけではない。

彼もまた、徐々に限界が近付いてきていた。

そして目の前に迫る鬼は、明らかに今までの鬼と一線を画する物だった。

「キヒ…キヒヒ…今年も来た…俺の可愛い可愛い仔狐が…！」

ソイツの体格は異常なモノだった。

背丈だけでも、常人の三倍はあろうかという巨体。

肥大した胴体。

そして身体や弱点である頸を護るように、幾本にも生え増えた腕。

「くそ…こんな時に…異形の鬼とは！」

対峙する錆鬼の顔に焦りが生じる。

異形の鬼

人を食って成長する中で、身体が人のそれとはかけ離れた形に変わってしまった、変異種の鬼である。

その力はそのらの鬼よりも数段強い。

力も、そして堅さも、選別を受ける剣士には明らかに荷が重い。

「だが…ここで退くわけにもいかん！男として！」

だが彼は何処までも勇敢だった。

今の状況で立ち向かおうとする彼を、人は蛮勇と言うだろう。

しかし、今の彼には退けない理由がある。

「キヒヒ…粹がるねえ…尻尾巻いて逃げないのかい？」

「逃げるわけがないだろう！友を見捨ててなど、男として言語道断！」

そう、彼の背後には、地に伏せる彼の友人…義勇が居るのだ。

異形の鬼…手鬼の不意打ちによって気を失ってしまった義勇。

そんな彼を置いて逃げるなどと、錆鬼にとって元から選択肢はないのだ。

「ならば選択肢は1つ！貴様を討ち、俺も義勇も生き残る！」

「おーおー…勇ましいことだ…鱗滝の教え子は、誰も彼も怖い物知ら

ずだねえ…」

「…っ！鱗滝さんを…知っているのか？」

鱗滝左近次

元鬼殺隊水柱で錆鬼と義勇にとつての師。

その彼を何故奴が知っているのか？

「キヒヒ…知っているも何も…俺をここに閉じ込めたのは、あの鱗滝
なんだよなあ…。」

「鱗滝さんが…？」

「忌々しい…忌々しいイイイ！だから俺は奴への復讐として、そのお
面をつけた餓鬼を食い散らかしてるんだよなあ！」

義勇、そして錆鬼の頭に着けた狐のお面。鱗滝はこれを厄除のお面
として最終選別に向かう弟子に着けさせていた…。

つまり…

「キヒヒ…気付いたか？お前で12人目だ。鱗滝の弟子。皮肉だよ
なあ？アイツは厄除と思ってたみたいだけど、実際は厄災のお面だっ
たんだよ。俺の餌としての目印になる…な！」

「貴様ああ!!」

よもや…鱗滝が弟子を無事にと願って彫ったお面が、最終選別から
帰らぬ要因になっていたなどと…！そんな事を鱗滝が知れば、厳しく
も優しい彼はきつと深く嘆くだろう。

だからこそ、

「この禍根はここで断つ！他の誰でもない、鱗滝左近次の弟子として！男として！」

頭が、腸が煮えくり返るかのように熱い。

身体が、そして血が燃えるように滾る。

異形の鬼とて関係ない。

悪鬼滅殺

その鬼殺隊の心得のままに、この鬼は斬る！

「全集中」

「いいよ、来いよ！猿が人間に追いつけるかア？お前は俺にとっての猿なんだよ餓鬼イイイ！」

絶対的自信。

もはや勝利を信じて疑わない手鬼は、その特徴である数多の手を、まるで植物の蔦のように伸ばし、錆兎を捕らえんとする。

「水の呼吸 肆ノ型 打ち潮」

だが錆兎は伊達に鱗滝の元で厳しい鍛練を積んできたわけではない。

間合いを詰めながら自身に迫る数多の腕を、淀みない連続した斬撃で瞬く間に斬り落とす。

いくら異形の鬼といえども、斬った腕は一瞬での再生は出来ない。だからこそその暇に一気に間合いを詰めて勝負を着ける！

「ん、んいつ…！」

「その頸…討ち取る！」

「や、やられる…！」

眼前に迫った穴色の髪。今正に、一門の仇である手鬼の頸を取ったとばかりに、錆兎は勝利を確信して化いた。

そして…

「なんて…な！」

それは油断となり、注意力が散漫になる。

ボコリと錆兎の足元の土が隆起する。

気付いたときには既に遅かった。

地の中から、まるで植物のように生え出でた数多の手は、錆兎の身体を掴み上げると、容易く拘束しようとその指を伸ばす。

咄嗟に飛び退いた錆兎だったが、敢えなく足をその手で掴まれ、地面に引きずり下ろされて強かに背を打つ。

吐き出される肺の空気。

一瞬揺らぐ視界。

内臓が傷ついたのか、口の中に鉄の味がじんわりと広がっていく。

「つ・か・ま・え・たあ〜！」

「っ〜っ！」

ニタリと手鬼はほくそ笑む。ギリギリと締め上げられる足。このままでは程なくして鬼の握力によって潰されるか縊り殺される。

どうにか、どうにかしなければ…。

しかし先程の衝撃で呼吸が乱れている。

これではまともに全集中の呼吸が使えない。

万事休す…

(俺も…兄弟子のようになるのか…!?)

師への復讐。

その為に。

そして自分のみならず、後ろにいる義勇をも…。

今コイツを討たねば、次に最終選別を待つ彼女をも巻き込んでしまう。

(認め…られるものか…!)

血が熱くなる。

自分を育ててくれた師を、

共に駆け抜けてくれた親友^{とも}を、

自分達を慕ってくれた妹弟子を、

共に生き残ろうと約束した輩^{ともがら}を、

裏切るなど!

「俺は…生きる! 貴様を倒して!」

「この状況で何が出来る? 詰みなんだよ、お前達は! 安心しろ。一人寂しくならないよう、後ろの餓鬼もすぐ送ってやる!」

手鬼は腕をいくつも束ね、人の胴を遙かに上回る太さの腕へと変えると、錆兎の頭を潰さんとその掌を大きく広げる。

このままでは死は免れないのは、火を見るより明らかだろう。

(呼吸を整えろ……無理矢理でも良い……！一度……一度だけでいい、先ずはこの状況を打開する為に……！)

ヒュウウウウ……！

未だダメージの残る肺を酷使し、全集中の呼吸を使う。

どう転ぶにせよ、今掴まれている足を何とかしなければ、やられるのを待つことしか出来ない。

ならばこちらから状況を打開する。

「全集中 水の呼吸 壱ノ型 水面斬り！」

幸い、腕の剛性はそれ程高くない。普通の斬撃なら強固な物なのだろうが、呼吸法を用いれば何とかなる堅さ。存外あっさり自身足を拘束する腕を切断できた。

手鬼も手鬼で、よもや先程の状況で呼吸法を用いてくるとは思わなかった。やはり忌々しい鱗滝の修行という物は強い隊士を育てている。それが手鬼を更に苛立たせていく。

「逃がすかあつ！」

再び腕を数多に変えると、距離を取ろうとする錆兎を逃がすまいと伸ばし迫る。

少しずつ呼吸を整えてきた錆兎は、迫り来る腕を迎撃せんと呼吸法を使う。

「全集中 水の呼吸 参ノ型 流流舞い」

移動と攻撃、それらを一体化させた型である流流舞いで距離を取りながら迫る腕を斬り落としていく。

ともかくにも、今は体勢を整えねばどうにもならない。

錆兎の受けたダメージは決して小さくは無い。しかし、まだ動けないわけではない。

攻撃の暇に少しずつ……少しずつ呼吸を整える。

伊達に狭霧山の薄い空気の中で鍛練を積んだわけではない。常人よりも遥かに早い速度で整息していく。

『全集集中』？『呼吸法』だと？フーフー吹くなら…このおれの為に尺八でも吹いているのが似あってるぞッ！」

手鬼は焦る。

攻撃頻度を上げようにも、切り払いが早すぎて徐々に攻撃の密度が下がってきている。

明らかに、これまで食べてきた鱗滝の弟子とは一線を画する技量だろう。

だからこそ、手塩をかけた弟子を食われることで、鱗滝への復讐はより高みへと至れるのだが。

「いい加減…食われろおお!!」

破れかぶれ。

そう言わんばかりに、手鬼は出せる限り数多の腕を生やすと、一斉に鎗兎へと肉薄させる。

「この瞬間を待っていたんだ!」

好機とみた鎗兎は跳躍する。

『道』は出来た。

ならば後はそれを辿るのみ!

「全集集中 水の呼吸 玖ノ型 水流飛沫・乱」

手鬼の伸びた腕を、まるで舞を舞うかのように躲しながら斬り捨て、その距離を詰めていく。

その動きは、思わず手鬼が言葉を失う程に流麗であった。そして、

気付いたときには、穴色の髪は眼前にまで迫ってきていた。

「全集集中 水の呼吸 壺ノ型 水面斬り」

その異形の頸を狙って放たれた斬撃。

甲高い音と共に、二人の決着は呆気なく着いた。

「クヒ…クヒヒ…!」

不気味な笑い声を残して。

第7話 『されどその刀は烈火の如く』

「クヒ…クヒヒ…」

水面斬りは確かに入った。

その剣閃の軌道は頸を跳ねたはず。

にも拘わらず、目の前にいる異形は、相も変わらぬ嫌らしい笑みを浮かべて健在だった。

そして錆兎の手には、およそ刀身半ばで折れた日輪刀。恐らくは、普通の鬼と一線を画する頸の強固さに加えて、錆兎の日輪刀が一週間の選別の中で、数多の鬼を斬った事によって刃が摩耗していた。

「残念だったなあ〜?」

刀身半ばで、物の見事に折れた日輪刀。

唾然とする錆兎。

渾身の一撃を難なく耐えて心を折り、さらに唯一の武器たる日輪刀を折ることで戦闘を不可能にする。

無力感と絶望に打ち拉がれる様を、手鬼は満足げに眺めて嫌らしい笑みを浮かべていた。

「鱗滝い〜！また一人、お前の弟子があのお世へ旅立つぞお〜！じっくり、じっくり手足を一本ずつもいで、苦しみながら逝かせてやんよお！」

諦めるな、男なら！

そう常々自身と相方に言い聞かせてきた錆兎。

しかしこの状況を男だからと打破できると考えられるほど、盲目的なものではない。

(鱗滝さん、義勇、真菰…)

巨大な腕が、少しずつ迫り来る。

それは正に命の距離。捕まれば最期、残虐無惨に命を絶たれる。

もう、為す術はない。

(凜…済まない。)

そつと、目を閉じる。

死が迫る最中で、錆兎の視界に数多の映像のようなものが一挙して

流れ出す。

走馬灯

幼き日に死した両親

そんな自身を拾い、厳しくも優しく育ててくれた鱗滝

ほぼ同期の弟子にして、無二の友である義勇

妹弟子で、自身達を慕ってくれる真菰

そして、この藤襲山で出会った新たな友である凜

まるでこの世との別れを惜しむかの如く、そして刻み込むかのよう
に。

済まない…皆。

「諦めるな！錆兎！男ならー！」

全集中 水の呼吸 捌ノ型 滝壺

張り上げる声が、自身を走馬灯から引きずり出す。

目を開いてみれば、紫の着物が視界を支配した。

「義勇…？」

「諦めるな…！俺達は、必ず生きて帰るんだ…鱗滝さん達の下に！」

ゴロリと転がる太い腕。

一閃されたそれは、縦への破壊力が強い滝壺によって、見事なまでの断面だった。

「惨めつたらしく逃げても良い！男なら生きることが諦めるな！生きて帰るといふ約束を守れ！」

「…ははっ！お前に男の何たるかを説法されるとはな。」

立ち上がる錆兎。

その目には最早諦観の色はない。ただただ生き残る。それだけの決意が滲んでいた。

「ほお？貧弱に気絶してたお前が俺の腕を斬り落とすとは、正直驚きだよ。」

「不意を突かれたただけだ。2度も同じ枷は踏まない。」

「いいねえ…その反抗的な目。へし折り甲斐がある。」

手鬼にとつて義勇が起きた程度など、それ程脅威ではないということなのか、未だ声色には余裕が伺える。

「宍色の餓鬼を殺ってから、じっくりと料理してやろうと思ってたが…抗う中で追い詰めるのもまた一興。」

奴にとつては殺すことはあくまでも結果であり、その過程をどうするか、どう愉しむか…それが大事らしい。

「先達の仇、ここで討つ！」

「やってみろ餓鬼イイイ!!」

どうやら2人を相手取るにあたって、質より量を取ったらしい。

太い腕をバラして、普通の人間と変わらない腕を、雨霰と言わんばかりに伸ばしてくる。

咄嗟に飛び退く錆兎。

しかし義勇は日輪刀を下段に構えたまま動かない。しかも閉眼しているときだ。

(義勇っ!?)

よもや避けないなどとは思えない。

だが義勇から感じる気配は、不思議と落ち着いていた。

例えるなら、穏やかな水面のような、静かで、平静としたもの。

(この一週間…俺はアイツの…暁葉の剣技を水の呼吸に応用できるか試していた。最初に出会ったときの剣舞…その中の2つを。)

伍と漆ノ型

残月と無想覇斬

居合抜刀による素早い反撃の一撃と、間合いに入った相手を一閃する一撃。

その二つが、相手の動きに合わせて柔軟に対応できる水の呼吸に組み込みやすいと感じたのだ。

(間合いに入った相手を須く『凧』ぎ、斬り伏せる)

ヒュウウウウ…

目の前の鬼が、兄弟子達の仇というのは、何となく動かなかった身体でも耳に入った。

その怒りたるや、錆兎に引けも取らぬほど、腸は煮えくり返っている。

なのに、頭の中は透き通り、不思議と落ち着いていた。手鬼の腕が、

まるで水の中で藻掻いて見えるほどに遅く感じた。

「死いいいねええっ!!」

「義勇くっ!!」

迫り来る十は超える数多の腕。

今から飛び退いても間に合わない。

万事休すか。

そう錆兎は顔を顰める。

しかし

「全集中

水の呼吸

拾壺ノ型

凧

瞬間、

眼前にまで迫ってきていた手鬼の腕は、見えない壁か何かにも阻まれたかのように切り飛ばされた。

人外の皮膚色をしたそれらは、物の見事にバラバラになり、血飛沫を撒き散らしながらそこらかしこに飛び散ったのだ。

「な、なんだ…？お前、何をした…？」

完全に勝ったと確信していた手鬼でさえ狼狽え、何をされたのか、何が起こったのかが理解できずに居た。

「凧いだ。それだけだ。」

(あの一瞬で…？何という高速の斬撃…！)

錆兎も手鬼と同じくして義勇の凧に呆気に取られる。

今の今までその片鱗すら見せなかつた新たな水の型。それをこの一週間で物にしたというのか。

(流石…流石義勇だ…！)

義勇の素養に驚きながらも、錆兎は心の奥がまるで打ち震えるかのように躍っていた。

この一週間でここまでの急成長。感嘆と共に、こちらにも負けるまいとする思いが湧き上がってくる。

そして出来たのは、手鬼の大きな隙。

かなりの質量を先程の手に回したようで、再生がかなり遅い。更に義勇の風が衝撃的な物なのは奴も同じだったようで、視線がこちらから外れている。

(呼吸を整えろ……乱すな……鱗滝さんの教えを思い出せ……)

水の呼吸はその名の如く、水のように柔軟に、あらゆる状況下で対応できるものだ。

それだけに常に平静を保ち、呼吸を乱さず、常々水面の如く穏やかでなければその真価を発揮できない。

「全集中 水の呼吸 壺ノ型……」

「馬鹿かあ！ さつき通用しなかったのをもう忘れたのかあ！」
効かない

そう確信した手鬼は攻勢に切り替える。義勇の風によって切り払われた手を回復させながら、先ずは錆兎を仕留めんとする。

だが今の錆兎に焦りはない。

先程まで怒りで燃え狂っていた心は、穏やかに……しかし確かに静かな怒りの炎を灯している。

『明鏡止水……水の呼吸を極める先はそこにある。』

師である鱗滝は言っていた。

雑念を取り去った先にある、ただ1つの思考。澄み切った心。そこそが明鏡止水。

錆兎の意識はただ1つ。

目の前の鬼の首を断つ。

唯それだけが身体を突き動かしていた。

不思議と刀を握る手にいつも以上の力が籠もる。

それは確かな感触で、そして勝利への確信。

「水面斬り」

折れた刀身。

にも関わらず、強い手応えでもなく、だが確かな感触と共に腕を振り切れた。

その一閃は流麗の一語に尽きる。

刹那

水面斬りの一閃、その剣閃の軌跡を追うように、旋風が周囲を薙いだ。

「あ…れ…？」

気の抜けた声だ。

振り切られた日輪刀と共に宙を舞う鬼の頸。

何が起きたのか、何をされたのかを理解できないままに、切り口からサラサラと灰へと姿を変えていく。

「おれ…しぬのか…？」

くらい…さむい…にいちちゃん…どこだよお……て…つないでくれよ……」

目が消えゆく僅かな暇に、手鬼はその異様な目に大きな涙を浮かべながらその体軀を灰と変えて散っていった。

(しようがねえなあ…ほれ繋ぐぞー)

そんな幻聴とも取れる声に包まれながら。

第8話 『再会』

「朝だ。」

「…そうだな。」

藤襲山に、陽光が差し込む。

7日目の朝。

希望の光。

その眩しさと暖かさに2人は目を細め、そして口許を緩める。

普段使わない型と、そして全身全霊の一撃を穿った2人は、最早立てる体力をも消耗してしまったのか、朝日に照らされながら大の字に地べたに横たわった。

「…長かったな。」

「ああ。…だが生き残れた。」

「日輪刀、折ってしまっただけだな。…これ、鱗滝さんに俺は骨を折られるのかな?」

「その時は折られよう。俺も共に。」

くつくつと笑いあう2人は、狭霧山で待つ師に思いを馳せる。

刀を折られたことを咎められるなら甘んじて受けよう。そして思いつきり叱って貰おう。それがこうして生き残れた者の特権なのだから。

「あ。」

「お。」

しばらく後、何とか歩ける体力を回復させて藤の花の広場に向かう中、2人は初日に別れた友人と合流した。

「生き残ったか。」

「まあね。…それよりも、2人ともいたくボロボロだけど…」

「異形の鬼が居てな。何とか討ち果たしたんだ。」

戻る道すがら無口な義勇に代わって錆兎が説明していく。

普通の鬼よりも二回りも三回りも大きな異形の鬼。ソイツが自分の兄弟子達の仇であったこと。

そして2人で協力し、刀を折りながらも頸を落としたことを。

「そうか…最終選別初日の予感はずいぶんソイツだったのかもね。」

「そう言えば言ってたな。嫌な予感がすると。」

「確証はなかったんだけどね。とにもかくにも、2人とも無事で良かったよ。」

見れば、ボロボロの義勇と錆兎に反し、凜はというと、所々汚れてはいるものの、衣服の乱れや破損は見られず、怪我という怪我もない。

これは一重に彼女の技量が、最終選別を受けた隊士候補の中でも抜きん出たものであることの証左だ。

「だが一週間で怪我を負わなかったお前は、やはり器が違うな。出世すれば、柱も夢じゃないんじゃないか？」

「はは……私はそれほど大層なものじゃないよ。ここでの戦いはこれから始まる長い長い鬼との戦いの一欠片。これからの任務で私なんかを凌ぐ人が頭角を現していくんだよ。それに、私は二人みたいに異形の鬼に遭遇してないんだから、怪我をしてなくて当然だよ。」

「…謙遜もここまで来ると、大概だな。」

「全くだ。」

「へ？…え？」

何処までも自分を誇らない凜に、義勇と錆兎は溜息と共に呆れながら、すたこらと先を行く。

そんな二人に凜は訳もわからず首をかしげるしかなかった。

しばらく歩くと選別会場の広場に辿り着く。そこで開始時よりも少し減った隊士候補の数を凜は目の当たりにする。死なせまいと走

り回ったものの、救えない命もあつたようで、凜はその表情に少し暗い影を落とす。だがそんな凜の心境を余所に選別開始の時と同じく、白髪の女性が登場して生き残った隊士達を労う。

無傷なものなど居ない。あるものは頭の出血を止めるために布を巻き、あるものは折れた腕を添え木で固定している。唯一凜が怪我を負うことなく突破できていたのだ。

だが白髪の女性は言う。今年の最終選別は、例年に比べて生き残った人数が多いことを。死した人が居ることは悼むべきであるが、こうして数多の有望な若者が生き残り、そしてこの場に生きていてくれたことを喜びたい、と。

そしてそんな彼、彼女等の前に、黒装束の人が大きな手押し車を押して、広場のご真ん中へと出て来た。その天井にはゴロゴロと、不思議な輝きを放つ石が数十個まばらに置かれている。

曰く、これが日輪刀の原材料になる玉鋼。

自身の半身になるそれをどれにするか自身で選んでほしい、と。どれも同じ石ころにしか見えない。

誰も彼もがどれを選べば良いのか解らず戸惑う。それは義勇や鏑兎も同じであった。

誰もが選び倦ねている中、1つの細く白い腕がおもむろに玉鋼を1個、選び取った。

「私は、これで。」

言わずもがな、凜である。

迷うことなく取り上げたその玉鋼を、女性はニコリと受け取り、包んでいく。

見た目は可憐ながら、実に漢らしい決断である。

そんな彼女の中に漢を見た鏑兎は、ブーツとしている義勇の手を引いて、文字通り直感で自身の玉鋼を選び取る。

義勇もその勢いに釣られて手近な玉鋼を選び取った。

そこからはまるで怒濤の勢い。我も我もと合格者が雪崩れ込み、まるで100年後のではあとで行われる妙齢の女性が巻き起こす戦争のようだった。

「各々、玉鋼を選び終えられましたね。では次に皆様に支給される連絡用の鴉…鎧鴉をおつけ致します。」

女性がパンパンと手を鳴らせば、藤の花の木々の中から次から次へと黒い鴉が空へと舞い上がる。その圧巻とも言える光景に誰もが呆気取られていると、訓練された鴉はそれぞれ割り当てられた合格者一人一人の元へと降下し、その肩や差し出された腕に駐まっていく。

「…カアア…朝餉ハ…マダカノ…?…」

何故か義勇の頭に駐まった鎧鴉はふるふると震えており、見た者にヨボヨボのおじいちゃんを彷彿させたとか何とか。しゃべるのに驚いたのはその後である。

そして

「これが…私の鎧鴉。」

手に駐まった鎧鴉。その羽毛は黒い鴉…と言うよりも、灰色だった。その目も何処か赤黒く、何処か懐かしさを感じる出で立ちだ。

「えと、私はり…」

「カアア、随分可愛イラシクナツタジャネエカ!見違エタゼ!」

「…へ?」

大正のこの時代に似付かわしくない言葉遣いの鎧鴉。そのギャツプに凜は思わず気の抜けた声が出てしまう。

「私、君に出会ったこと、あつたかな?」

「私!私!!ププ〜!オ前ガ私!笑ワセルナヨ〜!!」

流石の凜も少し苛立った。

何が悲しくてこの口調を笑われねばならないのか、好きでこんな口調になったわけではない。…よし、今夜は焼き鳥にしよう。

「マ…コノ俺ガ来カラニハ、『騎神』ニ乗ツタツモリデ、ドント構エテロヨ!『りいん』!」

「…全く、調子の良い鴉…へ?騎神…?リイン?」

随分と懐かしい言葉を聞いた。

この世界に来て11年。以前は毎日のように聞いていた言葉。だがそれは今となっては遠い昔で、この世界にその言葉を知るのは凜と、父である讓治郎のみのはず。

「ナンダヨ、俺ノコト忘レチマツタノカ!? 薄情ナ奴メ! 一緒ニ自爆シ
タ仲ダロ!?!」

「一緒に…自爆…?…まさか…まさかだけど。」

「オウ! ソノマサカヨ!」

どやつと胸を張る灰の鴉。その光景に、凜は…リインはあの共に
散った悪友が重なる。

「くろう・あーむぶらすと! マ、改メテヨロシク頼ムワ!」

よもやあのクロウが鴉になっていようななどは微塵も思っていな
かった凜は、しばらく開いた口が塞がらなかった。

第9話『一難去つて』

衝撃的なカミングアウト。

よもや悪友であったクロウが、人間ではなく鴉クロウに転生していたなどと、誰が予想しようか。

唾然とする凜を余所に、何食わぬ顔で彼女の腕の上で毛繕いならぬ羽根繕いをするクロウ。その動きは妙に手慣れ…もとい、羽根慣れている。

「どうかしたのか？」

「……なんでもない。」

先程まで頼もしく目を輝かせていた凜の目は酷く濁っており、死んだ魚を彷彿とさせる。

死んだ魚だけに、ソレを見た錆兎はギョツ魚と身を退いたのはここだけの話。

次は採寸。隊士服は特別な素材で作られるようで、身体の寸法に合わせたの特注らしい。隠と呼ばれる、まるで歌舞伎に出て来る黒子のような人々が、合格した人々の身体の丈を測っていく。流石に女の子とすることで女性の隠が対応してくれたものの、少し離れたところで採寸していた眼鏡の隠が、目を光らせてこちらを見ていたのは何故だろうか？

…ともあれ、隊士服の採寸を終えたことで、ようやく隊士として活動する為の前準備が終わった。それぞれ方々へ散っていく中で、錆兎と義勇も同じく下山の準備を進めていた。

「凜、お疲れ様だったな。」

荷を纏めた水の呼吸の二人が、同じく準備を終えた凜を労う。

今のご時世、刀の所時は御法度なので、細長い袋に入れて一見刀と解らないようにしている。

「そろそろ俺達は下山するが、方向が同じなら途中まで同行しないか？」

「いいけど…二人は何処に向かうの？」

「狭霧山。」

「狭霧山…？じゃあほぼ同じ方向だね。いいよ、一人で帰るのも何だか味気ないし。」

「義勇もそれで構わないか？」

「好きにすればいい。」

『カアア！モット愛想ヨク出来ネエノカ！コノ根暗メ！』

口数の少ない義勇に、クロウが痲癩を起こして、ボサボサのその髪を固い嘴でつえばみ始めた。

ともあれ、再びひたすら走るのも味気ないと感じるのも確かなので、凜にとつては有り難い話である。

藤襲山から暁葉家への道は、八割が狭霧山への道のりと重なっているのが幸いした。

こうして道すがら、各々の身の上や修業時代の話をしながら、行きよりもゆつくりと、行きの時よりも遅い速度で。疲労が蓄積しているというのもある。だが、これからともに戦う戦友のことを知りたいと言うのもあった。

そして途中で休憩を挟みながらほぼ一日掛けて、3人は狭霧山の麓の小屋へと辿り着いた。

「懐かしいな。」

「ああ。幾年帰らなかつたと錯覚するな。」

「あそこが、2人の家？」

「そうだ。そして俺達を育ててくれた恩師の家。」

懐かしそうに目を細める2人。余程思い入れのある場所なのだろう。そして育手への思いの深さもひしひしと伝わってくる。

「……………」

「……………」

「…どうしたの？早く会いに行かないの？」

「いや…いざとなると緊張してしまつてな。」

「ああ、鬼と対峙するよりも緊張する。」

何だこのヘタレは。

錆兎、緊張などものともせず突き進め、漢なら。

義勇、緊張するようなキャラではないだろう。

尻込みする2人に呆れる凜を余所に、ガラガラ：と古家の引き戸が音を立てて開いた。中からは、花柄の着物を纏った幼い少女が、水を汲みにだらうか、桶をえつちらおつちら抱えて出て来た。

「…真菰…」

ボソリと錆兎が呟く。

ほんの、ほんの小さな呟き。それこそ彼女との距離では到底聞こえないだろう程の。

だが、彼女はピタリと止まった。

まるで、聞こえているかのようにゆっくり、ゆっくりとこちらに目を向ける。

「錆兎…義勇……」

彼女は待っていた。

死と隣り合わせの鬼殺隊最終選別。

そこから2人が戻るのを。

だが鬼殺隊となるべく旅立った先達は、誰一人として帰ってこなかった。

帰らぬ弟子を待ち続け、師は人知れず涙を落とした。

そんな光景を目にしてきたからこそ、真菰も二人の身に何かがあるのではと言う予感すらあった。

もしかしたら…二人も…

だが、

二人は目の前に居た。

ボロボロになりながら、

それでも無事に帰ってきた。

「…ッッッ!!」

感極まった。

気付けば真菰は桶を放り出して駆け出していた。

帰ってきた、

帰ってきた!!

錆兎と義勇が…!

徐々に近づく二人。

このまま感動の再会か。
観客は誰もがスタンディングオベーションの準備に取り掛かる。

しかし、

はた、とあと一丈^{メートル}まで距離が縮まった所で足を止めた。

二人の無事に歓喜し、その胸に飛び込もうと考えたまでは、良くある感動ものの展開だろう。

しかし真菰は見てしまった。

見えてしまった。

三人目を。

ふっ…と口許だけ笑みを浮かべた真菰は、何を思ったのかクルリと踵を返すと、出て来た小屋へとひた走る。

そして

「鱗滝さああんっ!! 鯖兎と義勇が最終選別で女の子を選別してきたあああっ!!」

「?!?!?!」

ともすれば狭霧山に住まう野鳥すべてが驚いて飛び交わんばかりの大声で、真菰は宣った。

一方

「ほう…このような所に中華民国の店が出来ようとは…」

任務の先で鬼を斬った凜の父である讓治郎は、小腹が空いたことで、何処かの飯処で満たそうかと思案していた。

何を食べようかと悩む内に目に入ったのは、赤々とした店舗の色合いに、金箔によって店名を書かれた看板。

近頃隣国である中華民国の料理を出す店舗が少しずつ出来てきているとは聞いていたが、よもやこのような場所手巡り会えようとは思いませんでした。

「フッフフ…中々派手な看板ではないか。宇随が見れば喜ぶかも知れぬな。」

常日頃から派手や地味で物事を見る鬼殺隊員を思い出し、思わず笑みがこぼれてしまう。将来有望な隊員で、忍の技術を加えたあの戦いぶりは目を見張るものがあり、将来は鬼殺隊を支える柱となるであろうと讓治郎は期待している。

ともあれ、思い出に浸る中でも腹は減るわけで、鼻腔をくすぐる魅力的な香りに惹かれるように、讓治郎は中華料理店『紅洲宴歳館・泰山』へと姿を消した。

第10話 『お泊まり』

「ごめんなさい。」

木で建てられた小屋の囲炉裏の傍らで、真菰は見事なまでの土下座をしていた。

何せ最終選別に行っていた兄弟子二人が女を引っかけてきていたなどと盛大な勘違いをし、それを声に出して叫んでいたのだから。

「いやまあ…盛大に勘違いするのも仕方ないか。」

「心外だ。」

苦笑いする錆兎と裏腹に、それとなくムスツとしている義勇。

そんな中真菰側に座って、腕を組む水色の羽織を纏い天狗の面で素顔を隠した初老の男性…鱗滝左近次は、落ち着いた口調で口を開いた。

「真菰の勘違いは置いておくとして…」

「置いておくんですか!？」

「錆兎、義勇。二人ともよくぞ無事に戻ったな。」

その口調は落ち着きながらも柔らかく、そして慈愛に満ちていた。面で隠れて見えないけれど、その口許が緩められているのは想像に難くないだろう。そんな師の言葉に二人はただ微笑み返す。

「そして其方も…名は…」

「暁葉 凜と申します。」

「暁葉…? よもや其方の父は讓治郎と言う名では?」

「父を知っているのですか?」

「うむ…、彼奴は正しく獅子と呼ぶに相応しい漢よ。儂が現役の頃、幾度か任を共にしたことがある。年齢に似付かわしくないほどに戦場慣れし、肝が据わっておった。」

鱗滝の言う父の若き日の思い出話に、一瞬ギクリとなる。讓治郎の父は凜と同じく前世の記憶がある。更に言えば、讓治郎の前世であるギリアス・オズボーンは更に前世がある。リン達の住んでいたエレボニア帝国で知らぬ人は居ないほどの英傑であり、獅子心皇帝と謳われるドライケルス・ライゼ・アルノールの生まれ変わりなのだ。故に、

彼の精神年齢は前世と合わせるだけでも九十近い年数を重ねている為、目の前の鱗滝よりも精神が年上なのである。前々世を合わせるのと、ヘタをすれば百七十程の時を重ねているかも知れない。かく言う凜も、前世が享年二十歳だったので、精神的には三十路な訳だが。

「なる程…時折文を交わす中で、頻繁に娘の話をしておったが…其方の事であつたか。」

「えと…因みに、手紙に私は何と…?」

「む? いや何…父親からの愛情がひしひしと伝わってくる内容であつたよ。」

詳細は聞かない方が良さそうだ。言葉を濁している鱗滝の口調がそれを物語っている。

「先生。」

話の区切りと踏んだ錆兎が口を開いた。

「もう日が暮れてきています。このまま凜を一人夜道を歩かせるのも、野宿をさせるのも忍びない。このまま泊まらせてやっても良いでしょうか?」

「えと、錆兎?」

「いいと思う。」

「義勇まで?」

まさか泊まっていけと言う言葉が出ようとは思わなかった。凜としては、夜通しは走るのも、このまま家まで走ることも問題ないのだが…。

「無論そのつもりだ。まあ本人が良いのならだが。」

「凜さん、泊まってください! 勘違いのお詫びに美味しい御飯、ご馳走しますから!」

意を汲んでくれそうな鱗滝と、泊まることに乗り気で大賛成な真菰。ほぼほぼ万場一致で泊まることに賛成しているようだ。ここで断るのは失礼に当たる。

なので…

「じ、じゃあ…御言葉に甘えて…。」

「そうか、それがいい。」

「よし、そうと決まれば夕餉の準備だ。錆兎、義勇、水を汲んでくるのと、野菜を取ってきてくれ。真菰は儂と下拵えだ。」

「はああい。」

「鮭大根」

「わかったわかった。なら大根を忘れぬようにな。」

鱈の指示でテキパキと役割分担されていく中、凜も何か手伝わねばと腰を上げようとした瞬間、

「客人を手伝わせるわけにはいかん。凜は寛いでいるが良い。」

「は、はあ。」

これは梃子でも手伝わせないだろうな、と苦笑いしながら、ここは御言葉に甘えて、水の呼吸一家の調理風景を眺めることにした。

数刻後

「」「頂きます。」「」

目の前に広げられたのは、何とも食欲をそそられる食事だった。

白く炊き上げられた白米。

囲炉裏でグツグツと湧き上がる、猪の肉や野菜を赤味噌で煮込んだ鍋。

義勇の要望である鮭大根。

そして箸休めに白菜の漬け物。

ひとたび口に運べば、心を込めて作られた品々の味が身体の芯まで染み渡っていく。

「どうだろうか？客人の口に合えば良いのだが…。」

「どれもこれも美味しいです。それに身に染みるように温かい…。」

「そう言ってもらえれば作った甲斐がある。」

(…すごいなあ。素顔が見えきれないように、少しお面を上げて食べてる…。)

正直、天狗の面だけでもギョツとするもののだが、凜としては前世で仮面をした人物を良く目にしていたので、ある程度の耐性があった。

まあこれは置いといて…

「……………(モキュモキュ)」

「おい義勇。誰も取らないから、もう少しゆっくり食べるよ。」

「そうだよ。義勇がいっぱい食べるだろうから、多めに作ったんだし。」

「おかわり。」

「早っ！」

多めに作ったと言った途端、速度が上がったように見えたのは間違いない。

再びよそわれた鮭大根の器を受け取ると、また一心不乱に口へと運んでいく。

「まあ義勇ががつつくのもわかるよ。この鮭大根、スゴく味が染みてて美味しいし。」

凜も連られて大根を口に運べば、ホロリとしっかり煮込まれたそれから鮭の旨みが染み出し、得も知れぬ充足感を与えてくれる。

なるほど、鱒大根とはまた違った味わいがある。これはこれで、と凜の中の美味しいもの一覽に新たな一頁が刻まれた。

「…そうか。異形の鬼が…お前達の先達達を…」

最終選別の土産話を語る中で、どうしても外せなかったのがあの異形の鬼だった。

鱗滝一門を付け狙っていたその鬼の話を進める度に、鱗滝の纏う空気が暗くなるのが見て取れた。

「すまぬ。よもや儂の捕らえた鬼がその様になっていようとは気付か

なかった。それに厄除の面が儂への復讐の足がかりになっておろうとは…。あやつらを殺したのは儂のようなものだな。」

「それは違います！」

「錆兎の言うとおりです。それに…先達達の仇は、錆兎がしかと取りました。」

「何を俺だけの力の様に言ってるんだ義勇。お前の牽制があつてこそ勝利だろう。」

「俺は（腕を切った以外）何もしていない。」

「またお前は…」

「すまぬ錆兎、義勇。要らぬ手間を与えたようだ。」

深々と頭を下げる鱗滝。尊敬する偉大な師の謝罪に錆兎と義勇は目を見開く。

「鱗滝さん！少なくとも俺は異形の鬼と戦ったことで、新たな境地が見えました！義勇も新たな型を得るに至っています。」

「ええ。あの戦いは決して要らぬ手間と言うものではない。得るものは確かにありました。」

「だから御自身を責めるのはおやめください！先達達もその様なことを望んではおりません！それに俺がもし奴に殺されていたとしても、鱗滝さんに感謝はすれども恨みなどしない！貴方は身寄りを喪った俺達を育て、そして鍛えてくれた！それを恨むなど、言語！道断！」

鱗滝が拾ってくれなければ、今頃路頭に迷っているか、もしくは餓死しているだろう。こうして温かな食事を得られるのも、暖かな布団で眠れるのは他でもない、鱗滝の御陰なのだ。

「…ありがとうございます。義勇、錆兎。」

鱗滝が弟子達に厳しい修行を課するのは、一重に生き残る術を身に付けさせるため。身を案じる深い情を注ぐからこそ。そんな自分を恨まれてはいないかと思っていた。

だが愛弟子達も、自身が想うのと同じように、彼らも自身を想ってくれていた。それが何よりも鱗滝の心の憑き物を瓦解させていくのがわかった。

「儂は…これで良かったのだな…。」

そう自身に言い聞かせるように、くぐもった声で呟く彼の顔は、天狗の面で窺い知ることは出来ない。だが顎から流れ落ちる雫が、彼の感情を読み解くには充分であった。

マグマのような赤の海に沈む白い船をレンゲですくい上げる。その柔らかく、まるで絹のようなそれは、海の色に染められていた。鼻腔を刺激するその香りは、食欲を無限に沸き立たせるかのような魔法でも掛けられているのかと錯覚するほどに魅惑的。

この料理の名を目にした瞬間、まるで惹かれ合う運命を感じた。その圧倒的な名前に心奪われた。

この気持ち、正しく愛だ！

「フッフ…では頂くとしよう。」

未知の領域である中華。

讓治郎、その第一歩が今、踏み出された！

「シム…うむ、美味いではないか。」

口に入れば、挽肉の旨みと共に豆腐のまろやかな味わいと喉越し、ピリツと効いた山椒と唐辛子の風味。

（うむ、これは美味しい。今度千代や凜も連れて来よう。きっと気に入る…む…!?）

瞬間…じわり、じわりと口の中が、水が湯へと変わりゆくように熱くなっていく。

「う…うおおおおっ!?」「これは…!?」

鼻を突き抜ける山椒の香り、次いで舌のシビレ。追い打ちを掛けるようにラー油と唐辛子の辛味が全身を突き抜ける。

辛いなんてものじゃない。
痛いのだ。

口の中に火を直接ぶち込んだように熱く燃え上がる感覚に見舞われ、全身のあらゆる汗腺から汗という汗が滝のように噴き出してくる。

「こ、これ…は…!」

「辛イネ?」

料理人が讓治郎が悶える姿に思わず声を掛ける。

あまりの辛さにお冷やとして出された水を一気に煽るように一気に飲みする。

だが、山椒によってピリピリと麻痺した口の中に入れられた水は、舌の感覚が消していく。まるで飲んだのは水じゃないかのようになる。

「水ジヤナイミタイデシヨ? 四川ノ料理ハ、ヤツパリ山椒ネ。」

讓治郎の悶える姿に満足した料理人は、再び厨房へと姿を消す。

そんな彼の言葉など、讓治郎の耳には入って来ない。何故なら辛さとの格闘で必死だからだ。

(くっ…辛い…! 白米を頼んで中和するか…!?)

思い悩む中でもレンジは止まらない。赤々としたその料理を、まるで取り付かれたかのようにすくい上げ、そして口へ運んでいく。

(しかし何だ、この麻婆豆腐と言う料理は!? ただ辛いだけではない…! この強烈な辛さのその先にある確かな旨み…! それを私をこうもかき立てているというのか…!?)

あまりの暑さに、隊士服の前ボタンを外し、頸元を外気に晒す。ヒヤリとした頸元が心地よく、更にレンジは加速する。

(これは未知なる世界…! 隣国中華民国の恐るべき料理…!)

「麻アアア婆オオオ!!」

低くも艶やかな大声を張り上げて、讓治郎は料理に新たな境地を開いたのだった。

第11話 『友人として、先達として』

「凜さん。」

「ん？なにかな、真菰。」

鱗滝邸の寝間

女子二人が二の字に並んで床に就いていた。

夕餉と湯浴みを終えた二人は、凜は日の出と共に出立するし、早朝から真菰は鍛練が待っている。明日も早いので早めに床についた。

ちなみに男衆三人は、客人を寝間以外で寝させ、男女同伴ともいかないため、居間で囲炉裏を囲うように床についている。

睡魔に襲われ掛けた。隣で横になっていた真菰がふと口を開いたのはそんな時だった。

「最終選別…怖くなかった…？」

「怖く…？」

「その…鬼と戦うんでしょ？やっぱり怖くないかなって…思つて。」

未だ鬼と真つ向に立ち会ったことのない真菰にとって、鬼とは未知の存在。人体を超えた力を用いて人を殺め、喰らう、人々にとって恐怖の存在。それを相対することの恐怖は如何様なものか。いずれ最終選別へと向かうであろう真菰は、その一週間に少し恐怖を抱いていた。

「うくん…怖くなかった…と言ったら嘘になる、かな。」

「じゃあ…何で戦えたの？殺されるかも知れないのに…。」

今、真菰は最終選別へ向かうための鍛練期間。その間に鬼とは会うことはまずない。大抵は最終選別で初めて相対する。戦う意思を持って面と向かうと言う行為の中で、想像していた鬼を凌駕する奴らの力によって心を折られることは少くない。そうなってしまうえば、足が竦んで力を発揮できず、何もしいまま喰われるかもしれない。それが真菰を恐怖にかき立てていた。

「…何で戦えた、かあ…。余り深くは考えたことなかったけど…。」

凜にとつて戦いは前世から続くものだった。依頼として指名手配魔獣を倒したり、幻獣と呼ばれる伝説上の生物と戦ったり、

オズボーンと戦ったり、魔神と戦ったり、騎神と戦ったり……。この世界に来てから戦うことに抵抗がなかった。むしろ戦うことになる流れだったし、それに対して何の違和感もない。

だが真菰に問われたことで、今一度それを思い返してみる。

何で戦うのか？

なぜ？

「……一番に思い浮かぶのは、どうしても斬らないといけない奴がいるから……かな。」

「斬らないと……いけない奴？」

「そう。その為に私は鬼殺隊として戦う。……だから何としても最終選別を突破しないとイケなかったし、怖くて動けずについて、むぎむぎあそこで死ぬわけにもいかなかった。」

黒のイシユメルガや前世の事は伏せる。だが、奴を斬るために世界を超えて生まれ変わったのだ。それは凜だけではない。讓治郎も恐らくは彼女を追う形でやって来たのだろう。クロウは偶然かも知れないが。

「戦う理由はそれぞれだよ。錆兎や義勇も何らかの思いがあつて刀を振るってる。だから真菰にもあるんじゃないかな？ 刀を振るう理由が。」

「刀を……振るう理由……。」

「言い換えればそれは信念で、『芯』になる。その為にも自分の『道』を見つける。——まずはそこからだ。」

「道……。」

凜の言葉を反復するように真菰は呟く。

そして同時に凜の言葉が途方もなく響いた。

真菰は孤児だ。親が鬼に食われたことで天涯孤独の身となっていた。それは錆兎も義勇も同様で、家族を鬼に殺され、経緯は異なるにせよ、鱗滝の元に来て鬼を斬る修行を積んでいる。

なぜ鱗滝に師事したのか？

なぜ鬼殺隊を目指すのか？

なぜ鬼と戦うことを決めたのか？

その意思の源泉を真菰は目を閉じて思い出す。
そうだ、他の誰かに自身と同じ思いをさせないため、強くありたい
と思っただ。

鬼に愛する人を食われる、孤独と絶望、悲壮に溺れさせないために。
きっとそれが真菰の『芯』であり、『道』なのだから。

「…ありがとう、凜さん。」

「…ん？」

「これでまた、明日からの鍛練に集中できるよ。…絶対最終選別を受
けて突破する。私の『道』を往くために。」

「…うん。きつと君なら出来る。…と、若輩者なのに人に道だの何だ
の言っちゃって、変じゃないかな？」

「そんなことない。むしろ、凄く響いたというか…年季が入った言葉
だなって思った。同じ年に感じないくらい。」

真菰の鋭い指摘に凜は思わず苦笑いを浮かべてしまう。どうにも
こうにも、鱗滝といい、勘が鋭い…というか、感受性が良いのか、
ちよつとしたことで疑われてしまいそうで恐ろしい。

「同じ年なら、さん付けは要らないんじゃないかな？」

「え？でも…あくまで凜さんは、鬼殺隊の先輩に当たるわけだし…。」
「いや…鬼殺隊を別として考えても良いんじゃないか？というより
も、友人としてそうして欲しい。」

凜としてみれば、こちらの世界に来てからというもの、前世の力や
勘を取り戻すために、本来なら感受性を育むはずの幼少期を、修行と
いう修行に明け暮れてしまい、友達という友達が居なかった。そんな
折に、真菰という貴重な同年代の少女と巡り会えたことで、
誰かとの交流の尊さを思い出した。だからこそ、仲良くしたい真菰
に、さん付けで呼ばれることが止めて欲しかったりする。

「じ、じゃあ…り、凜…で、いいの？」

「もちろん。」

「…ふふつ。なんだか不思議。長い間友達が居なかったから、フワフ
ワした感じがするなあ。」

逆に真菰も、鱗滝に育てられ始めてから、女友達という者が居な

かったので、凜の言葉は僥倖だったりする。こそばゆさから来る妙な浮遊感が、真菰の心をワクワクさせていた。

友人として互いを自覚してからはと言うもの、年頃の女子二人の話は大いに弾み、微睡みに沈んだのは子の刻を過ぎた辺りだった。

一方 暁葉家

「今、戻った。」

「お帰りなさい。…随分遅く成られたのですね。」

「うむ、少しばかり惹かれる料理を見つけてな。明日に愛娘が帰ってくるときに、迎える料理に加えようと思ったのだ。」

「その材料が…持っておられる荷物ですか?」

「作り方も教わってきた。フフフ…凜の悦ぶ顔が目には浮かぶな。」

暁葉家の地獄絵図は近い

第12話 『家路へ』

「お世話になりました。」

明朝。

未だ霧が立ちこめ、そして東の山の背から陽が昇り始めた時間。

朝餉まで貰った凜は、軒先で鱗滝一門に深々と礼をした。

「うむ、それ程距離は無いにせよ、道中気を付けて帰るのだぞ。讓治郎にもよろしく伝えておいてくれ。」

「凜、これからは鬼殺隊の同僚だ。いずれ任務を同じくしたときは宜しく頼むぞ。」

「もちろん。錆兎もまた会う日まで元気だね。鱗滝さんも、お元気で。」

「凜。私、貴女に絶対追い付くから。私の『道』を真っ直ぐ進んで、ね。」
「うん。修行と最終選別、頑張ってね。」

どうやら真菰の中には確りとした『芯』が出来たようだ。これなら並大抵の事で折れることはないだろう。錆兎や義勇の実力からして、鱗滝は良い育手なのが見て取れる。このまま真摯に修行に打ち込み、油断なく最終選別に臨めたなら、突破はそう苦ではないはずだ。

下山する足で、後ろで手を振る水の一門に振り返って手を振り返しながら、凜は家路を征く。

一晩のことだった。

それでも温かな一晩。

ゆっくり休めたと言うところもある。それによって身体は万全だ。精神的にも、心置きなく休めたことによって、身体が軽くなったように感じた。

『ヨク眠レタカヨ。』

「うん。久しぶりに…と言うか、一週間ぶりに熟睡できたよ。布団の中で眠れるって、こんなに素晴らしいことなんだって、改めて身に染みた。」

バツサバツサと二丈ほど上空を飛ぶのはクロウだ。昨日、藤襲山で顔合わせした後、彼は各鎧鴉や隠との連絡、報告に向かったらしく、そ

れが終わったようである。いつの間にか凜の上空を滞空していた。

「クロウこそ、ご苦労様。夜通し飛びっぱなしだったんじゃない？」

『マア俺位ノ鋭鴉トモナレバ、コレクライ朝飯前ヨ。チヨロ甘ダゼ？』
「チヨロ甘って…。」

『コレカラオ前ノ連絡係トシテ忙シナク飛び回ルノガ日常ニナルンダ。コンナノデ悲鳴上ゲテタラ、洒落ナンネエヨ。』

これからクロウは、昼夜問わず鬼の情報を仕入れて、情報役と隊士の間を行き来し、必要とあれば援軍を呼びに飛ばなければならない。それこそ休む暇など無いだろうと言わんばかりに。

「その…悪いなクロウ。」

『ハン、50ミラノ利子分ハ飛び回ツテヤルサ。気ニ病ムンジヤネエゾ。ツーカー、オ前ハ『リイン』ノ時カラ背負イ込ム悪癖ガアルンダカラヨ。『責任感』ガ強イツテ言エバ聞コエハイイガ、見方ニヨツチャ、他人ヲ信ジテネエトモ見ラレカネエカラナ。』

「う…：そ、そんな事無いけど…。」

『ダツタラ『悪イナ』ツテ言ウノハヤメロヨ。ツタク…、女ニナツテモソウイウトコハ変ワンネエナ。ラシイツテ言エバラシイガヨ。』

前世からクロウはおちやられていたけど、いざという時は頼れる兄貴分だった。鴉になってもそれは変わらない様だ。まあそれを口にしたらしたで突っつかれそうなので言わないでおこう。

『ジャ、俺ハヒトツ飛びシテ、オメエノ今世ノ親父ニ挨拶デモシテキテヤルヨ。モウスグ帰ルツテ報告モカネテナ。』

「あ、ああ。」

そう言うところクロウはその灰色の羽根を羽ばたかせて空高く飛翔し、一足先に家へと飛んでいってしまった。

「あ…：クロウ、父上の事、知らないんだった。」

クロウは前世で讓治郎…オズボーンの命を狙った事があつた。後にそのわだかまりこそ小さくなったが、全くなくなったわけではない。このままでは一悶着起きそうだな。

「…まあ良いか。」

出会ったところで命の遣り取りは無いだらうと予想して、リインは

考えるのを止めて家路を三度進む。

「…よし。」

今一度気を引き締めて家路を進む。

暫くすれば、刀鍛冶の里から日輪刀が届くだろう。

そこからは本格的に鬼殺隊としての日々が始まるのだ。

漸く、自分も黒を追うことが出来る。

父に任せきりだった調査を手伝える。

そう思うと、足取り軽く、そして心も軽やかだ。

そうと決まれば、一刻も早く父母に無事を伝えるために家路を急いだ。

それが地獄への旅路と知らずに。

そして

その日の夕食

「な、なんなの父上……そのラー油と唐辛子を百年間ぐらい煮込んで合体事故のあげく、『オレ外道マーボー今後トモヨロシク』みたいな料理は……!?!」

「フッフ…お前の合格祝いに私も料理に挑戦してみたのだ。なに、遠慮することはない。限界を超えた辛さの先にある旨さを知れば、きつとお前も病みつきになる。」

「ちよつ……! レンゲを近付けないで……! やめ……! やめ……! あ……つ! ああ……つ!

イヤアアアアアアアアアアツツ!!!」

この日

幼気な少女（中身成人男性）の舌と心に決して癒えない傷跡が刻まれたとか何とか。

第13話 『ゲスメガネ前田』

「う……………」

小鳥のさえずりに目を覚ます。

周りを見れば、箆笥や卓袱台の位置で、恐らくは自宅の凧の部屋であることに気付かされる。

「あれ…う…私……なんで…。」

起き上がろうとすれば頭痛が頭を支配し、声を出せば口の中がヒリつく。

「思い出した…父上のあの名状しがたいアレを食べさせられて…気を失ったんだ。」

思い出しただけで寒気がする。

口の中にマグマをぶち込まれたかのようなあの感覚。

滝のように噴き出す汗。

辛いと言うよりも痛い食べ物。

世にこのような食べ物があるのかと、改めて思い知らされた。

あのようなものは金輪際ゴメンだ。

「父上……いつか絶対に負かしてやる…！」

思えばこの世界に生まれ変わってから、無自覚だろうがことある事に譲治郎は茶化して来た。

やれ長い髪がに合うだの

やれ美しい着物が似合うだの。

もしかしたら、子と共に過ごせなかった時間を謳歌できることが、彼をはっちゃけさせているのかも知れない。

「ゴメンください。凧様はいらっしゃいますか？」

来客だ。

自身に客など珍しい…と言うか、初めてかも知れない。

父への仕返しを心に飲み込み、寝巻きの上から羽織りに袖を通すと、急ぎ足で玄関口へと向かう。

「は…。」

ひよっこりと玄関に顔を出せば、黒ずくめが居た。

このさんさんと日が射す日中に、このような格好で出歩く彼は、端から見れば不審者だ。

だが、その身格好は何なのかを凜は既に知っている。

藤襲山で選別の裏方として動いていた、鬼殺隊の『隠』だ。そして彼は選別会場でこちらを見ていた眼鏡の隠。

「凜様。私は鬼殺隊の隠の前田 まさおと申します。以後、お見知りおきを。」

「これはどうもご丁寧に。暁葉 凜と申します。これから宜しくお願い致します。」

前田と名乗った隠は、背負っていた木箱を玄関の縁に置くと、その蓋を開けてその中に収められていたものを取り出した。

畳まれたそれは、ボタンが映える少しハイカラなもの。黒を基調とし、悪鬼滅殺の思いを背に、鬼の頸を斬る隊士の証。それを着込んで、幾度か任務に行き帰りする大きな父の背を幾度となく見続けた。

「こちらは凜様の隊士服です。先日採寸に合わせて仕上げました。」
「私の…隊士服。」

時を経て、いざそれを自身に着ることになると、凜は何処か感慨深い物を感じた。

「よろしければ、試着の程をお願いしたいと。不備等があれば、後日手直しいたします。」

「わかりました。少々お待ちください。…その、よろしければ上がって行かれては？流石に玄関でお待ち頂くのは心苦しいのです。」

「よろしいのですか？…では、御言葉に甘えて…。」

草鞋を脱ぎ、凜の先導で客間へと前田を通し、彼が座れるように座布団を用意する。

彼が座ったのを確かめて、急ぎ自室へと足を運ぶ。

「漸く…私の隊士服が…。」

新しい場所で着る服が届くというのは、どうしてこうも心躍るのだろうか。前田から受け取った制服を胸に抱き、ほころぶ頬を抑えきれないで居る。

前世で仕官学院の赤々とした制服が届いたときも、多少なりとも心

が躍った。今にして思えば、体感時間であれから15年程経っているのだから、感慨深いものだ。

「…と、いつまでも前田さんを待たせるわけにはいかないか。」

喜ぶのも程々に、隊士服に袖を通すべく、凜は羽織と寝巻きを脱ぎ取っていった。

「ほう、前田か。」

正座して凜を待つ前田の背後から、野太い声が伸びる。

振り返れば、普段の隊士服ではなく、家着用の着物に身を包んだ讓治郎が腕を組んで立っていた。今現在最古参の隊士である讓治郎は、鬼殺隊の中では半ば伝説化しているため、思わず前田は身を跳ねる。「そなたが我が家に来ているということは……フッフッフ……凜の隊士服が仕上がったという事なのだな。」

「は、はいっ、そのとおりでございます。」

「フッフッフ……ならば我が妻も家事の手を止めて、そなたと共に見届けようではないか。我が娘の晴れ姿を、な。」

そう言うと、讓治郎が家の奥に姿を消し、ややあつて割烹着に身を包んだ凜によく似た女性が彼と共に姿を表す。

「ち、千代殿……。」

「お久しぶりですね前田殿。私の除隊時以来ですか。」

「は、はひ。」

「今日は我が娘の隊士服を仕立てて持ってきてくれたと、我が夫より聞きました。貴方に心よりの感謝を……。」

前田は縮こまっていた。

現役ではるか上の存在である讓治郎に加えて、過去に女性隊士最強の名を欲しいがままにした千代が目の前にいたのだ。夫である讓治郎と共に、柱に並ぶ鬼殺隊最高戦力として数々の武勲を立てた二人。

しかも千代は、日輪刀の刃を用いた薙刀を得物としていたのだが、曰く『本来の得物』ではないというのだから、なおのこと始末が悪い。二人の婚約を機に、千代は寿退社ならぬ寿除隊したのではあるが、彼女の伝説は未だ語り草となっていたりする。

そんな二人が隣にニコニコと愛娘の晴れ姿を目に収めんと座っているのだから、『彼の所業』を差し引いても冷や汗が止まらない。

「え、えっと…前田さん？」

「は、はひっ！」

襖越しに凜の声。その声色はどこか不安気であり、おどおどとしたものだ。

「これ、ほんとに私のなんですか？な、なんか……合っていないんじゃないかなって…」

「フフフ…最初のうちはそのようなものだ。じきに慣れる。」

「ち、父上!？」

「私も入隊したときは気恥ずかしさがありました。しかしそれは誰しも通る道。そこで足踏みをしては前に進めませんよ。」

「は、母上まで…?」

『オラ、情ケネエ顔スナ。コレカラ先、オ前ハ色々(意味深)アンドン。俺ハコウ(烏)ナツチマツタ。ダガオ前ハ…マツスグ前ヲ向イテ歩イテ行ケ。タダヒタスラニ、ヒタムキニ、前へ。ソウスリヤキツト…(意味深)』

「クロウまで!？」

もはや外堀は固められた。

八方塞がりですら四面楚歌。この場で隊士服姿を見せないという選択肢は、もはや存在し得なかった。

しかしこのまま渋っているのは、仕立ててくれた前田への示しがない。自身の踏み切らない思いで人が迷惑を被るのが忍びない凜は、意を決して襖を開ける。

「こ、これは…!？」

「まあ…!？」

「な、なんと…!？」

『(心外!)』

襖を開けて出て来た若き鬼殺隊士。

背の半ばまで伸びたつややかな黒髪に、羞恥で頬を染め上げた表情は、その名の通りの凜とした普段の表情は鳴りを潜め、年相応の少女そのもの。

そして身に纏うのは、上半身は詰め襟の服に、下半身はヒラヒラとした布地：所謂スカートだ。その短さたるや、太腿半ばまでと言うものであり、初めて履いたスカートの違和感と、その形状からくる足の妙な開放感。そして足が丸見えになってしまう状況に、凜は必死にスカートの裾を抑えて、見えてはならないものを見えないように必死に隠そうとしていた。

「素晴らしい…！最終選別で見立てた通りだ…！やはり履きなれないスカートによる羞恥からの赤面、そしてその整った顔立ち、更には眩しく鍛え上げられた御御足！この俺の慧眼に狂いはなかった！」

「ふむ…確かに新鮮ではあるな。だが些かスカートが短すぎるのではないかね？」

「何をおっしゃいます讓治郎様！それが良いのでございます！あのように美しき脚線美を布地で隠すなど、勿体のうございます！」

『ワカツテルジャネエカ前田サンヨ！俺カラ言ウノモアレダケドヨ、確力ニ凜ノ足ハ目ヲ見張モノガアルト思ウゼ！』

「鏝鴉君！君とは仲良くやれそうだ！」

「うむ、うむ！悪くない…決して悪くないぞ！」

やいのやいのと盛り上がる野郎ども。

このままではこの短いスカートで任務を熟さなくてはならなくなってしまう。そんなことになれば、戦っている最中にあられもない姿を晒してしまうのは必然。それだけはなんとしても避けたいのが凜の本心だ。思えば、旧VII組の女の子達も、これくらいのスカートで戦闘していたのを凜は思い出した。後衛のアリサやエマはともかく、前衛のラウラやフィーがああスカートで飛んだり跳ねたりしてたんだから、当時の凜…もとい、ラインの目に毒だったりする。あんな短いスカートで恥ずかしくなかったんだらうかと、彼女らの勇気と

胆力に改めて敬意を表することにした。

そんな中、

「ひっ!？」

凜は小さな悲鳴を上げた。

盛り上がる野郎どもの裏で、笑顔を浮かべながら『黄金のオーラ』を出す母の姿に。その姿はさながら、前世で相對した鋼の聖女。その圧倒的威圧感にようやく気付いた男共は、ビクリと身体を硬直させる。「フッフ…いけませんね。嫁入り前の娘に、このような露出の多い服を着させようとするなんて。そう思いませんか？」

「『……………（コクコク）』」

暁葉家ヒエラルキートップは伊達ではない。瞬く間に男連中を黙らせ、そして言葉を奪い去ってしまったのだから。

「凜。」

「は、はいっ。」

「早く着替えていらっしやい。そのままでは足が冷えてしまいますよ。」

「わ、わかりました。」

「私は少くし皆様とお話をしなければなりませんので…家事は暫くお任せしますね。」

「……………（コクコク）」

その日

日付が変わるまで、千代による男共への説教は続いたとかなんとか。

そして翌日には、暁葉家の庭先で、一着の服が赤々とした炎に包まれて、その姿を灰へと変えたという。

第14話『黒の気配』

「ごうごうと短いスカートの子供服が燃え上がり、灰へと変わった翌日。」

凜は日課である型の鍛錬を終えて、久しぶりに街へと繰り出した。

ここ半月近くは最終選別や、それに向けての準備や鍛錬で、家やその敷地内で生活を終えるに至っていたので、こうして街を歩くのは久しぶりのことだった。そもそも、普通の幼少期は興味がない年頃で、それこそ街へ出掛けたいと親に強請るものだが、凜の中身はすでに成人しているため、街へ出る機会そのものは少なかつたりする。

刀鍛冶から日輪刀が届くまで、予定では今しばらくかかるので、こうして気分転換に街へとやって来たのだ。

季節は春先。徐々に桜も蕾を膨らませ、開花を待つ時期だ。

（これからこうしておいそれと街を歩くななんて難しくなるんだろうなあ。）

刀が届けば、そこからは鬼殺隊として夜な夜な鬼を斬る日々が始まる。それまであと五日程の余暇。そこからは命を賭した闘いに身を投じ、いつ命を落とすともわからない。

（この刀を待つまでの日々は…もしかしたら今の間に日常を堪能しておけ、と言うことなのかもしれない。）

殉職すればそれも叶わなくなる。鬼殺隊を選んだ以上、それは覚悟の上の事だろう。

ともあれ、鬼の出現が無いなら無いでそのまま休暇となるのだが。

「おや、凜ちゃんじゃないか。久しぶりだねえ。」

フリリと立ち寄ったのは母が鼻肩にしている装飾品を扱う店で、初老の女店主が驚きと喜びをばらんだ声で出迎えてくれた。

「お久しぶりです。長い間、顔を出せずに申し訳ありません。」

「いいんだよ。こうして元気な顔を見せてくれれば。…しかしまあ、しばらく見ないうちに、偉いべっぴんさんになったねえ。」

「そ、そうでしょうか?」

べっぴんさん、と言われて悪い気はしない。しないのだが、心の何

処かで『リイン』としての心もあり、どこか複雑なものだ。

「凜ちゃん、もう十二歳位かい？」

「はい、今年でそうなります。」

「じゃあそろそろ許嫁もいるんじゃないのかい？いいところのお嬢さんなんだから。」

「い、いえ、そういうのはまだ…。」

「なんだいなんだい、讓治郎さんは何やってんだ。こんな可愛い娘に許嫁を見つけないなんて…。」

「は…はは…。」

いいところのお嬢さん

確かに暁葉家は裕福なものだ。

武家屋敷もかくやと言わんばかりの広大な敷地に、それに見合う大きな屋敷。これは鬼殺隊である讓治郎の収入が大きなものであることの証左だ。加えて、母である千代も、現役時代には稼ぎに稼いでいた。結婚時に屋敷を建てたときに、二人の貯蓄から出したとはいえ、その貯蓄は屋敷を立ててなお余ったほどなのだから。ただ、金銭的に余裕があるだけで、別段やんごとなき血筋や家系でもないのだが。

だが前世の男爵家の養子だったことといい、こう言った立場からは逃れられないのだろうか。

「いい人がいたら、讓治郎に紹介しといたげるよ。…まあそうでなくても、凜ちゃんなら世の男が放って置かないだろうけどね。」

「そ、そうですね。あ、あはは…。」

結婚…たしかに世の男女ならば、添い遂げる相手を見つけて、子有成して、そして老いていくものだ。

しかし今の凜の心のなかには、未だ前世のリインとしての魂が残さされている。それが男を好きになるという想いに対して、それだけとはと齒止めをかけている。

そもそもこの世界に来たのは、イシユメルガを仕留めるためであって、幸せになるためではないのだ。恋愛にうつつを抜かしては、成すべきこともなし得ない。そう心に言い聞かせながら、凜は苦笑いを浮かべて装飾店を後にした。

とある北方の宿場町の飯屋

昨日は遅くまで妻にこつてり絞られた讓治郎は、遅めの昼餉を腹に収めながら待ち人を待っていた。

外は深々と雪が降り積もり、温かな食事が冷めた身体に染み渡る。

「…うむ、美味しいものだ。」

そんな食事を肴に熱爛を煽れば、焼けるような熱さが喉を通り過ぎ、やがて胃の奥から燃えるように熱くなってくる。

「…なんだ、もう始めていたのか。」

銚子が三杯目を注いだとき、向かいの席に一人の青年がゆつたりと座る。肩まで伸びるその髪は、日本人にしては珍しく灰掛かったもので、整った容姿も相まって、食事処の客の視線…特に女性から集めていた。

「なに、いかんせん寒くてな。酒でも飲まねば凍えそうだったのだよ。」

「よく言う。貴方はそんな柄ではないだろうに。」

呆れながらも青年は、店員に熱い茶と、グツグツ煮えているおでんを数品注文する。その間も、讓治郎は三杯目の熱爛で喉を潤していた。

「で、突然呼び出した理由は？」

「そうせつつくな。どうだ？そなたも一杯。」

「一児の親が未成年に酒を勧めるな。俺はまだ19なんだぞ。」

「そうか。そうだったな。いやなに、既に成人していると思わせるほどに成熟した雰囲気なのでな？…つい、だ。」

「精神年齢百超えの爺が何を言うのやら。」

「そういうそちらは、『あらふおー』だろう?」

酒が入っているのか、いつになく讓治郎は饒舌だ。今はまだ隊士服を着ていることがあって、普段は厳格な彼だが、今日ばかりはよく舌が回っている。

「…そろそろ本題に入らないか? なにか報告があるのだろうか?」

「む、そうだな。…実はな…?」

「じ、実は…?」

ほろ酔いの面構えを解き、眉間にシワを寄せて目つきは鋭く。先程とは打って変わり、物々しげな雰囲気醸し出す讓治郎。その目はしっかりと青年を射抜くように見つめており、思わず青年は固唾を飲み込む。

「実はな…」

我が娘がついに鬼殺隊に入ることになったのだよ。」

「……………は?」

「我が愛娘の! 凜が! 鬼殺隊に! 入隊するのだ!」

「いや聞こえてる。それに声高らかに区切って言うな。しかもそこはかとなく親バカ披露するな。」

「何を言う! 私にとっては一大事なのだぞ! 声高に言わずして如何とする! 嗚呼…凜の麗しき隊士服姿をカメラに収められなかったのが悔やまれてならん!」

「…帰っていいか?」

「待て、待つのだ。本題は置いといて…こちらも報告しておこう。」

「…なんだ? 鋼…いや、奥方の惚気なら聞かんど。」

「それはまた次の機会に置いておこう。今は…『黒』の件だ。」

「…!! 現れたのか!?!」

黒：その言葉に青年は目の色を変え、まるで讓治郎に噛みつかんばかりに机越しに身を乗り出す。そのただならぬ空気に呑まれたのか、食事処にいる客達の視線を集めてしまった。自身に突き刺さる視線に気付いたらしく、青年はおずおずと席に座り直した。

ちようど運ばれてきたおでんのすじ肉の串に齧り付く。

「…それで：『黒』がどうしたと？」

「うむ。私は以前、『黒』と同化していたこと、それは話したな？」

「ああ。確かに聞いた。」

「ここ暫く：鬼を討つ中で、極々：それこそ無いに等しいほどなのだが、ヤツの気配を鬼から感じるのだ。」

「…鬼から？」

「そうだ。ヤツと同化していた私だからこそだろうな、微細なヤツの気配を感じるのだ。」

「…それはつまり：鬼の側に『黒』が潜んでいる可能性がある…と？」

青年の問に、讓治郎は静かに頷く。

鬼の首領であり始祖の鬼舞辻無惨。ヤツと『黒』は組んでいる可能性が出て来たということ。嫌な組み合わせに、青年は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「…これで鬼殺隊として益々鬼の頸を斬らねばならなくなったな。」

「そうだな。入隊して正解だったであろう？」

「…鉄血としての先見の明は伊達ではない、ということか。」

「フッフ：伊達に皇帝や宰相をしていたわけではないのだよ。」

敵であれば末恐ろしいものだが、味方の側になればこれ程頼もしい男はいない。つくづく青年は目の前の男の底の知れぬ力に戦慄する。「ならば貴方の娘にも伝えておいてくれ。これから戦う鬼は、益々手強くなる可能性があるとな。」

おでんを食べ終え、最後にお茶を煽るように飲み干すと、青年は立ち上がり店の出口へと足を進める。

「珍しいな。そなたが他人を気遣うとは。」

「俺とて人だ。それくらいはする。それに、あなたの娘のことだ。実力は折り紙付きなのだろう？」

「うむ。それは私が保証しよう。」

「だったら強い人材を気に掛けるのは何らおかしいことではないさ。それに：『俺の故郷を滅ぼした元凶の黒』を滅せる可能性は少しでも高いほうがいい。」

そう言い残して彼は店を後にした。

「ふ……宰相の時は実力を噂でしか聞かなかったが……味方となれば頼もしいものだ。」

奇しくも彼と同じく、同胞となればここまで頼れる者はそうは居ない。前世では敵対する者同士であったら彼と、こうして共に飯を喰らい、共に敵を討てるという不思議な感覚に、讓治郎は御猪口の酒を一気に飲み干した。

「ふむ……」

最後の一口を終えて、ふと讓治郎は顎に手を添える。何かしら思うことがあるのか、目を閉じ、思考の海に意識を沈める。

余程の案件なのだろうか。

ややあつて

「……私が二人分の勘定を持つのかな？」

割とどうでも良い案件だった。

第15話 『旅立ちの日』

「暁葉…凜さんで…いらっしやいますか?」

桜が満開を迎える頃だった。

不審者がいた。

玄関先に。

真つ赤な火男のお面の不審者だ。

下手をすれば鱗滝左近次レベルの。

「わたくし、金森鉄華かねもりてつかと言うものです。この度、凜さんの専属鍛冶師となりました。以後、よろしくお願いします。」

「よ、よろしくお願いします…。」

ペコリと会釈する火男こと鉄華。どうやら不審者な外見とは異なり、中身はマトモな人ようだ。そして女性らしい。

ともあれ、玄関先で話すというのもなんなので、家にかかるよう促すと、どうやら長旅で足が疲れていたらしく、有り難そうに上がった。場所はわからないが、刀鍛冶の里と言うのはよほど遠い所らしい。

「こちらが、凜さんの日輪刀になります。」

客間で面と向かって座るや否や、鉄華は抱えていた袋から本日の主役たるそれを取り出した。

白と黒が交互に織り成った柄。

まるで葉のように縁取られ、白銀に輝く鍔。

そして鬼の頸を断つ為に打たれた刃を隠す、限りなく黒に近い紺の鞘。

凜はそつと、まるで割れ物を扱うかのように両手で掬い上げ、その一種の芸術とも言えるそれを眺める。

良い刀だ。

前世で愛用していた刀や、黒ゼムリア鉾のそれも良い物だったが、これもそれに引けを取らない程に良いものなのだと、刃を見なくとも感じられる。目の前の鉄華が、丹精込めて打ってくれたのだとひしひしと感じられる逸品だ。

「どうぞ。抜いてみてください。日輪刀は通称『色変わりの刀』。その人の呼吸法や適正に応じて、刃の色が変わると言われています。」

鉄華に勧められるがままに柄をしっかりと掴むと、味わうようにゆっくりとその刃を引き抜いていく。鍬はげの手応えを経て、その刃は白日の元になる。

「スゴい…。」

語弊力低下。

言葉を失うとはこのことか。

凜は、眼の前に伸びるその刃に目を奪われ、呆けてしまっていた。

「お気に召しましたか？」

「はい。非の付け所が無い程に。」

「それは重畳。…と、色が変わり始めましたね。」

見れば、元々峰が黒く、刃が白銀だった凜の日輪刀。それがまるで、染め物のように鍬はげ付近から色が変わりゆく。

「ほう…これはこれは…。」

その変わりゆく色は鉄華にとって珍しい色らしく、身を乗り出して興味深げにまじまじと見つめる。

その染まり上がった刃は白銀一色。白い中にもしっかりとした輝きを放っており、窓から差し込む陽の光を映し、神々しくもあった。

「白銀とは…珍しい。…というよりも、私の知る限り、そのような色の隊士は知りませんね。」

「前例がない？」

「ええ。銀は1名おられました。白銀は初めてかと。」

銀

その単語に凜はなんとなく誰か察しが付く。

この暁葉家において頂点に立つ存在。

かつて伝説の女隊士と謳われた、今現在凜が最も敬い、そして恐れる女性。

「もしや…母上？」

「フッフ…やはり血は争えないと言うことなのです。実に興味深

い。」

言われて不思議と腑に落ちるものがあつた。何せ母である千代の部屋には、まるで常在戦場、いつ何時敵襲があつても良いように、整備された薙刀・槍というのかわからないが、仮に日輪槍とでも言うべきそれが立て掛けてあるのだから。

「これで貴女も本格的に鬼殺隊の一員となつたわけです。夜な夜な人を喰らう悪鬼を滅し、人々の安寧の礎となれることを切に願っております。」

「はい。身を賭して命尽きる時まで、人々の刃となり盾となれるように尽力します。」

「良い心がけですね。ただこれだけは言っておきます。」

「??」

「もし…もし貴女がこの先、その日輪刀を折るようなことがあれば…。」

ゾワリ、と凜の背筋に冷たいものが走つた。

先程まで穏やかに話していた鉄華。その身に纏う雰囲気、それが黒いナニカに変貌していたのだから。

「お、折るようなことがあれば?」

震える声だった。

ヒヤリとした汗を流しながら、目の前で自身の懐から調理で使うあの刃物を取り出す彼女に、まるで命を削る思いで問うた。

そんな凜に、おそらくお面の下は満面の笑みであろう鉄華は答えた。

「バラしますよ?」

包丁で首を掻き切るジェスチャーをする鉄華。鬼よりも、彼女の方が末恐ろしきものだとつくづく味合わされた凜だった。

『オウ凜。ヨウヤク日輪刀が届イタミテエダナ。』

鉄華が釘という釘を差しまくって帰った後、縁側で日輪刀を眺めていた凜の肩に、クロウが灰色の羽を羽ばたかせて停まる。

「うん。これでようやく…私も鬼を狩れる。」

『ソウカソウカ。ジャア早速任務トイクカア。南南西ノ街ニ鬼ガ潜ン
デイルツテ情報ガ入ツテヨ。』

いよいよ初任務だ。

その事実には不思議と日輪刀を握る手に力が入る。

これからきつと、最終選別では比較にならない程の鬼や、鬼ならではの怪奇な術…血鬼術を扱う鬼と相對することとなるだろう。正直、不安がないといえれば嘘になる。どれほど経験を積もうとも、ほんの少しの弾みや噛み合わせであっさり命を落とす事になる。

だが、そんなことで燻っているには、『黒』を倒すという悲願など夢のまた夢だ。今一度目を閉じて、この世界に足を踏み入れた理由と意思を噛み締め、ふう、と大きく息を吐き出す。

『気合イハ入ツタカヨ?』

「うん。」

『ヨシ、ンジャア隊士服ニ着替エテコイヨ。流石ニ着物ジャダメダ
ロ。』

「…と、そうだったね。ちよつと待っててクロウ。」

縁側から立ち上がると、パタパタと急ぎ足で自室へと戻る凜。やれやれ、忙しい奴だと内心苦笑いしながら、縁側に立てかけられた日輪刀を見詰める。

(…スマネエナ、凜。イヤ、リイン。オ前ニ危ネエ橋バツカリ渡ラセチ
マツテ…)。

内戦のときも、黄昏のときも、自身を迎えに、そして助けるために必死に戦い、呼びかけてくれた悪友。そして今、自分は非力な鳥となってしまうことへの無力感。共に戦うこともできず、ただただ伝令係として飛び回ることしかできない自分に、ぶつけようのない苛立

ちが募る。

(才前ガヤバイ時：俺ハナニガデキル？助ケヲ呼ビニ行クシカ、俺ニハ出来ネエノカ：?)

この身で出来ることは限られていた。少ない選択肢の中で、何ができるのかを模索していく。

あーでもないこーでもないとうんうん唸るクロウ。

傍から見れば、鴉が縁側で日向ぼっこして、その陽気でうたた寝しているように見える。だが寄って見てみれば、鴉が悩み、唸っていると言う絵面は中々奇怪なものだ。しかし喋る鴉と言う時点で今更であるが。

「おまたせ。…どうしたの？クロウ。何か悩みでもあるの？」

『イヤ、何デモネエヨ：ツテ、オイ!!』

隊士服に着替えて、自身を気遣う凜を見て、クロウは悩んでいたことも忘れて声を荒げる。

『オ、オマ……ソノ服……!』

「??服がどうかした？」

『ナンデズボンナンダヨ!!』

そう、凜が身に纏う隊士服。それは以前にメガネが用意したミニスカのものではない。スタンダードで、一般隊士服と何ら変わらないものだ。

「だってあれは母上が認めないって燃やしちゃったし：母上が直々に注文したのを着ただけなだけけど？」

鴉は啞然とした。

これから肉付きの良い凜の足を見ることがクロウの密かな楽しみだったのに。

「…まあクロウが何に絶望したのかはわかんないけど、とにかく任務なら行こうか。案内、お願いね。」

『…ハイハイ。』

夕日が差し込む時間帯。

凜は鬼殺隊の一步を踏み出す。

夜の帳に紛れて潜む悪鬼を狩るため、そして悲願たる『黒』を断つ

ために。

第16話 『御剣 獅童』

季節と年はめぐり、凜が正式に鬼殺隊としての任務を請け負い始めて早くも三年の月日が流れていた。

そして、とある山村の任務にて

「閃の呼吸 壺の型 螺旋撃」

雪に埋もれ、静寂が支配する夜の森の中。

丑の刻という漆黒の夜の中でも、白銀に煌めく刃が走る。

その技の名の通り、自身が練り上げた回転：即ち『螺旋』の力の全てを、己の振るう日輪刀に乗せて一気に振り抜いた。

「畜生……こんな餓鬼に……」

振り抜かれた刃は、凜の技量も相俟って容易く鬼の頸を刎ねる。

怨み節を唱えながら、相對していた鬼を灰燼へと変え、そして無に帰した。

それを見届けた彼女は、腰に携えた鞘に日輪刀を収める。チン……という鏗と鞘口の奏でる音が、森に再び静寂をもたらした。

「これで……全員、かな？」

目を閉じて、耳と肌に神経を研ぎ澄ませる。八葉一刀流の技術の一つである『観の眼』。その高い気配察知能力を用いて、周囲に鬼の気配が点在しないかを探る。鬼から感じられる『黒』の気配。讓治郎程ではないにせよ、黄昏の贄として今尚『黒』の力を宿している凜は、その気配を感じられる。

ややあつて、その気配は感じられず、凜は目を見開き、大きく息を吐き出す。

元来、鬼は徒党を組まず、それぞれ単独で行動していることが多い。同族嫌悪の為に、同じ鬼同士での同族意識や仲間意識などはほぼ皆無と言うのが、鬼としての大まかな常識だ。

しかし今回討伐した鬼……否、鬼達は、立て続けに四体、凜に襲いかかってきた。それもただ近場に居合わせただけではない。連携にも似た動きで。

(……今回の鬼の徒党……偶然？それとも……)

これが何らかの前触れなのか。

そんな予感を過ぎらせながら、凜は腕を前に伸ばす。

ややあつて、その手には見慣れた灰の銚鴉がゆつくりとその羽をおろした。

『才疲レダナ、凜。』

「いや、それという程は疲れてないよ。今の鬼たちは、複数体だったけど、下級の鬼ばかりだったし。」

『イヤ…労イノ社交儀礼ダロウガヨ。俺ダツテ、才前ガアレ位デドウコウナルナンテ微塵モ思ツチャイネエサ。』

クロウとしても、凜は身体能力はともかく技量において、向この世界で指折りの剣士である称号の剣聖を持つ実力者だ。そうそう遅れを取るものではないことは充分わかっていているつもりだ。

だが、やはり心配なものは心配なのである。

『ツテオイ、凜。頬ガ切レテルゾ?』

「へ?…あ、ホントだ。」

クロウが言うままに頬を掌で拭えば、その白い肌に赤い血がベタリと付着する。

それ程強いと思えない鬼だったので、完全に躲したと思っていたのだが、どうやら掠めていたようだ。

「…躲しきれていなかったか。まだまだ力不足だなあ。」

『ツタク、チャント蝶屋敷ニ行ケヨ?ソノママ帰宅ナンテコトハ…』

「し、しないよ!間違ってもそんなことしない!」

凜がここまで焦る理由…

それは勿論、母親である千代である。

彼女はその厳格かつお淑やかな性格上、娘である凜に対してお淑やかさや女子たるものを求めている。

故に一度、腕に軽い怪我を負ったまま帰宅したときの事を抜擢すると…

傷が見つかる

←

千代、般若化

←
← 無言で凜を抱え、全盛期もかくやと言わんばかりの速度で蝶屋敷へ

←
治療

←
← 帰り道と帰宅後に、早い治療で傷跡が残りにくくなることと、女子の体に傷を残すことの重大さをこんこんと説教

こんな感じである。

千代の説教の恐ろしさは、凜もそうだが、讓治郎やクロウまでもが恐れるものとなっている。

何度もいうが、暁葉家ヒエラルキートップは伊達ではない。

「まあ…怪我した以上はちやんと蝶屋敷に行くから、クロウは先行して伝えといてくれる？」

『合点…任セトケエ！』

頼もしげに凜の頼みを受けたクロウは、勢いよく飛翔し、未だ暗い空の暗闇と同化して見えなくなった。

「なるほど…良い腕をしているな。暁葉 凜。」

さて、自分も蝶屋敷へ向かおうかと意気込んだとき、不意に背後からの男の声で身体を震わせる。

振り返れば、対し服を纏った長身かつ灰の髪を持つ青年。その『右腰』には隊士の例に漏れず日輪刀が差してあり、同じ鬼殺隊であることが容易に伺える。

「…どちら様、ですか？」

「俺は御剣 獅童。…見ての通り、しがない鬼殺隊だ。」

しがない鬼殺隊。その割には凜の肌にはピリピリと感じる。眼の前に立つ彼から発せられる、圧倒的な気配、そしてそれに伴う実力。それは正にこの世界で言う『柱』に準ずる程に。そして、凜の『観の眼』を掻い潜る実力者だ。

「先程の戦い。悪いが見せてもらっていた。」

「…それはどうも。拙い動きで申し訳ありません。」

声が震える。

目の前の男に気圧されていたのだ。

敵対している訳ではない。なのに、彼の気に当てられて、足と声が震え、身体から幾重にも重くなり、嫌な汗がじんわりと流れ出る。

「なるほど『閃の呼吸』…悪くはない。お前の父が墨を付ける程のことはある。」

「父を…御存知なのですか？」

「彼を知らぬ隊士は居まいよ。なにせ、お前の母上と並んで、最早伝説に等しい人物なのだからな。」

確かにそうだ。鬼殺隊ならば最古参であり、最も柱に近い男として君臨しているのだから、知らぬ訳ではないだろう。

「特にお前の母上とは昔からの知り合いでね。よく稽古をつけて貰っていた。」

まるで遠い昔を懐かしむように空を見上げる獅童。その仕草に凧は、どこか既視感を覚えていた。

「出来ればもっと早くお前の実力を見ておきたかったのだが、まあそれは良いさ。讓治郎さんが判を押すだけの実力と解ったんだからな。なんせ、俺が殺気を全開で当てても気を失する事がないんだ。それだけで十分さ。」

凧の実力に満足したのか、身体から放っていた殺気を収めると、獅童は戯けたように肩を竦める。

その瞬間、身体に押し掛かっていた圧で霧のように消え失せ、気張っていた凧は思わず尻餅をついてしまった。

「何れまた会い、そしてともに戦う事もあるだろう。その時まで更に力をつけておけ。我等の敵は、それほどまでに強大で油断ならない物なのだから。」

「無論、そのつもりです。目的を果たせぬまま朽ちるつもりはありませんから。」

「それで良い。だが一つ言っておこう。お前の中の『鬼』の力。使い所を見誤るなよ。」

「えっ…それってどういう…」

凧の問いに答えることもなく、獅童はまるで風のようにその場から

かき消えてしまった。

鬼の力：即ち、自身の中にある『黒』の力の残滓の別名。何故それを彼が知っている？人前でこれを見せたのは、後にも先にも幼き日に讓治郎の前での一回だ。父がそれをおいそれと人に話すことがないのは知っている。それだけに、御剣 獅童と名乗った青年の素性が気に掛かっていた。

「…いま、考えてても仕方ない、か。」

凜は立ち上がると、尻についていた雪を払い落とし、山を下っていく。

御剣 獅童

彼の正体を模索しながら、凜は蝶屋敷へと足を進めるのだった。

第17話 『蝶屋敷』

蝶屋敷

そこは生傷の絶えない鬼殺隊にとって、心身を癒やす場所。鬼殺隊最高戦力の一柱である花柱『胡蝶 カナエ』と、その妹の『しのぶ』が切り盛りする、実質鬼殺隊における病院のような場所だった。

そしてその名の由来とも言えるのが、この屋敷に咲く花に群がる、色様々な数多の蝶。その幻想的な玄関先で凧は一呼吸。

「ごめんください。」

あくまでも程々の声量で。ここは病院であることを失念してはならない。今ここには鬼との戦いで深手を追った隊士が何人も横たわっているのだから。

「はい？」

中から出てきたのは青みがかった長い黒髪を二房に結った、やや勝ち気そうな少女だ。

「こんにちはアオイ。」

「こんにちは凧さん。今日はどうぞされ……って見ればわかりますか。」

「あはは……不甲斐ない。」

「どうぞ。中でお待ち下さい。」

少女：神崎アオイは、訪れた凧の顔を見るやいなや、その頬に走る傷を驚くことはなく、ここで働く以上は見慣れたものなので、事務的に応じる。

彼女の先導で広々とした屋敷内を進んで行けば、とある表札が掛けられた部屋の前に到着する。

『診察室』

読んで字の如し。

「どうぞ。」

引き戸を開けてくれたアオイの促しで入室する。

広い診察室の奥。そこに備えられた椅子に座るのは、最早見慣れた人物。

凧よりも年下でありながらも医学に精通し、半ばこの蝶屋敷の主と

なっている少女。

「久しぶり、委員長。」

「委員長言わないでくださいって、何度も言ってるでしょう？馬鹿なんですか？」

朗らかな笑みを浮かべる凜とは対象的に、少しばかり青筋を立てる胡蝶しのぶだった。

「これで治療は終わりです。」

「ありがとう、助かったよ。」

手慣れた手付き、そして的確に凜の頬の傷に処置を施し終える。

思えば、前世ではこう言った軽い怪我の類は、戦術オーブメントから発動できるアーツ：有り体にいえば、魔法によって、難なく治療出来ていた。その事を思えば、どれだけ向こうが恵まれていた世界なのかを嫌でも思い知らされる。

小さな怪我でもすぐに治療できない事実は、凜にとって大きな壁となりつつあった。

「他に怪我は？ついでですから、健康診断でも済ませましょうか。」

「い、いや、怪我の治療をしてくれたらそれ以上は…」

「定期検診には顔を出さず、怪我した時くらいしか顔を出さないんですし、物の序でで受けてください、というか受けなさい。」

「私の意志がそこにならないんだけど!？」

ギリギリと圧を放ちながら近づくしのぶに圧されるように、凜はその身体を後ずらせる。自身とそう変わらない背丈の彼女からは想像出来ないそれは、鬼と相対する以上の重圧だった。

診察室の入り口の戸に追い詰められた凜。

もはや後はない。

そんな折、

「あらあら、凜ちゃんじゃない？」

背の戸が開かれたと思えば、細い腕が伸び、凜の身体をガツチリと抱き締める。

おつとりとしながらも、慈愛を感じさせるこの声。

「か、カナエさん…。」

「はあい、カナエお姉さんですよ。」

「姉さん、ちようど良かった！凜さんをそのまま捕まえててください。」

万事休す

その細腕からは想像出来ない腕力でがっしりと抱きとめられ、まな板の上での鯉の気持ちが、ここまで身にしみたことはない凜であった。

鬼殺隊士二人がかりとあつては、もはや抵抗は無意味に近い。

諦観の念で凜は隊士服上を脱ぎ去り、未だ成長乏しいその様を曝け出すことになった。

前世であつた一般的な健康診断とそう変わらない内容。

だが半身といえど、裸を他人に晒すのはやはり慣れないもので、早く終わってくれと念仏のように唱えていた。

そんな最中

「…あら？」

巻き尺を使い、胸囲測定していると、ふとしのぶが驚いたように目を丸くする。

「凜さん、少し大きくなりました？」

「…へ？」

しのぶの予想だにしない言葉に、凜は思わず素っ頓狂な声を出してしまった。

「前は二尺三寸だったのが、一寸大きくなってますよ？」

「なん…だと……。」

胸部装甲

それは男性の目を奪い、そして同性の間でも優劣をつけられやすい

それは、凜の前世から不変のものであった。

ああ、そういえば前世の委員長は同年代とは思えない程大きかったなあ。アリサもかなりの物を持っていたし、教え子内でもユウナは中々だった。

大小問わず、様々な胸部装甲に囲まれて居たリイン。当時は、その時の状況にいつぱいいつぱいなこともあつて、あまり意識しなかった。

しかし思い返せば何の事か、皆素晴らしい物を持っていたのだと改めて思わされる。

比べて今の自身は、前世で言うアルティナ位の背丈と胸部装甲。母親である千代もかなりの物をお持ちである為、遺伝子的に将来性は期待出来…

(つて、何を考えてるだ俺は!?)

ふとここで凜は我に返り、前世であるリインとしての意識をしつかりと呼び戻す。

胸の大小などなんだというのだ!? 大きかろうが小さかろうが関係ない。自分の目的は飽くまでも『黒のイシユメルガ』の滅殺だ。胸の大きさが、勝利の絶対条件ではないのだ。

そ、そりやまあ? 人並み程度にあつてもいいんじゃないかとも思うし? どうせならもう少し欲しいかなとも思わなくもないわけであつて。

「…それにしても。」

巻き尺を巻き戻したしのぶは、スンスンと鼻を鳴らし、凜の匂いを嗅いでいる。

13歳と言う年頃の乙女らしからぬ行動。しかし彼女には看過できないものが鼻をついていた。

「凜さん、お風呂、入ってます?。」

「へ?。」

「臭いますよ? 正直。」

ぐさあ! と、言葉の暴力が凜の精神をえぐった。

そういえばと、ここ一週間ほどは討伐に次ぐ討伐で、食事や睡眠は

ともかくとして、洗濯や洗身を疎かにしていたことを凧は思い出す。それが今、如実に匂っているのだ。しかも消毒液の匂いが蔓延る蝶屋敷だから尚の事。

「丁度いいです。ついでにお風呂で体を洗って来てください。服も洗濯しないと、匂いや返り血が染み付いてますし。」

「や、でも任務が入るかも…。」

「それには及ばないわ。」

ここでカナエが、それこそ満面の笑みで話に入ってきた。

「御館様に凧ちゃんの仕事を少し外すよう、クロウくんと言付けて貰ったわ。彼に聞いたところ、貴女結構任務漬けみたいだったし、御館様のことだもの。きっと快諾してくださるわ。」

「い、いつの間に…?」

御館様

鬼殺隊の柱のさらに上。

事実として隊を束ねる存在だ。

その顔を見ることが出来る、もしくは出来たのは、柱を含めて一部の隊員のみ。その居場所ですら、鬼に勘付かれないように秘匿されている。凧の親である讓治郎、千代も出会ったことがある隊員であり、彼の佇まい、そして声は、心に安堵をもたらしてくれる、不思議なものであると以前話していたのを凧は覚えていた。

「いい機会です。しっかりと骨を休めることも、一つの任務だと実感してください。お風呂場はその角を曲がって突き当たりですから。」

そう言われるだけ言われて、まるで蹴り出すかのごとく診察室から追い出されてしまった。餞別とばかりに手拭いを渡されて。

「そんなに臭うのかな?」

スンスンと自身の体の匂いを吸い込んでみるが、特段変わった匂いはしない。と言うのは凧の主観であり、周囲からしてみれば、泥臭く、そして汗の匂いが微かながらも漂っていた。凧はその匂いに慣れてしまい、嗅覚が若干麻痺していたりする。

ともあれ、前世の男としても、年頃の少女に『臭う』などと言われればシヨックを受けるのは変わらないものであつて。

その言葉と心の傷を払拭すべく、凜は風呂場へとやってきた。無論女湯である。

「大きく、なつてた、か。」

噛み締めるように自身の胸部に目を向ける。

主観的に見れば特に変わらないように見える。

だが客観や数値的には確かに成長している。胸云々はともかくとして、身体が成長しているという事は、鍛えれば身体機能が高まるということ。それは確かに喜ばしい事に変わりはなかった。

決して胸が大きくなつたことに対する喜びではない。

ないつたらない。いいね？

いそいそと服を脱ぎ取り、しのぶから投げ渡された手拭いを手に、風呂場へと繋がる引き戸を開く。むあつとする熱気とともに、目の前に広がるのは檜でできた見事な浴室だった。広さで言えば、教官時代の寮の風呂場くらいか。これだけ広いのは、患者が入浴による血行促進での治癒を目指す、湯治を行うためもあるのだろう。その証拠に、「これは…薬湯か。」

ただの湯ではない、湯気から香る独特のそれは、薬草から抽出した薬を湯に溶かしてあるからだ。

医療施設ならではの、家とは違う少し贅沢な風呂。

掛け湯を終えた凜はゆつくりとその湯に身体を沈めて、少し熱めの風呂を貸し切りで堪能したのだった。

第18話 『お人形』

「委員長。」

「委員長言うなって言ってるのがわからないんですか？馬鹿なんですか？死ぬんですか？」

「隊士服がないんだけど、どこに行ったか知らないかな？」

たつぷり半刻、薬湯を堪能して身を清めた凜は、おそらく診察を終えたであろう、しのぶを見つけて呼び止めた。

怒りとともに青筋を浮かべながら振り返った彼女を受け流し、凜はずけずけとしのぶに尋ねる。

そういうとこだぞ、凜。

「臭うって言ったでしょう？今頃アオイがこれでもかと洗って、お天道さんの下で天日干ししてますよ。」

遡ること数分前。風呂を終えて脱衣場に行けば、脱衣かごに入れていた鬼殺隊服と下着はどこへやら。代わりにおいてあったのは、入院患者の身に纏う白を基調とした簡素な衣服だった。

「いい機会です。働き詰めのおバカさんは、最低限隊士服が乾くまでは蝶屋敷で休んでいてください。」

「え……？」

「ちなみにこれは御館様命令です。クロウさんから言付けがありましたので悪しからず。」

言うだけ言ってスタスタと立ち去るしのぶに、呼び止めるだけの言葉を凜は持ち合わせていなかった。

「……………いきなり休めって言われてもなあ……。」

正直、休みという休みは、隊士生活の中でそれというほど取っていなかったのが災いした。

「仕方ない、鍛r……」

「ちなみに鍛錬の類も禁止ですからね。」

にゅっ、と廊下の角から、決して良い意味の笑顔ではないしのぶが顔を出して追い打ちをかける。

折角道場があると言うのに……。

「どうせなら、街にでも行ってきたらどうですか？ どうせ任務任務でお給金なんてほとんど手付かずなんでしょ？」

「なんでわかるんだ!？」

「凜さんですからね。」

立ち去り際は、今度は正に、してやったりと言わんばかりの笑顔で去るしのぶ。

そんなにわかりやすい性格なのだろうか、凜は自分に問い掛ける。もちろん、返答などない。

「…まあたまには…息抜きも必要…なのかな。」

しかし、そこまで決断をしておきながら、一つの問題に直面する。

お金のことは問題ない。

だが大きな大きな障害がここで凜の前に立ちふさがってきた。

「そういうえば、服がない…。」

そう、普段着と化していた隊士服は、今現在日と風に晒されている。着替えを持ち歩いていなかった凜の服はと言うと、今着用している入院服だけ。流石にこれで街を歩けば、道行く人々から怪しい目で見られるのは不可避。病院から抜け出してきたやべーやつと言う認識を持たれるだろう。

さてどうしたものかと思案すれば、存外答えは簡単に導き出された。

「そうだ、委員長から借りればいいんだ。」

言い出しつぺの法則というものがある。街に行くよう勧めたのはしのぶだ。だったらその案を出した彼女に服を借りれば万事問題ない。

そうと決まれば早速と、彼女が曲がった角を曲がったとき。

ぼぶん。

「うわっ!」

「ひゃっ!」

程よい弾力に弾かれて、凜は2、3歩後退る。反射的に目を閉じてしまった凜の耳に、知った声が入ってくる。

「あら、凜ちゃん。お風呂はもういいの?」

カナエである。

相変わらずホワホワとした空気をまとわせており、少し前世に会った委員長…エマに似た雰囲気を感じる。

「ええ、身を清めさせて頂きました。」

「そう、それは良かったわ。…ところで急いでたみたいだけど、どうかしたの？」

「いえ、休みを頂いた間、手持ち無沙汰なので街に繰り出そうと思ったのですが、服が無いのに気付きました…。」

「そうねえ。確かに隊士服は洗濯中だもの。それにその服で出かけるのもねえ。」

「ですので、委員ちよ…しのぶに借りようかと…。背丈は少しこちらが大きいですけど。」

「あ、だったら、私のお古でいいなら着てみない？多分、凜ちゃんの背丈に合うのもあると思うし。」

「それは嬉しいですけど…いいんですか？」

「いいのよ。しのぶにはまだ少し大きいし、今の私には小さいもの。だったら箆笥の肥やしにしているよりも、誰かに着てもらったほうが、服も喜ぶわ。」

そこまで言われて断るのはカナエの厚意を無碍にしてしまい、失礼にあたる。

そう考えた凜は、彼女の案に頷くに至った。

しかし、

これが凜にとっての悲劇の幕開けだった。

思えばカナエの部屋に入ったのは初めてだった。

案内されるがままにやってきた部屋。

至ってシンプルで、それというほど特筆すべきの物でもない。

ただ、『一人部屋にしては過剰な数の箆笥』を除いて。

「フッフ…嬉しいわ、凜ちゃんがこうして私のお古を着てくれるって言ってくれて。服は置いてて楽しいものじゃない。やつぱり着てみて初めて服なのよ。」

ニコニコと箆笥の一つ開けて、ゴソゴソと服を物色している。

おそらくは、自分に合う着物あたりを選別してくれているのだろう。

凜からしてみれば、無難で程々の物であれば言う事はない。

まあカナエの事だ。奇抜な物など出しはしないだろう。

凜はそう考えるが、それが実に甘い考えだったと彼女は語る。

「じゃあまづは…」

「まづっ…」

「凜ちゃん、これを着てみて!」

フワリと広げられるそれは、黒の下地に襟首や袖口、そして短いスカートの上に白のフリル。さらに白いフリフリとしたエプロンがついた衣服…。

「メイド服…だと…?!?」

「あら、凜ちゃん知ってたの? そうなのよ。とあるルートでね? 西欧から仕入れたの! ちょっと値が張ったけど、お外の国の服って斬新だからつい買っちゃったの☆」

買っちゃったの☆じゃない! と、凜は内心でツツコミを入れる。

そりやまあ確かに、明治の文明開化以降は西洋の技術や文化が日本の国に流れ込んで来ているのは確かなのだが、今の時代にメイド服は時代を先取りし過ぎているのではなからうか。

「や、あの…普通の着物とかであれば…」

「あら? 私はお古を着てみない? とは言ったけど、着物と限定はしてないわよ?」

「……………っ…」

「別段、嘘はついていないわよ?」

これはアレだ。

着せかえ人形にされるパターンだ。

現にジワジワと後退りする凜に詰め寄るカナエは、実にいい笑顔で、そして獲物を見つけた獰猛な魔獣の目のそれだから。

「はあい、ヌギヌギしましょうねえ〜?」

新しいおもちゃを見つけたように目を輝かせたカナエにより、凜は今日…また一つ女子としての階段を登った。

そして…それと引き換えに大切な何かを失った…気がした。

第19話 『心の壊れた子供』

「で？」

「あら？どうしたの？しのぶ。」

蝶屋敷から歩くことしばし。

隊士服に身を包み、そして各々の羽織に袖を通した胡蝶姉妹。その妹たるしのぶが、不機嫌な顔を隠しもせずに出した。

「ほら、しのぶ。これから任務なんだし、張り切らないと！ね？頑張るためにも笑顔笑顔！お姉ちゃん、しのぶの笑った顔が好きよ？」

「任務なのは重々わかってる。だからって…」

「……………」

「なんで凜さんがついてきてるんですか？」

そう、二人の一丈後ろには、無難にモダンな服に身を包んだ凜。しかしその雰囲気は暗かった。それはもう負のオーラが周囲に滲み出て、道行く人々がドン引きし、彼女らが進む道はモーセの海割れの如く開けていた。

普段なら、胡蝶姉妹を含めて見目麗しい3人なのだが、凜の放つそれによって台無しとなっている。

そしてその元凶たるカナエはにこやかに答える。

「だって折角凜ちゃんがおめかししたんだもの。街へ繰り出さなきゃもったいないでしょ？」

「でも、だからって私達の任務に連れて行かなくても…。」

「言い出しつぺはしのぶでしょう？だったら凜ちゃんを少しでも案内するのが筋じゃない？任務のみちすがらでも、ね、」

そう言われるとぐうの音も出ない。別段、しのぶとしては凜が嫌いなわけではない。委員長だのなんだのと呼んでくるのは頂けないが、自身と年齢が一つしか変わらないのに、次々に鬼を狩っているのだ。鬼殺隊としての実力は素直に尊敬していた。

「仕方ないですね。まあ乗りかかった船とも言いますし。ちよっと任務の腹拵えも兼ねて、鼻屑の食事処に案内しましょうか。」

「そうね、それがいいわ。となると、この先の橋を超えた処の店ね？」

「ええ、あそこの生姜の佃煮がまた絶品で…。」

「ん…？」

生姜の佃煮で饒舌になり始めたしのぶをさて置き、凧が顔を上げてその目を細める。先程までのおどろおどろしい雰囲気はどこへやら、任務かと思しき雰囲気、胡蝶姉妹は目を丸める。

「あら？どうしたの？」

「いえ…少し妙なものが見えまして…。」

彼女の見つめる先、釣られて二人もそちらに視線を移す。

なんの事はない、ただ道行く人々の変哲のない光景。

その中で一つ、看過するには難しい物が飛び込んできた。

丸坊主で、人相の悪い中年男性。これはまあある意味よくある光景だろう。

ただ彼の手に収まっているのは縄。そしてそれが伸びる先にあるものが3人の目に止まった。

「こんにちは。」

ここは最年長たるカナエが先陣を切った。相手のその風貌。何かあっても良いように、しのぶと凧は警戒態勢を敷く。

「その子はどうして縛られているのでしょうか？罪人がなにかですか？」

そう、男の持つ縄の先。

そこには見るからに汚れに汚れた見すばらしい子供が縛られていた。

「見てわかるだろ？蚤だらけで汚ねえからだよ。…それに逃げるかもしれないねえしな。」

そんな男の言葉を聞いてか否か、カナエがそつと子供に近寄ってしやがみ込む。

「こんにちは。はじめまして。私は胡蝶カナエと言います。あなたのお名前は？」

怖がらせないよう、カナエは穏やかに、そして慈愛を込めて子供に問い掛ける。

しかし子供は目を見開いたまま微動だにしない。視線も動かさな

い。ともすれば、カナエに焦点が合つてすらいないのかもしれない。その目は虚ろで、まるで心ここにあらずと言わんばかりに。

「そいつに名前なんてねえよ。親がつけてねえんだ。」

そんなカナエに男は冷たく言い放った。

この男が親だと思つていたが、しかし事實は違った。

罪人でもない子供を、第三者が縛り上げている。

それはおそらく、人売り。

「もういいだろ、離れろや。」

男からしてみれば、売約があつて急いでいるのか、はたまた売り物に対する故の気遣いなのか、カナエを離そうと手を伸ばす。

だがその手は鋭い一撃で払われた。

「姉さんに触らないでください。」

しのぶである。その腕つぶしは、鍛えられている男性隊士には及ばないが、一般男性程度なら問題ない。

「な、何なんだよてめえら…。このガキと話をしたけりや金を払いな。」

「…そうですね。…それならこれくらいでどうでしょうか?」

そう言つて凜が懐から取り出したるは、壱円札。しかも一枚ではない。何十枚の束である。

「相場が幾らかは知りませんが、これでこの子とお話しできますか?」

凜からしてみれば手持ちの大半。眼の前の男からしてみれば、喉から手が出る程の金額。それが眼の前に広がっている。

高々お話しするくらいでこれ程の大金を得られると踏んだ男は、ニンマリとうす汚い笑みを浮かべた。

「い、いいだろう。」

その反応に、凜はしのぶに目配せする。最初はキョトンとしていたしのぶだったが、すぐに意を汲み取りコクリと頷く。

金がもらえると踏んだ男は、縄を凜に渡すと、その手で金を受け取ろうと手を伸ばす。

「だが、はんこk…」

「それじゃ、お支払します…ね!!」

そう言つて凜は、手に持った札束を天に向かつて思いつきりぶちまけた。

ペラペラの紙幣は風に巻かれ、そして道行く人々は中を舞う壹円札に釘付けた。

「な……あ!？」

「おっと……風に煽られて手が滑りました!でもお金は出したんで、頑張つて拾つて下さいね!」

そう言うだけ言つて、凜は子供が繋がれた縄をしっかりと握ると、しのぶやカナエ、そして子供を連れて駆け出す。

「て、てめええ!」

「あ、それと、お話しする時間ですが、この子の生涯分ということに宜しく!あと、頑張つて拾つて下さいね!」

そう言つて煽る凜はとてもいい笑顔で、意を汲み取つたしのぶと、突発的すぎて驚くカナエも、苦笑いを隠せなかった。

「ほ、ホントにこれでいいのかしら?」

「いいんです!ホントはお金を払うのもおこがましいけど……。でも凜さんて意外と大胆なんですね……」

「昔からよく言われるよ。……とにかく、一旦戻る方向で良いですか?」
「もちろん。そのつもりだったもの。」

「はあ……任務に少し遅れるけど……仕方ないか。」

「男の子かと思つたら女の子でした。」

「何言つてるんですか。普通、初見で気づくでしょう?」

蝶屋敷に急いで帰り、その道すがら銚鴉に事の些末を伝え、そして凜としのぶが急ぎ例の子供を風呂に入れた。

そして裸にして気付いた。

『付いてなかった。』

「いや、あんなボサボサの頭と格好でだと気付けないか？」

「…凜さん、鈍いとよく言われますよね？」

「…うーん、鈍い…とは言われなかったけど…人たらしって言われたことはあるなあ。」

件の子供改め少女の髪を整えるしのぶに睨まれながら、自身の前世で言われた事に思いを馳せる。

そんなに人をたらしこんだ覚えはないのになあ…。

「でも、体を洗ったらこんな可愛くなったわ！やっぱり女の子だもの。綺麗にしとかないとね？」

「…まあそーですね。」

ある程度整えると、目元が隠れるほどに伸びていた髪を、鋏でチヨキチヨキと切りそろえて小綺麗にしていく。その風貌は正に美少女と言うに違わぬものとなっていた。

だがその少女の表情に、しのぶも凜も異様さを捨てきれずにいた。「でも姉さん。この子、今もそうだけど、髪を洗うときも髪を切つてる時も、全然目を瞑ろうとすらないんだもの！ちよつと変だと思わない!？」

変だと言われても、件の少女は表情どころか眉一つ動かさず、ただただ一点を見つめているのか目を動かない。と言うか何かを見ているのかすら怪しい。

「…もしかしたら、親に売られるほどの極限の極貧生活の中で、心を殻に閉じ込めているのかも。」

「心を、殻に？」

カナエの問いに、凜はゆっくりと頷くと話を続ける。

「人間と言う生き物は、心が追い込まれると自衛行動に移ることが多いんです。それは所謂、精神が壊れる寸前の状況とも言えます。そうなる前に人間は何らかの自衛行動を起こし、自分の精神を守ろうとします。…この子の場合殻に閉じ込めた…というよりも、心を外の世界と切り離して、自分の精神が傷付かないようにしてる。だから何をするにしても自分から働きかける…自主性が乏しいんだと思います。」

「…なるほど、確かにそう言われると合点がいきますね。」

しのぶとしてみても、凜の言うことに一理あると考える。身体医療に覚えがあるが、精神的なことには余り詳しくないため、凜の説明は目から鱗だった。

「それじゃあこれからは蝶屋敷で暮らしていけば、きっと良くなるわよ。」

「…確かに、良い環境で生活すればその可能性はありますね。」

「決まり！ふふふ、妹が一人増えたわあ。」

「…はあ…、まあ姉さんが決めたならそれで良いですけど。」

「こうなったら任務を頑張つて、しっかりと稼いでくるわ！行きましょしのぶー」

「あつ！姉さん！…すいませんけど、凜さんは…。」

「ん。この子を見とくから大丈夫。行ってらっしゃい委員長。」

「…委員長言うなって言ってるでしょ。…行ってきます。」

ばたばたと駆け出していく胡蝶姉妹を見送る。

そして残るは件の少女と二人きりの環境。

自身より小さな少女にもかかわらず、静寂という圧が凜に嫌な汗を分泌させていく。

「…ごめん、ちよつと厠に…。」

「……………」

耐えきれず、一旦外の空気をと凜は厠へと向かうべく一旦部屋をあとにする。

残ったのは静寂。

だが何も変化が起こることはない。

只々まるで人形のように畳の上で正座し、外に目を向けているだけ。

聞こえるのは鳥のさえずりと風の音、そして小さく蝶屋敷で働く人々の声が聞こえるのみ。

「これはこれは…。」

そんな少女の部屋に一つの大きな影が入り込んだいた事に、誰も気付かずにいた。

第20話 『麻婆の業』

さて、どうしたものか。

廁から例の部屋に戻る最中、凜は思考を巡らせる。

もちろん、件の心を閉ざした少女のことである。凜自信、先程しのぶ達に講釈したのはあくまでも前世で学んだ書物からの流用であり、実際にそうなった人と出会ったことはないのでもないとも言えない。

だがどちらにせよ、彼女をこのままの状態にしておくのは論外。せつかく蝶屋敷にいるのだから、心をしっかり治して、健やかに育つてほしいものである。そんな心は三十代の男であることから来る擁護心。前世で教師をしていただけに、生徒を思うのに似た思いがあるのかも知れない。

何にせよ、ゆつくりとしたケアが彼女には必要だ。

急がず、焦らず、じつくりと彼女のひび割れた精神を繋ぎ止めていくのだ。

荒療治など以ての外…

「ぴゃああああああっ!?!」

蝶屋敷に、絹を引き裂くかのような悲鳴が響き渡った。

劈くようなその声に、凜は思わず走り出していた。廊下だろうが構いやしない。なにか異常事態がこの蝶屋敷で起きているのだ。急がねば取り返しのつかないことになりかねない。

そして悲鳴の方角。それは凜が先程までいた縁側の部屋…つまり例の少女がいる部屋だ。

何があった!?

まさか賊が入り込んだのか!?

焦り、そして逸る気持ちをできるだけ抑えながら、凜はその部屋と廊下を隔てる襖を、スパーンと勢いよく開いた。

「フッフ…わが愛娘、凜ではないか。しばらくぶりだな。」

「父…上…?」

そこに居たのは父である譲治郎。

なぜ父がここにいいのか。

「フッフ…よもや蝶屋敷に差し入れをしに来たところで愛娘と鉢合わせとは…私もよくよく運が良いな。しかし…」

そう言つて讓治郎は自身の視線を落とす。

「この程度の辛さで音を上げるとは…私が求める『麻婆の極致』に至れる同志など、そうそう作れたものではないな。」

彼の視線の先、

そこにはうつ伏せで倒れた件の少女。

倒れた先にはレンゲが転がっており、その中には、凜にとってトラウマ物の赤々とした『アレ』がこびり付いていた。

これらのロジックから導き出される解は、たったひとつ。たったひとつの単純な答えだ。

讓治郎はこの子に『アレ』を食べさせた。

「ち、父上？」

「フッフ…何かな？愛娘よ。」

「その手に持っているのは？」

凜が指摘する讓治郎の手。そこにはやや窪んだ直径六寸程の皿。嫌な予感とトラウマの匂いと、そして『アレ』の香りがプンプンする。

「私の作った新作だよ。蝶屋敷の皆に食べてもらおうとお裾分けに来たのだ。」

「で、この子に食べさせたんですか？」

「察しがいいな。玄関に誰もいなかったからこちらに回った。そこにこの娘がいたのだ。」

讓治郎曰く、

勝手は失礼とわかつていたが、上がらせてもらった。そこにいたのが例の少女。屋敷の者かと思ひ、声を掛けども微動だにしない。どうしたものかと困っていた折、少女のお腹が可愛らしく鳴ったのだ。おそらくは『コレ』の匂いに我慢できず、腹の虫が催促したのだろう。この匂いに空腹を示したと言う事は、同志となりうる素質を秘めている。そう判断して一口食べさせたのだという。

「やはりまだ改良が必要か。『麻』と『辣』の極致…その道は長く険しいな。」

「クロウ。」

麻婆への飽くなき探究心が留まらぬ父を他所に、凜は自身の鏃鴉を呼び出す。程なくして現れた彼は、現場の惨状を見て、一瞬で察する。

『…アー、マタカヨ。』

「うん、また。と言うことでよろしく。」

冷酷に、そして淡々とクロウに言伝を頼む。その眼はどこまでも虚ろで、そして冷たかった。

「どうしました!?!さっきの悲鳴は!?!」

遅れて駆けつけてきたのはアオイだった。そして部屋の惨状を見て、その顔色を見る見るうちに青く染めていく。

傍から見れば殺人現場である為、彼女が驚くのも意味はない。

『蝶屋敷殺人事件〜麻婆は死の香り〜』

と題して、後世に語り継がれる可能性が無いわけではない状況に、凜は身震いを禁じ得ないでいた。

「う……………」

そんな中、ピクリ、と件の少女が身を震わせる。どうやら一命を取り留めたらしい（大袈裟）

凜は急ぎ彼女を抱えあげると、その目は薄っすらとながら見開かれていた。しかし、口の周りが辛さでひりついているのか、まるでタラコのように赤く腫れて痛々しい。

「良かった、生きてた。」

「フッフ…娘よ。父の料理を毒物か何かのように言うのは如何かと思うぞ?…」

「銀シユトの呼吸 壺ムの型 征嵐ツァー槍!!」

瞬間、何かがまるで突風が吹き荒れるかの如き勢いで蝶屋敷へと飛び込んできた。その矛先は寸分違わず薄ら笑いを浮かべていた讓治郎の顔面に吸い込まれ、彼はまるでボロ雑巾のように吹き飛ばされて壁にめり込んだ。

もうもうと舞い上げられた粉塵。

そこからは割烹着に身を包み、その手に物干し竿を構えた見目麗しい女性の姿。

「母上、お久しゅうございます。」

「久しいですね凜。中々帰ってこないの心配していましたよ。」

其れは伝説に近い元鬼殺隊。

寿退隊してなお、未だ語り継がれる女傑。

その槍捌きは、隊を退いてなお健在。

美しい風貌から、彼女を求めて男女問わずに鬼殺隊に入らんとする若者が居た程だ。

「ち、千代…様? どうしてここに?」

「ふふ…私の主人が粗相をしたと、蒼…いえ、凜の鏖鴉から聞きましたね。急ぎ向かった次第です。」

アオイが震える中、さも当然のように応じる千代。その目は聖母のごとく慈愛に満ちており、彼女の心根がありありと伝わってきている。同性であるアオイすら見惚れてしまうほどに。

しかしクロウもそうだが、どれほど急いで来たのだろうか?」

「犠牲者は…凜、その娘ですね?」

「うん。現場の状態と、父上の自白からそうみたい。」

気づいたは良いが、未だぼおつとしている少女に、千代は膝を付いて視線を合わせる。

「私の主人がご迷惑を掛けてしまったみたいですね。貴女に心よりの謝罪を…。」

「……………」

「主人は私が責任を持って矯正します。後日、改めて本人にも謝罪させますので…。」

「……………」

その赤く腫れた唇が、ほんの、ほんの僅か動いた。今まで微動だにしなかった彼女の口が動き、そして言葉を紡いだ。

「いた…かった…けど…、おいし…かった…。」

凜と千代は耳を疑った。

あの殺人麻婆をあろう事か『美味しかった』とツ!! そう言ったのだツ!!

おそらくは、彼女が味わった貧困生活。その中での食事は、もはや

食事と言い難く、美味いと呼べるものではなかったのだろう。そんな彼女にとつて初めてと言える『一応』マトモな料理である殺人麻婆豆腐は、辛さとともに味わう、初めての『美味しい』だった。

「フ…フフ…。ついに我が麻婆を美味いと称する者が現れた…！」
壁に大の字でめり込みながら愉悦の笑みを浮かべる讓治郎。コイツは全然反省していない。

「それでも、痛い目にあつた事は事実です。」
立ち上がる千代。

その体からは例の黄金の気が滲み出ており、ゆらりゆらりと讓治郎に歩み寄る。こちらからは死角で見えないが、讓治郎の表情から察するに、千代の顔は相当ヤバイらしい。

「アナタ、今日はミツチリと、嫌と言つても止めないくらいに話をさせてもらいます。」

「や…その…千代…さん？」

「フフフ…あれ程激辛麻婆を作らないように言つたのに…イケないヒトですね？」

「ヒイイ…！」

妻という字には勝てはせぬ。

獅子奮迅の名を欲しいがままにしている隊士である讓治郎。前世を、そして前前世を知る凜は、今の彼を見て、前世の仲間達は何を思うだろうか？

「さあ。家に帰つてたつぷりと話しましょうか？」

もはや逃げるすべなど無い。首筋を捕まれ、ズルズルと引き摺られて連行される父に、凜は只々心の中で合掌し、置いてきぼりを食らつたアオイは、目の前で起こつた騒動に付いて行けず、ポカンと口を開けているだけだった。

第21話 『君の名は』

「あらあらまあまあ！」

「こ、これは…任務に出ていた間に一体何が…？」

暁葉夫妻の動乱から数刻後。

任務を終えて帰ってきた胡蝶姉妹は玄関口で二者二様の驚きを見せていた。

「……………」

無言で首を傾げるのは件の少女。

二人が玄関を開けて間もなく、彼女は緊張しながらも、

『おかえりなさい。』

と、言葉を発して出迎えたのだ。

二人からしてみれば、任務に出ていた間に何があったのかという疑問は確かにあるのだが、それはさておいても彼女の声を聞くことができるのは驚きを隠せなかった。

「こ、今度は何をやらかしたんですか凜さん!!」

凜が何かしら関わっているのだろうと勘付いたしのぶは、ずかずかと廊下を足早に抜け、凜がいるであろう縁側の部屋に踏み込んだ。件の凜はというと、縁側で日光浴を楽しみながらお茶を啜っていた。年の割に妙にしつくりくる風景だ。

「失礼な、今回は私は何もしてない。」

今回はという言葉の通り、彼女には前科があるのだが、それはまた別のお話。

しのぶの後を追うように入ってきたカナエは終始冷静で、興奮冷めやらぬ妹を諫め始める。

「まあまあ、しのぶ。あんまりまくし立ててたら、凜ちゃんの話も聞くこともできないでしょう？文句があるなら最後まで聞いてからでもいいし。」

「ぐぬ……」

姉には弱いようで、歯噛みしながらもすんなり引き下がるしのぶ。変わってカナエが前に出ると、穏やかながらも真剣な口調と表情で

凜に問いかける。

「それで凜ちゃん、この子に一体何があったのか、詳しく教えてくれな
いかしら？流石に喋らなかつた子が任務に行つてた間に喋れてたら、
しのぶでも驚くわ。」

後ろで抗議の声が聞こえるが、カナエはどこ吹く風。件の少女は目
をキョトンとさせている。

流石になんの説明もないのは胡蝶姉妹も混乱するのも仕方ないし、
納得もしないだろう。

凜は説明していく。

少女が自身が目を離れた隙に、蝶屋敷にやってきた父である譲治郎
が、『ラー油と唐辛子を百年間ぐらい煮込んで合体事故のあげく、『オ
レ外道マーボー今後トモヨロシク』した料理を食べさせた結果であ
ると。

「でも変ねえ？ラー油と唐辛子を百年間ぐらい煮込んで合体事故のあ
げく、『オレ外道マーボー今後トモヨロシク』を食べて心の病気が治る
ものなのかしら？」

「ラー油と唐辛子を百年間ぐらい煮込んで合体事故のあげく、『オレ外
道マーボー今後トモヨロシク』の辛さがよっぽど堪えたんでしょ。」

「その：ラー油と唐辛子（以下省略） って：正式名称なんですか？」
「名状しがたい料理だからね、仕方ないね。それに、委員長の辛さが堪
えたっていう推論は、恐らくは正解だと思う。」

凜曰く、味わつたことのない、そして人体に耐え難い辛さの権化で
あるアレの刺激が、悲鳴という形で彼女の殻をぶち破つたのだと。も
はや凶器か拷問の分類に振り分けられそうな物だが…。何にせよ、ア
レが彼女にとって結果的に『ショック療法』となつたのだ。

「全く：父上のアレには困つたものだ…。ただでさえ、着々と鬼殺隊内
部で犠牲者が増えてきているというのに：。」

ちなみに、

錆兎と義勇、そして真菰も既に麻婆の毒牙にかかつていたりする。

何も知らぬ三人に、譲治郎が労いと称して差し入れたのがアレ。な
んの疑いもなく口にした彼等は、一人として例外なくその意識を飛ば

した。義勇なんかは、姉が迎えに来たと後に語っており、姉に会えるのならば、今一度食べたいなどと危険な発言があったとか。

「まあとにかく、過程は讓治郎さんのアレにしても、この子が喋れるようになって、めでたしめでたしにしましょ？ね？」

「まあ…姉さんがそう言うなら…。」

少し腑に落ちないしのぶだが、やはり姉には弱いのか渋々納得する。

とは言え…

「……………」

先程喋ったとしても、基本的に無口…というか、胡蝶姉妹は『おかえりなさい』しか聞いていない。もともとが無口なのか、それとも…

「そうだ！せっかくな喋れるようになったんだし、いつまでも『この子』とか『あの子』じゃ可愛くないでしょ？名前、聞かせてほしいなあ。」

「名前、ない。」

にべもなく、そう返された。

どうやらあの人売の言ってきたことは事実だったらしい。名前という名前がなく、今の今まで生きてきたというのか。

「うくん…じゃあ、私達で決めちゃうっていうのはどうかしら？名前もなく生きていくなんて、寂しすぎるわ。ね？」

「それもそうですね。無いなら作ればいいわけですし。」

そんなこんなで、カナエ、しのぶ、凜、アオイによる、件の少女名付け大会（仮称）が蝶屋敷で開催されたわけである。

論議の結果だけ言えば、カナエの『カナヲ』が選ばれることとなった。

曰く、

「私のカナエの『エがヲになる』ことで『笑顔になるように』って掛けたの。」

とのこと。純粹に、今は表情に乏しくとも、ゆくゆくは笑顔が似合う女の子になって欲しいというものだろう。

そんなカナエの願いは誰にも伝わったようで、異議なく取り決められた。

カナヲ本人も理解したのか、

「カナヲ…カナヲ…」

と覚え込ませるように呟いていた。

さて、名前が決まれば次は名字だ。

それぞれの名字である『胡蝶』『神崎』『暁葉』に加え、いくつか候補を挙げて、その中からカナヲに選んでもらおうと言うことで決まった。

暁葉の名字については、凜自身辞退しようと思っていたのだが、

「お金を出したのは凜ちゃんよ？外せるわけ無いわ。」

というカナエの一声で何も言えなくなってしまった。

神崎を出したアオイは、単に

「姉妹がほしいから。」

という理由だったようである。

ともあれ、

「……………」

「これは？これじゃなくていいの？ホントにいいの!？」

自身の名字を激推しするアオイ。しかしカナヲは選んだ。その名字を。

「そう。それで良いのね？」

「……………」

言葉は出さず、ただただ頷く彼女の手にはその名字。

「栗花落…カナヲ…。確かに悪くはないかな。」

大切に、そつと、その名字が記された半紙を抱きしめる。

その表情からは少し、ほんの少しだけ喜びの色が見て取れた。

カナヲのその名が、早くも功を奏したかのように…。

第22話『流転』

件の少女改め、カナヲが蝶屋敷で暮らし始めて数日。

最初こそぎこちなかった彼女も、胡蝶姉妹やアオイ、凜の尽力により、徐々にここでの生活に慣れてきている様子だ。特に、アオイとは歳が近いこともあってか、妹ができたみたいに甲斐甲斐しく面倒を見ていた。

そんな中、

「閃の呼吸 式の型 疾風」

超屋敷の庭に設けられたカカシに、木刀を構えた凜が肉薄する。その踏み込みたるや、凜の姿が消えると同時に一陣の風が吹き抜け、瞬く間に深く地面に突き刺されたカカシの支柱をへし折り、高々と吹き飛ばしていた。

だが凜は止まらない。背後で高々と打ち上げられたカカシに向き直ると、木刀を再び鞘に想定した左手に収める。

直後、

思い切り地を踏みしめると、落ち行くカカシへ向かって跳躍、肉薄。

「全集中……」

体内に酸素を満遍なく行き渡らせ、筋肉を爆発的に躍動させる。実戦さながらに、その手に力を込め、型を繰り出す。

「閃の呼吸 肆の型 紅葉斬り」

落ち行くカカシとすれ違いざまに抜刀。

カカシは更に跳ね飛ばされ、高々と天を舞い、蝶屋敷の庭にグツサリと突き刺さった。

高々と跳躍していた凜も、高所からの着地とは思えない程に軽々と着地し、ふう、と一息入れる。

そんな彼女を目で追う、一對の眼。

「……………。(パチパチ)」

カナヲである。

普段と変わらぬ表情に見えて、目を少し丸めている。加えて拍手をしているのを見るに、凜の剣戟に感銘と共に驚いているらしく、その

目に僅かながらキラキラとしている。

「カナヲ…剣術に興味があるの?」

そんな凜の間に、カナヲはやや思案し、コクリと頷くに至る。今となつては廃刀令が敷かれている中、刀を振るう自分たちが珍しいのかもしれない。

しかし…

今自分たちが刀を振るう理由。

それは悪鬼滅殺の為。命のやり取り。

そんな死地に、何も知らぬ少女を引き込む事を躊躇った。

「…まあ無手の護身術程度なら…。」

丁度、八葉一刀流の捌之型は、刀を手放したときのための型である。刀を握らずとも、己の身を守る手立てとして身に付けるのもありかもしれない。

「カナヲ、刀はまだ危ないから、素手の護身術から身につけよう、ね?」
「うん。」

そんなこんなで、凜の指導の元、全集中の呼吸とともに、カナヲの身に捌ノ型である『破甲拳』が刻まれることになる。

これが功を奏すかどうか、それは女神エイドスや御仏のみぞ知る。しかし…

(…まあ、鬼に女の子しか狙わないやつなんていないだろうし、あくまでも暴漢から身を守る目的でいいかな。)

人それを、フラグと言う。

翌日

新品同様に張りが付いた隊士服に袖を通し、白銀の日輪刀を刀袋に

収めると、これから向かうべき任務に備えて体を解す。

天気は上々、気分も上々。数日の骨休めの成果か、幾分身体が軽く感じられた。

「じゃ、行ってくる。」

蝶屋敷の玄関で、凧は出立の為に別れを交わす。

見送るのはアオイとしのぶ、カナエは御館様からの呼び出しとかで早朝から留守にしている。

そして…

「……………」

ぎゅう…と無言で凧の腰にしがみつくのはカナヲだった。その仕草はまるで、自分の大好きな人との別れを惜しむ子供そのもの。顔も若干膨れっ面になっており、思えば最初の頃に比べて積極的で、そして感情表現も豊かになってきているのは明らかだった。

「だめでしょカナヲ。凧さんが困惑してるわ。」

そんなカナヲを優しく宥め、嗜めるしのぶ。だがカナヲは頑として離れない。

「カナヲ。」

自身の隊士服を握るカナヲの手をそつと解き、その手を包み込むように握って、凧はしやがみ込んだ。

名を呼ばれたカナヲはその大きく見開いた目でじつと凧を見つめる。

「少し出かけてくるけど、何かお土産を買ってくるよ。なにがいい？」

お土産

そんな言葉を聞いたことが無いカナヲは意味がわからず、ただ首を傾げるだけ。

これは言葉の選択ミスかと凧は苦笑いを浮かべる。

「ん…じゃあカナヲが好きになりそうな物でも見繕ってくるよ。だから、いい子で待ってほしい。カナヲはいい子だから、出来るよね？」

もとが男かどうか疑わしいまでに愛情を込めて、それこそ男を振り向かせかねない優しい笑顔で、凧はカナヲの頭を撫でながら問う。

いい子

そんな言葉を向けられて、カナヲは諦めとともに意を決して、コクリと小さく頷く。

カナヲがわかつてくれたことに嬉しさを覚えながら立ち上がる凧。彼女のその隊士服を、カナヲはもう掴もうとはしない。

「私には生姜の佃煮をお願いしますね、凧さん。」

「…へ？」

「アオイや姐さん達にもお土産、期待していますね？」

一応カナヲだけの予定だったのだが、いつの間にやら便乗され、しかも拒否できない雰囲気構築されていた。元凶たるしのぶは、『断るなんて野暮なことしませんよね？』と言わんばかりに笑顔で圧をかけてきているため始末が悪い。というかこの前カナヲの件でかなり散財してしまっているのに、金欠であることはしのぶもわかっているはずなのに。いや、確信犯なのだろうか。

だが、しのぶの言ではないが、ここで断れば無作法というものだ。しばらくは節制を決意し、凧は頷くしかなかった。

「じゃあ、行ってくる。」

そう出立する凧の背中では、現代で言う家庭で娘や妻の尻に敷かれる中年サラリーマンのように寂れたものだったという。

さて、

凧が女性の尻に敷かれている最中。

その父親であり、まさしく妻の尻に敷かれに敷かれている讓治郎もまた、鬼殺隊としての任務についていた。

それならば特に何ら変わらない内容だろうが、今回は違った。

友人の男の息子。彼が鬼殺隊隊士として讓治郎の任務に同行させてほしいとせがんで来たのだ。

それを二つ返事で返せば、傍から見れば任務は『まるでピクニックだな』と揶揄されかねない。

だが友人の家は、『代々鬼殺隊の名家であり、柱を輩出してきた血族』であるため、そのような生易しい覚悟で任務に望むものでないことは讓治郎は重々承知していた。

「しかし…。あ奴も少しは前を向き始めたということか。息子の成長を願うのは、親として当然の願いではあるがな。」

一時は酒に溺れ、柱とは思えぬ体たらくではあった。それは自身の子供にすら当たり散らすという、親としてあるまじきもの。だが、『とある経緯』をへて、その気持ちを持ち上げつつあるようだ。

「さて…任務はこの村の先にある廃寺にいたると思われる鬼だな。複数体という報告も上がっている故に、人手がほしいのも確かだが…。」

さて、と、その件の合同任務につく友人の息子を探す。

鏝鴉によれば、この先の飯屋で待ち合わせて…

「うまいー！」

突如、まるで衝撃波のような一撃が讓治郎を穿つ。

吹き上げられる砂塵、カラカラと踊る瓦。鬼の血鬼術かと思われたが、その声の主を見つければ、その是非は明白だった。

「うまい!!」

「うまい!!!」

「うまい!!!!」

そこにいたのは、ひたすらに飯を頬張る一人の青年。その髪は炎を彷彿とさせる焰色で、大きく見開かれた目はひたすらに正面を見つめて離さない。

「ふむ、探す手間が省けたか。」

「うまい!!」

「おい。」

「うまい!!」

「聞いていないのか？」

「うまい!!」

「杏寿郎君!!」

「うま…む!?」

食べるのに夢中で、讓治郎の声も届かず、大声で話しかけてようやく彼の存在に気付いた杏寿郎と呼ばれた青年は、その箸を止めた。

「これはこれは！讓治郎殿！」

「杏寿郎君、飯に感動するなどは言わんが、大声でうまいと連呼するのは頂けんな。」

「む！よろしくなかったでしょうか！」

「君一人で飯を食っている訳ではない。周囲を見たまえ。」

杏寿郎が大きく見開かれた目で周囲を見渡せば、店に来ていた客の誰もがその声量に驚き、彼から距離をとった席へと移っていた。その声量は、全集中の呼吸のための強靱な肺活量からくるものだろうが、力の無駄遣いである。

「はっはっはっ！よもやよもや！俺とすることが！鬼殺隊として不甲斐なし！穴があつたら入りたい！」

「どこを見て話しているんだ、こつちを見て話したまえよ。」

その大きな目には何が見えているのか、讓治郎の上方に目を向けて笑う杏寿郎。

「しかし讓治郎殿、料理というものは、うまいと食べるからこそ、作り手への賛辞であると考えております！」

「…む、まあその心意気は良いものではあるが…。」

この大声を出す真つ直ぐな男こそ、讓治郎の友人であり、現炎柱である煉獄慎寿郎の息子、煉獄杏寿郎である。

その血統の通り、その赤き炎刀から振るわれる刃、そして収めし呼吸は『炎』。

「讓治郎殿も、任務の前には腹拵えをされてはいかがか？昔から腹が減っては戦はできぬ！と申します故！」

「…まあ確かに一理あるか。…大将！」

「はいよー！」

「麻婆豆腐、辛さマシマシでー！」

「まあぼお？そんなもん、うちにやないよ！」

「よもや!? 未だあの味は日の本に浸透していないと…!?」

「む！讓治郎殿！そのまあぼお豆腐…とやら！非常にそそられる響きと感じます！」

「そうか！君もそう感じるか！今度私をご馳走しよう！一度食べれば君も虜となろう！」

杏寿郎が心ではなく、身体を燃やす日は近い。

第23話 『思わぬ邂逅』

廃寺

讓治郎と杏寿郎が腹拵えを済ませた村から程近い、山越えの道沿いにひっそり佇む寂れた寺だ。その境内を囲む塀や寺そのものに、所々穴が空いたり崩れたりしている所を見るに、長年の間人の手が入っていない事を意味する。

そんな廃寺の門に立つ二人の男が内部を覗き込む。

「うむ、やはりここが鬼の住処と見て間違いないですね。」

「そのようだな。気配が複数、それも中々強い。」

情報はありふれた物だった。

夜にこの廃寺近くを通ったと思われる人々が尽く行方不明になるという情報が鬼殺隊に舞い込んできたというもの。

野盗の仕業かもしれないが、それならそれで拘束すればよし、鬼ならば斬首する。それだけだ。

「しかし、讓治郎殿が御一緒に下さるならば、これ以上に頼もしいものはありません！俺も微力ながら助太刀しましょう！」

「だがあくまで君が主となることを努々忘れるな。君はこれから柱として鬼殺隊を引っ張っていく事になるであろう男だ。実戦経験は多いに越した事はあるまい。」

「無論！」

「良い返事だ…ならば！」

讓治郎の声に合わせ、同時に門をくぐって境内に駆け込む。

同時に、

境内に入ったのを見計らうように4つの影が二人へ殺到する。

完全なる不意打ち。

並の隊士なら反応が間に合わず、哀れ屍へとその姿を変えるだろう。

しかし生憎と彼らは『並』などではなかった。

「黒の呼吸 壱ノ型 黒焰撃」

讓治郎のその手に持つ日輪刀。それから放たれた高速の斬撃が瞬

く間に3体の鬼の頸を跳ねた。

「炎の呼吸 式ノ型 昇り炎天」

杏寿郎も得に労することはなく、迫りくる鬼の頸を、斬り上げの太刀筋である式ノ型で両断。

不意を突き、優位に立ったと思ったであろう鬼は、自身が何をされたのかを理解する間もなく、その身体を塵と変えていく。

そんな中、彼らが最期に見たもの。それは日の力を宿するという日輪刀。

杏寿郎の日輪刀は刃が赤いという以外は特に変わらないものだろう。

だが讓治郎のそれは違った。

それは刀というにはあまりにも大きすぎた

大きく

分厚く

重く

そして大雑把すぎた。

それはまさに鉄塊だった。

およそ人の胴程はあろうかと言う幅。

それを片手で振り回し、そして同時に迫る三人の鬼の首を一瞬で切り捨てたのだ。

「うむ！あいも変わらず、讓治郎殿の太刀筋は凄まじいな！俺もまだまだ鍛錬が足りない！」

「いや、これを真似ようなどとは思うなよ？最悪肩が使い物にならないからならな。」

そこから始まるのは蹂躪だった。

今まで鬼を恐れた人々を一方的に喰らっていた悪鬼共に、鬼殺隊の最強の恐ろしさと言うものを嫌というほど味あわせることとなる。

幸いなのは、鬼にとってその恐怖を味わったのが、死ぬ前の一瞬だったことだろうか。

「流石は讓治郎殿！学ばせて頂く為に行きさせて頂きましたが、圧倒的でどこを参考にすれば良いやら分かりかねます！」

「それは褒められているのか貶されているのか微妙な感想だな。」

「無論！称賛しているのです！とても真似できぬ太刀筋故！まだまだ俺も精進が足りぬと痛感した次第です！」

言つてしまえば年季が違うのだから仕方ない。

片や十数年の鍛錬。

片や百年近くの経験。

戦い方や体の使い方においては、讓治郎が圧倒的に積み重ねた月日が大きいのだ。

それでもその戦いぶりを見て、向上心を滾らせる杏寿郎。その燃える心があるのなら、きつと彼はまだまだ強くなれる。

「…ふむ。」

将来有望な若者に心躍つたのも束の間。ふと讓治郎が眉をひそめて周囲を見渡す。

「む！どうかされたか!?!」

「いや…何でもない。私は少し所用を済ませて下山する。杏寿郎、君は先に帰路につくと良い。」

「良いのでしょうか!?!」

「うむ。今回の任務はこれで終いだ。隠の諸君にも引き上げるよう伝えてくれたまえ。」

「御意！それでは失礼仕る！」

任を終え、余裕を残して軽い足取りで下山する杏寿郎。

その姿を見送り、気配が完全に遠のいたのを見計らい、讓治郎は誰に言うでもなく呟いた。

「さて…そろそろ出て来てはどうだね？」

「気付いていたか。流石、と言っておこう。」

青年のような声だった。

声とともに寺の屋根の上に現れ、そして発せられるのは、鬼に極めて近く、そして限りなく遠い気配。

中性的とも取れる顔つきに白く長い髪。

頬から鼻に伸びるように広がる痣。

そして鬼とよく似た人ならざる目。

結膜は血のように赤く染まり、角膜は燃えるようなギラつく金の中にネコのような瞳孔。

見える端々の色付きは違えど、その姿はとても懐かしさを感じるもの。

「長年、私は貴様を追っていた。それがよもや、そちらから現れてくれようとは思ひもしなかったぞ。」

「ふん…我としては会うのも憚られた。ただ、懐かしき気配に惹かれただけの気まぐれに過ぎぬ。」

「だがこちらとしては千載一遇の好機…相見えたのであれば、その頸を貰い受ける。」

語りを終え、かの青年を見据えた讓治郎は日輪刀『鬼ころし』を構えると、その身体からは先程まで見せなかった赤黒い気を放つ。

鬼神吼

前世で身体強化として用いていた呼吸法だ。

「丁度良い…我も大分『この身体に馴染んできた』所だ。肩慣らしがてら、相手をしよう。」

そう彼が腰から抜き放つのは、赤い太刀。

だが赤いと言えど、杏寿郎の日輪刀のように鮮やかな色合いのそれではない。

禍々しく、まるで鮮血が染み込んでいるかのような赤黒いものだった。

「来い、嘗ての我が『起動者』よ。我が欲したその力…今一度見せてみよう！」

「良かろう…！ならばその身を以て知れ！暁葉 讓治郎…否！今この時は敢えてこう名乗ろう！」

獅子心皇帝ドライケルス・ライゼ・アルノール！我が前世の遺恨を断ち切らんが為、この身を賭して貴様を滅する！」

「来るがいい…ドライケルスッ!!!」

「征くぞ…『黒のイシユメルガ』!!!」

これは偶然か、それとも必然か。

僻地で相見えたのは宿縁の者。

前世からの遺恨を滅するため、ここに於いて今世で初めて、讓治郎は『本気』を出した。

全ては、家族の『宿願』の為に…。

第24話『さらなる邂逅の終わり』

廃寺が瓦礫の山と化していく。

関係者から見れば、なんと罰当たりと怒り心頭だろうが、しかし目の前の戦いはその罰当たりどころの話ではなかった。

「百鬼斬」

赤く禍々しい炎を刃に纏わせ、イシユメルガは駆ける。その踏み込みの速度は、八葉一刀流の式ノ型である疾風のそれだ。イシユメルガはそれに、自身の力を練り込み、より昇華させた物としていた。

だが、讓治郎とて負けてはいない。

鬼神咆で底上げた身体能力は、前世のそれに迫るほどのもの。練り上げられた気は、力を振るうために踏ん張る足を、境内の石畳にめり込ませる程に高められていた。

四方八方から迫るイシユメルガの斬撃。

それを蹴散らさんため、力の全てを以て、地面に刃を突き立てた。

「黒の呼吸 式ノ型 業滅刃」

突き立てられた刃から迸る気により、地面が隆起し、イシユメルガの足場を崩す。

足運びが物を言う式ノ型において、足場が不安定であるという事即ち、武器を殺されるということにつながる。

「ぬうんー」

一瞬の動きの躊躇い、それは讓治郎にとって好機。見た目の重さなど感じられないほどの速さで振るわれる日輪刀。その重い一撃は、イシユメルガが手に持つ赤い刃で防御しようとしたところで、それを上回る一閃。物の見事に吹き飛ばされたイシユメルガは崩れかけの塀に突っ込み、その衝撃で轟音と共に崩れた瓦礫へと埋もれていった。

追い打ちとばかりに踏み入る讓治郎。だが同時に瓦礫が爆ぜ、奴もまた踏み込んできた。

ぶつかり合う刀と刀。甲高い金属の衝撃音が山に木霊する。

「流石だなドライケルス。獅子心皇帝の名は伊達ではないか！」

「貴様を屠るために生きてきたのだ…！我が妻と、我が子も！」

「因果なものだ…貴様ら一族は！」

「更に言わせてもらおうならば！」

一層力を込めた斬撃。それはイシユメルガの刃をかち上げる。やはり武器の重さというものは大きな優位性を得ていることに変わりなく、そのがら空きの胴に横一閃の閃光が走る。

「チイツ…！」

「その肉体…元来我が息子のもの。貴様に使わせるなど、父として許せるものでもない事はわかるだろう？」

そう、イシユメルガのその肉体。讓治郎の言うとおり、その外見は多少の差異はあれど、顔立ちも体格も、前世で『リイン・シユバルツァー』であったものだ。

おそらくは、イシユメルガに寄生されたことで、少なからず肉体が変異したのだろうことは想像に難くない。その証拠に、先程裂傷を与えたはずの胴は、まるでこの世界の鬼の様に再生してしまったのだから。

「この肉体の持ち主はすでに新たな肉体を得ていよう？誰も使わぬものを依代として何が悪いのだ？」

「それを赦すことなどできぬのが人間なのだ！ましてやそれが我が子となれば尚の事！故に！」

讓治郎のその身から溢れ出したるは、さらなる黒い気。空気が震え、そして風が嘶く程の。

「前世での貴様は敗れ去ったのだ！人を…人間を無礼^なるな！イシユメルガ！」

まさに鬼。

悪鬼を滅することを掲げる鬼殺隊の讓治郎。その形相はまさしく鬼の如し。

親の、親たる所以か。

自身の子の肉体を開放せんと、その心を悪鬼羅刹へと染めゆく。

親は、子のためなら外道へと、そして鬼へと変われる。

「黒の呼吸 終ノ型 黒啼…！」

渾身の一撃。それを放たんと最大限の呼吸を。

その力たるや、その手に持つ日輪刀が『赫灼』に染まりかける程に。
ここで終わらせられるならば、
妻や子の手を煩わせずに済むならばと、
その意志は確固として揺るがぬもの。

「獅子王斬!!!」

現世における出来うる限りの、
そして前世で自身の最大奥義。

その手に持つ日輪刀を纏うは黒。讓治郎の手を伝い、そして更に濃く。

その豪腕から振るわれた縦一線の斬撃。地を抉り、
その斬撃の圧で瓦礫が吹き飛び、

恨みつらみを乗せてイシユメルガへと迫る。

これで決める。

いや、決まる!!

「月の呼吸」

だがここで第三者の、底冷えするかのような、まるで深い夜の底から響くかの如き声が讓治郎の耳に響いた。

現れるは一つの影。

獅子王斬とイシユメルガの間を取るように飛び込むや否や、その腰に携えた刀を抜き放つ。

「壱ノ型 闇月 宵の宮」

瞬間、

まるで爆薬でも爆ぜたかのような爆音と、そして周囲を薙ぎ払う衝撃波が廃寺を襲った。

それは讓治郎として例外ではなく、その身を屈め、吹き飛ばされまいと踏ん張る。

「……何をしに来た?」

「何を……とは……、あの方の……御命令故……、貴殿を……連れ戻せ……と……」

現れたるは長髪の男だ。その上を後頭部で結い、その装いは一昔前の侍。紫の着物に袴。そしてその手に持つのは、刀身の所々に禍々し

い目を持つ異形とも取れる刀。

そして…

「奴が……お前の…言う……かの男…か……。」

「よもや……ここにきて…上弦の壺とはな。」

その異形な顔面。額と首筋に浮き出た痣、そして何よりも目を引くのは眼球に『上弦 壺』と刻まれた三対の目。

上弦の壺。

それは鬼の配下の中でも高い実力を持つ十二鬼月。その最高位を意味するものだ。

つまり今眼の前にいるのは、鬼の中でも首領である鬼舞辻無惨に次ぐ者と言うことになる。

「貴様……柱では……ない…？だが……その力…悪くない……。」

(やれるか……？イシユメルガと上弦の壺……双方相手取って……！)

再び日輪刀を構える讓治郎。その手に持つ日輪刀の色を見て、黒死牟は目を見開く。

「赫刀……この時代に……そこまでの男と……出逢えようとは……！まこと……わからぬものよ……！」

「赫刀……？」

「黒死牟……我はこやつとケリをつけねばならぬ。そこをどけ。」

未だ戦わんとするのはイシユメルガだ。

だがしかし、黒死牟と呼ばれた上弦の壺はその身を微動だにしない。

「先程も……言ったが……、貴殿を…連れ戻せと…命を受けた……。ここは…退け……。夜明けも…近い……。」

「ちっ……！」

「貴殿……また、相見えたなら……手合わせ…願いたい…ものだ……。」

不貞腐れたようなイシユメルガと、不吉なお願いをしてきた黒死牟は、足元に現れた襖に吸い込まれるようにしてその場を去ってしまった。

残されたのは讓治郎ただ一人。

「仕留めそこねた…いや、命拾いしたか。」

正直、イシユメルガもそうだが、黒死牟の圧に押されかけていた。上弦の壺と言う肩書きに相違ない程のそれは、歴戦を潜り抜けてきたはずの讓治郎ですら威圧されてしまうほどに。

「上弦の壺……と言うことは、やはりイシユメルガは鬼と結託していたという事か……。やれやれ、厄介な。」

大凡予想はしていたことだが、いざ現実となれば気が滅入りそうになる。

そして恐らくは、これだけの大規模な戦闘行動があつたとなれば、麓の村にいる杏寿郎や隠にもバレるだろう。

どう説明したものかと頭を悩ませながら、讓治郎は山を降りることにした。

（凜よ……我らの敵は、思った以上に大きなものようだ。）

山を駆け上がる杏寿郎と隠に出食わし、質問攻めされるまで、そう時間は掛からなかった。

第25話 『柱合会議』

日本某所 産屋敷邸

山間部の豊かな自然に囲まれたこの日本家屋は、鬼殺隊を束ねる当主たる産屋敷耀哉の邸宅だ。鬼殺隊の精神的支柱であり、隊士から御館様と呼ばれ慕われている。また、その立場故に鬼…ひいては鬼舞辻無惨から狙われる命だ。そんな理由から、この屋敷の場所は鬼殺隊内でも秘匿事項であり、隊士でも柱を除き、一部の人間しか知り得ない。「おはよう、皆。今日は良い天気だね。こんな日に皆の元気な顔が見れて、私は嬉しく思うよ。」

その縁側

そこに立つ産屋敷に白石が敷き詰められた庭園で、彼に向かい跪く隊士が数名。

「御館様におかれましても御壮健で何よりです。益々の御多幸を切にお祈り申し上げます。」

隊士側の口火を切ったのは、炎柱である煉獄慎寿郎。先日、讓治郎とともに任務に赴いた煉獄杏寿郎の実父だ。一時期荒れた時期もあったが、紆余曲折の末にこうして再び柱として任務を全うするようになった。

「ありがとう、慎寿郎。……さて、本来なら、みんなの声も聞きたいところだけど、早速本題に入るよ。」

終始穏やかで、そして心に安息を与える声の耀哉だが、そこからは一変。明らかに真剣と取れる声色へと変わる。

「先日任務に出ていたとある隊士が、上弦の鬼と遭遇したという報告が上がったんだ。」

上弦

その言葉に跪いていた柱達の空気が変わった。

鬼舞辻無惨の配下である鬼。その中でもとりわけ強い力を持つのが十二鬼月。そこからさらに篩い分けされ、上弦六名、下弦六名となり、上弦は最上位の鬼の集まりとされる。その遭遇例はほぼ無いに等しく、情報も少ない。

その上弦と遭遇したと、そうだったのだ。

「ここからは遭遇した隊士に報告を上げてもらおうよ。いいかな？」

「御意に。」

柱の面々が振り返れば、そこに傳くのは讓治郎だった。

実力者の柱達に気取られることなく背後をとられたことに対し、

片や驚き、

片や讓治郎だから仕方ない、

と感じていたりする。

「讓治郎…気配を消して背後を取るのには心臓に悪いから止めろとあれほど…」

「フフフ………慎寿郎、慣れというものは必要なのだよ。」

後者たる慎寿郎は慣れ始めてはいるものの、彼の悪戯心とも言わんばかりの行動に呆れが差していた。

「冗談はさておき………私が上弦に遭遇した隊士となる。…もつとも、交えたのは一合だけだがな。その一合でさえ、軽くあしらわれてしまった。」

「讓治郎の一撃を軽くあしらう。認めたくないけど、流石は上弦、と行ったところだね。」

「はい、鬼の力に加えて、全集中の呼吸を使うともなれば、遺憾ながら…」

「全集中だ?!？」

讓治郎の報告に声を荒げたのは、慎寿郎だった。

全集中の呼吸

それは鬼殺隊が鬼を滅すために身体能力を向上させて渡り合う手段である。

そして鬼殺隊の多くは鬼を憎む者たちの集まりだ。讓治郎の報告は、そんな彼らの中から鬼に堕ちた人間がいるという事実だ。

「ボソボソとした声だったが、確かに聞こえた。『月の呼吸』と。」

「月の呼吸…?？」

「ああ。私の最大奥義を一撃のもとに掻き消した。」

その一言に、再び柱はざわめき出す。

讓治郎の実力たるや、柱に匹敵するほどに高いことは周知の事実で、それは彼を知るものなら誰もが理解しているところだ。

その彼の奥義を一撃でともなれば、相手の呼吸使いの実力は計り知れぬものだということ。

「生きた心地がしなかった。認めたくはないが、流星は上弦の壱と言うところだろうな。」

もはや何に驚くべきなのか、むしろ、驚くべきところの連続で、誰しもが啞然とするしかなかった。

「そうか…上弦の壱とは。我々が思う以上に末恐ろしいもののようなね。」

耀哉の憂う声に、柱の誰しもが上弦とは計り知れぬものだと改めて認識させられる。

重苦しい空気に包まれる面々に、耀哉はいつもの穏やかな声で切り出した。

「それでも、我々は戦わねば。皆が思う以上に上弦は強い。それは変わらないだろう。」

「ただそれ以上に、私のこども達隊士は強い。今はまだ及ばなくとも、強くなって、必ず上弦を、そしてその向こうにいる男鬼舞辻無惨を打ち取れると

確信している。私は信じている。だから皆も信じてほしいんだ。私が信じる皆自身を。」

「御館様…！」
「御館様!!」

「ウフヤカタサムアアア!!」

改めて感じる耀哉からの信に、柱たちの胸が熱くなる。

自分達が耀哉を信じるように、彼もまた深く信じてくれていること。それが何よりの身に沁みだ。

感動の嵐!

「…その、感極まっているところ悪いのだが。」

柱達の感動に水をさす用におずおずと、讓治郎はもう一軒の報告をするために切り出した。

端々から『空気を読め』と言わんばかりの鋭い視線を向けられるが、

「ここは我慢だ。」

「上弦の壱と相見える前に、もう一人、異質な鬼と出会った。」

讓治郎は言う。

イシユメルガとの邂逅。

その特徴。

流石に前世からの因縁や、凜達との関係性は省いたが、それでも予期せぬ新たな脅威に、面々は驚かずに入られないでいた。

「その…いしゆめるが？というのが、鬼のようでその実どこか異なる存在であつたと？」

「なんとなく、としか言えぬが。」

「なんだ？お前らしからぬな。」

言葉を濁す讓治郎に、慎寿郎は眉をひそめる。しかし、嘘を言うような男ではない事は、自身はよく知っている為、それ以上は追求しなかつた。

「いしゆめるが…鬼舞辻無惨とは違う、嫌な気配だね。しかも上弦の壱がその護衛のように現れたともなれば、鬼達の中でも相当の地位にいるということになる…。」

耀哉も思うところはあれど、讓治郎の報告には疑いはしなかつた。それほどまでに彼を信用しているという事に他ならない。

「引き続き、皆には鬼の討伐。そして鬼舞辻無惨、上弦、新たにいしゆめるがの調査、討伐をお願いするよ。」

「「御意。」」」

こうして

上弦の壱、そして新たにイシユメルガなる存在が鬼殺隊の中で情報が走ることとなった。

『カナエの顔が見れなかつたのは残念だが…彼女もまた任務に赴いて

いるんだね。人々の安らかな眠りのために……。』
「やあやあ初めまして。俺の名前は童磨。いい夜だねえ。」
そんな彼女に迫る驚異に、今はまだ、誰も気付かない。

第26話『上弦の弐』

「いっ……いっ……」

口いっぱい広がる鉄の味。

その口元から決して少なくない量の赤い血が滴り落ちる。

「花の呼吸……いいね、初めて見るけど、実に面白い呼吸だ！」

膝をつき血を吐く鬼殺隊……花柱たる胡蝶カナエに相對し、しかし余裕と言わんばかりにニコニコと称賛の拍手を送るのは、頭から血をかぶったかのような髪。そしてその虹色の虹彩に浮かぶは、上弦の弐。

「次はどうするのか？どんな剣技を見せてくれるんだい？」

（ぐ……呼吸が……全集中が……）

まるで喘息か何かにかかったかのように、上手く呼吸が出来ないでいることに、カナエの背に嫌な汗が吹き出てくる。特に胸に攻撃を食らったわけでもない。むしろ直撃は受けていない。にもかかわらず、呼吸が苦しくなってきた。鍛えた肺により、辛うじて生きる上での最低限の呼吸は出来る。しかし、鬼殺隊として生命線である全集中が出来ないことが途轍もなく大きい。

未だ立ち上がれずにいるカナエ。

「あれ……もしかして、もう終わりなのかな？もう少し楽しめると思ってた期待してたのに。」

「まだ……よ……」

相手は上弦の弐。

単身で勝てる見込みはほぼ無いに等しいことはわかっていた。

だがそれでもカナエは諦めない。

大切な家族が、帰りを待っているのだ。

「へえ？」

「帰るべき場所が……妹達が……私を待ってるの！ここで……死ねない！」

「わあ！妹がいるんだね！」

そうだ！君を食べても寂しくならないように、妹達も後で食べてあげよう！そうすればずっと一緒に居られるからね！そうだ、そうしよ

う！名案だと思わないかい？」

今何と言った？

妹達を食べる？

しのぶを？

カナヲを？

アオイを？

食べると言ったか？

自分のみならず、家族にも手を伸ばすと？

「させるものですか……私の家族に！指一本でも触れさせない！」

肺がどうなろうと知ったことか！

刺し違えてでも、コイツはここで頸を斬る！

しのぶに死ぬほど怒られるだろうが、死んでもコイツだけは！

心臓の鼓動が早くなる。

身体が燃えるように熱くなる。

怒りが、家族への思いが、カナエを限界以上に奮い立たせる。

「いい！実にいいよ！さあ！もつともつと俺に君の全力を見せてくれ

！それを俺は全身全霊で受け止めてあげるよ！」

「花の呼吸 伍の型 徒の芍薬」

距離を詰める。

だが今までの踏み込みみの速度。それを塗り替えるほどのものだった。火事場の力なのか否か、それを冷静に分析する余裕など、カナエに有りはしなかった。

一意専心

ただ目の前の鬼の頸を断つ。

その思いとともに、神速の九連撃が童磨に降り注ぐ。

「血鬼術 枯園垂り」

童磨の持つ鉄扇。その軌道から生まれる氷の斬撃でカナエの連撃を捌いていく。

しかし……

「へえ……？」

今までカナエから受けてきた斬撃を元に、彼女の速度に合わせての

捌きだった。

だが、斬撃の何発かは童磨の枯園垂りの防御が間に合わず、彼の肩や脇腹を切り裂く。

「底力ってやつなのかな？ さっきよりも速いね！」

「花の呼吸 肆ノ型 紅花衣」

徒の芍薬の振り抜けをそのままに、身体のねじれを次の型に繋げていく。その身体の回転を斬撃に乗せ、まるで流れるような斬撃が放たれる。

その一撃は、鉄扇を持つ童磨の右腕を肘から泣き別れにした。

「おおっ！」

負傷にも関わらず、苦悶の声も、表情もない。ただただ歓喜の声を上げ、顔からは笑みを絶やさない。

「花の呼吸 参の型 乱れ雪月花」

右の防御がなくなったことで好機と踏む。

高速の切り下ろし、そして切り上げ。まるで剣豪が用いた燕返しのように連撃が、童磨の肩から切り込み、そして腹部から頭頂部へと切り抜ける。

「あれ？ ややもすれば負けちゃうの？」

「はあっ!!」

切り抜けた刃を返し、三撃目の切り抜けを放つ。

狙うは頸だ。

この渾身の一撃で仕留める。

その軌道は寸分変わらず、童磨の頸へと引き寄せられていく。

切り落とす！

ただその一心でカナエは、その刃を振り抜いた。

「残念だけど、

特別な時間はこれでおしまいだ。」

パキン

そんな乾いた音が響いた。

「流石に今のは、ちよつとだけ俺もやられるかと思ったよ！いやあ、ほんとに残念！惜しかったね！」

振り上げられた左手。

その手に持つ鉄扇。

それが首を狙っていたカナエの日輪刀。その刀身を叩き折つただ。だ。

終わった。

終わってしまった。

「でもよくやったね！えらいよ！その君の頑張りに敬意を評して、必ず君の妹達を食べてあげると約束するよ！」

もはや戦う力は残されていない。

ボロボロの肺を酷使し、無我夢中となることで堪えていた痛みが、まるで鉄砲水の如くカナエの体に襲いかかった。

手足を限界以上に振るつたことで、全身の筋肉と骨が悲鳴を上げている。

加えて折れた日輪刀。

（ごめんなさい…しのぶ。カナヲを、よろしくね。）

「じゃ、いただきま〜…。」

座り込むカナエに伸びる童磨の手。

しかし、

「閃の呼吸 参ノ型 業炎撃」

「なんと!？」

延ばした左手…否、左腕全てが一刀のもとに斬り飛ばされた。

新手に童磨は背後へと飛び、カナエから距離を取る。

「無事ですか？カナエさん！」

「凜…ちゃん…?…」

妹とは行かずとも、妹に等しい少女が、自身を助け来てくれたこと。それがカナエにとって信じ難い事だった。

「どうして…?」

「任務の帰りです。異様な気配に釣られてみればここに。」

口からおびただしい量の血を吐くカナエ。

彼女の実力は確かなものだ。

その彼女を追い詰める鬼とは。

「柱をここまで…。上弦は、伊達じゃないか。」

「へえ！また新しい女の子だ！今日は吉日だね！」

童磨に至っては、新手が現れたことに驚異を感じるどころか、餌が増えたかのように歓喜している。その異常性に凜の頬に冷や汗が走る。

「逃げ…て、凜ちゃん…! 相手は…上弦…!」

「上弦だからと死ぬのが嫌で逃げたら、次は委員長に殺されます。そんなのゴメンですから。」

「ん〜? 鬼ごっこでもいいんだけどね? まあいいや。次は君が俺と戦ってくれるのかい?」

「もちろん。さあ、始めようか?」

「へえ?」

不敵な笑みを浮かべる凜に興味が湧いたのか。

目を細めながら両腕を再生させ、鉄扇を手元に戻す。

「楽しませてもらえそうだ…!」

カナエとはまた違う強さと気配に、童磨は冷気をまとう。

初めて見せた童磨の構え。

即ち、凜を獲物として認識したということ。

「全集中…!」

対し凜も、一息に全身の細胞を活性化させ、刀を下段に構える。

自身の、前世から変わらぬ八葉一刀流の構え。観の眼で神経を研ぎ

澄ませ、童磨の一挙手一投足を見逃さない。

「閃の呼吸 暁葉凜! 参る!」

今までの鬼とは違う、鬼の最上位に至る存在との戦い。

前世の達人の域に至る面々と同等に近しいと思われる上弦の式で
ある童磨。

そんな奴との火蓋は、互いの踏み込みで切って落とされた。

第27話 『鬼を討つためにすべきこと』

「血鬼術 枯園垂り」

鉄扇に氷の血鬼術を乗せた斬撃で凧を迎え撃つ童磨。その速さは先程のカナエに放った速度とそう変わらない物で、柱を迎え撃つための調整。童磨は敢えて相手に力量を合わせ、その力を引き出した上で捻じ伏せる戦いを好んでいた。その速度は一般隊士なら捌ききれるものではない。しかし童磨は、凧がそれに応じることができると確信していた。

現に、凧はその一撃一撃を見切っているのか、的確に刀で捌いてい
なしていく。

「君、柱なのかい？」

「いや、私はただのしがない一般隊士だよ。」

「うくん、どう見ても力量がさっきの子と同じかそれ以上に見えるけど？」

「それは光栄だと言っておこうかな！」

意趣返しと言わんばかりに足を狙って、下段に童磨の斬撃が走る。

しかし、凧にとって読めない手ではない。ひらりと飛び退き、童磨と一旦距離を取ると、大きく一息つく。

「ふう…。」

「あれ？もしかして、もう息が上がった？そこは柱には及ばないんだね？」

「いや…単に君の側で息を吸いたくないだけだよ。」

「ひどいなあ。そんな言い方はないんじゃない？」

「搦手がなかったらね。」

凧の一言に、童磨の笑みが少し崩れた。

「…なんのことかな？」

「今私がいるところと、君の間合い。僅かに温度差がある。自身の周囲のみに何かしらの罫を張っているんじゃないかって感じたんだよ。違う？」

「…驚いた。初見で俺の粉凍りを看破するんだ？黒死牟殿や猗窩座殿

も一度は掛かったのに……。猗窩座殿は俺よりも位が下だから仕方あるまいか。」

しれっと自身の同胞を小馬鹿にする余裕があるあたり、この程度を見切ったところでは、まだまだ余裕であるということの現れだろう。攻撃速度は未だ凜に合わせてギリギリの戦いを演じているフシがある。

おそらく、粉凍りという罠にカナエはかかってしまい、肺をやられた可能性が高い。

「じゃ：離れてても攻撃ができるならどう対処するのかな？」

今まで閉じていた鉄扇を開き、双方横薙ぎに振るう。その軌跡の先には数多の氷が集まり、そして形を成していく。そしてそう時を立たずして、見るも美しい蓮の花となった。

「血鬼術 蓮葉氷」

形を成した瞬間、蓮葉氷の周辺から真っ白な冷気を放出し始めた。それなりに距離を取っていたにもかかわらず、寒気を感じるほどに強烈なものだ。見るからに恐ろしく低い温度であることは明白である。

一旦距離を取ろうと跳躍する凜を逃すまいと、童磨は次なる手を打つ。

「血鬼術 蔓蓮華」

その場に置いておくだけで行動範囲を狭める血鬼術かと思いきや、その氷の蓮から同じく氷の蔓が、まるで生きているように凜へと殺到する。

「大きく跳んだけども、次はどうするかな？空中じゃ避けられないぜ？」

「全集中 閃の呼吸 陸ノ型 緋空斬」

童磨の意に反し、真空の刃を放つ斬撃により、氷の蔓は見事に切り落とされていく。

しかしその数を一撃ですべてを落とすことはできない。残る蔓が迫るが、自身に近い蔓を狙ったことで着地までの時間を稼ぐことはできた。

そして童磨は今、距離が離れたことで今まで以上に油断しているの

が目に見えてわかる。

この蓮葉氷と蔓蓮華をどうするのか、それを見物と洒落込もうとしているようだ。

「さあ！頑張って逃げておくれよ！これは俺の親友である猗窩座殿が気に入ってる攻撃なんだ！楽しんでくれ！」

一々癩に障る鬼だ。

だがその言動を裏打ちするかののように、実力は確かなものだというのはわかる。

手加減する余裕がまだまだあるという底知れなさ、肺を潰す罠があることが恐ろしくもある。

だが、余裕があること即ち、油断し、そこに付け入ることで打開策は見出させる。

ならば、

「閃の呼吸 式ノ型 疾風」

最速の踏み込みと剣閃で、この蔓と蓮、その布陣を切り抜け、奴の頸を切り落とす。如何な鬼と言えども、この速度は驚異的だった。縮地と呼ばれる歩法にて、踏み込みと斬撃を繰り返す疾風。それは集団戦に秀でた型だ。瞬く間に蔓と蔓が切り落とされ、その速度に童磨が驚いた時には、凜は眼前へと迫ってきていた。

「斬！」

「おおっとお？」

しかし頸を狙った凜の斬撃は、飛び退いた童磨の腹を、深く横に斬り裂いただけに留まってしまった。

「くっ！浅いか！」

「今の技、凄く速いね！流石の俺も避けてなかったら頸を落とされていたよ！」

反応速度によるものなのか、はたまた勘が良いのか。仕留め切れたかったことに凜はもどかしさを覚える。

童磨はというと、目を丸くして驚いてはいたものの、すぐに胡散臭い笑顔を浮かべ、腹の傷を塞いでいた。

「でもその型、見えなくなるくらい速いけど、対策は出来るよ！」

「っ…!!」

「血鬼術 冬ざれ氷柱」

まるで合図のように鉄扇を振り上げる童磨。まだなにか仕込んでいるのかと危惧する中、それは頭上にあつた。

数多の血鬼術で作られた巨大で鋭利な氷柱。それが凧の頭上から串刺しせんと、降り注いできた。

避けようと足に力を入れた瞬間、全身に鋭い痛みが走る。

「血鬼術 散り蓮華」

童磨が振るつた鉄扇。先の枯園垂りとは違い、その軌道から氷の斬撃ではなく、無数の氷の飛礫が、頭上の氷柱に気を取られた凧へと襲いかかったのだ。振り上げた鉄扇は合図ではなく、この飛礫を生み出すための動作だった。

予期せぬ一撃に、ほんの少し動きが遅れた凧に、氷柱が追い打ちとばかりに降り注いでくる。

吹き上げられる土煙。瞬間に凧は土の煙幕と氷柱の中に姿を消してしまった。

「凧ちゃん…!!」

肺をやられたことで、カナエは大きな声が出せない。

だがこの状況で、黙っては居られなかった。

どうすればいい？

いくら凧が強いとはいえ、単身で上弦の、ましてや弑と渡り合うことはできない。

しかし加勢しようにも、肺をやられ、全集中を使えない自身が向かっていつても足手まといなだけだ。

「いやあ！君が俺の考えてた以上に楽しませてくれるから、ちよつとだけ本気出しちゃったよ！あ！もしかして、死んじゃったかな？ごめんね！」

全く悪びれる様子のない童磨。

あの様子では、凧がやられてしまった可能性は零ではない。ここで動けないなど、柱として不甲斐ない自分に、カナエは情けなさがこみ上げてくる。

「死んじやったなら食べてあげないとね。命というのは尊いものだ。大切にしなければ。」

「だったら…勝手に人を殺さないで貰えるかな…?」

瞬間、地面に突き刺さっていた氷柱が、暴風に吹き飛ばされたかのように粉々に吹き飛んだ。

何が起こったのか、と言われればわからない。誰がやったのかは明白だった。

凜である。

「へえ！生きてたんだ！俺のちよつと本気で生きてたの、久しぶりに見たよ！感心感心！」

「全然、嬉しくもなんともないね…。」

だが凜は全く問題ないというわけではなかった。

全身に氷の飛礫による傷を負っている状態。それに加えギリギリまで回避を試みた氷柱が掠めたのか、脇腹に受けた大きめの裂傷が痛々しい。

「もう勝負はついたでしょ？諦めて食べられなよ。」

「それでも…！」

諦めない。

そう言いかけるが、現状でこの状況を切り抜けるのは難しいとしか言えなかった。

体中の傷…特に脇腹のその痛みは先程から鈍い痛みが全身に響いている。流石にこの状態で十全に動けるかと問われれば否だ。

ならばどうする？自身はともかく、せめてカナエだけでも守れないか？

そんな考えがよぎったとき、今世で幼き日。父に言われたことを思い出した。

『己を捨てて他を生かすのではなく、己も他も生かすのを最後まで諦めるな。』

…そうだ、足掻いてきた。

前世で幾度となく。

諦めず、

見失わず、

時には受け入れ、

自分の道を進むために。

その結果として、自分は死んでしまったことに悔いはない。

だがそれを仲間が良しとするか？おそらく、前世の仲間達は嘆き、悲しみ、泣いたであろう。

あの時に足りなかったもの。それはわからない。だがあれがあこの時の最善手だったと、後悔はない。

だが今世でも同じように自身を犠牲にして、他を生かすことではなく。

譲治郎の言うように、他者も自身も生かす道を探すこと。それを諦めてはならない。

そして前世のことを思い出す内に、未だ自身の中に『切り札』であり、『禁じ手』が残されていたことをふと思い出した。

確かにこれを使えば打開できるかもしれない。

だがこれを使うことを鬼殺隊の誰かに見られること。それがどう転ぶのか、凧には予想がつかない。

だがここで使わずして、どこで使うのか？

自身もカナエも生き残るのなら、藻掻き足掻いて、その後のことはその時に考えていくしかないのだ。

「カナエさん…。」

「な、何かしら？」

「今から…私がやること、それは見る人にとっては許容できないことかもしれない。だけどこれだけは言わせてください。」

私を、信じて。」

凧の言葉の意味を理解できないカナエの返事を聞かぬ間に、彼女は日輪刀を正眼に構え、目を閉じる。

「まだ何かあるのかい？いいねーもつと見せておくれよー！」

挑発は聞こえない。

ただただ自身の奥底に耳を澄ませる。

胸の中に燻る、黒く燃える焰。それを大きく燃やす。

全身に広がる感覚。

自分以外の異物の感触。

だがそれを否定はしない。

あるがままを受け入れ、自身と一体とし、漆ノ型である無の極地。これを使うこと、即ち鬼殺隊としての立場が揺らぐかもしれない。でも、

それでも、

生きることを諦めないためにも！

「神氣!!合一!!」

鬼を解き放つと決めた。

第28話 『夜の終わり』

爆ぜた空気。

発せられる鬼気。

見るものを圧する覇気。

それらがカナエと、そして対する童磨に重くのしかかる。

「ふうう………。」

大きく息を吐く。

大丈夫、今の所は『呑まれそうになる』感じはない。比較的安定している。

「へえ……君、鬼だったのかい？」

さして驚いた、というものではないようだが、しかし関心はあるといった様子の童磨。

その目先には黒の髪が白く染まり、瞳が赤く染まった凜。童磨の言うように、

その風貌は人というよりも鬼に近いものがある。

「鬼……。たしかにそうなのかも知れない。」

「じゃあ、なんで俺と敵対するのさ？人間を助けてどうするんだい？」

「決まってる……カナエさんは、私の仲間だからだ。」

そうハツキリと。

鬼と共感されようと、このあと鬼殺隊に罵られようとも、それだけは人として譲れない。

「まあいいや！ちよつと特殊みたいだし、さつきよりも手応えありそうだ！」

小手調べ、と言わんばかりに再び生成される蓮葉氷。その数は目測で先程の倍は見える。そこから更に蔓蓮華を伸ばし、凜を引き裂かんと殺到する。

明らかに先程の速度や剣戟では捌けない物量のそれを前にして、凜は動かず、ただ冷静だった。

「式ノ型 秘技 裏疾風」

前動作なく、凜の姿は掻き消える。

同時に、一陣の風が吹き荒れ、数ある蓮葉氷が一刀のもとに両断されていった。

「おっと！その型はさつき見たから、二度は…。」

俊足の歩法で切り払ってくる。

先の攻防で疾風の特徴を見た童磨は、凜の踏み込みに合わせて後方へと飛び避ける。

確かに『疾風ならば』ここで終わるだろう。

「斬ッ!!」

「へっ!？」

しかしこれは『裏疾風』だ。

かつて兄弟子である『アリオス・マクレイン』が収めた型。そしてその得意としていた秘技。

式ノ型 疾風から陸ノ型 緋空斬へ繋げ、追い打ちをかける一撃だ。

放たれた斬波が、避けきつたと油断していた童磨の腹に深々と切り込む。頸に当たらなかつたのは仕方ないが、そもそも日輪刀で直に切らない緋空斬は、牽制にしかない。

「おお！速いね！さつきとはダンチ…」

「壺ノ型 改 滅・螺旋撃」

童磨が称賛する間も与えず、踏み込みとともに身体の捻りを剣戟に乗せた一撃が振り下ろされる。

寸でのところで童磨は避けるものの、その一撃の重さと速さは、避けたにもかかわらず、肌を風の刃が斬りつけるほどのものだ。

「一気に畳み掛けるかい？それもまたいいね！」

明らかに先程の凜とは段違いの速度と力は鬼と言うに差し支えない物で、笑顔を崩さない童磨も内心では驚いている。

驚いてはいるが、対応しきれない程ではなかった。

回避から転じて枯園垂りで氷の応酬に入る。もちろん、先程よりも速度を上げて。しかし凜も負けじと、日輪刀でその鉄扇と氷の刃を捌いていく。

確かに拮抗しているように見える二人の応酬。しかし、悟られまい

とするも、凜の攻撃には焦りが見えている。

(早く……早く仕留めないと……！)

正直、凜がこの世界に来てから、神気合一を使ったのは、幼少期を含めた二度だけ。今の状態でどれほど持続できるかも、そして限界を超えて使った時の反動は全く予想がつかない。下手をすれば暴走する可能性も無きにしもあらず。

「動きは確かにさつきより速い。けど、段々雑になってきているね？勝負を急いでいるように見えるけど、何か……」

「はあああつ!!」

未だ余裕を保つ童磨の言葉を遮るかのように、文字通り鬼気迫る勢いで畳み掛けていく。そんな凜の太刀筋すら、童磨にはまだ直撃が届かないでいることが、何よりも歯痒い。

「お？雑でも早いのは厄介だね。力押しというのも中々悪くない。」

童磨の防御をすり抜けた攻撃が、彼の頬や脇腹を掠めていく。だがそれだけだ。

致命傷である頸には届かず、ただただ鬼特有の再生力が傷を癒やし、そこをまた凜が切り掠める。

いや、敢えて掠める攻撃を見逃し、遊んでいるかのようにも見えた。

そして時折、まるで見せつけるかのように鉄扇を凜に掠めさせることで、力量差を見せつけてくる。

(今……持ちうる総てを込めた斬撃で、一気に攻める！)

いつまで神気合一が続くかわからない。

奴が反応しきれない程に速く、そして多方面からの斬撃で、仕留めるしかない。

(神気合一を使うと決めるときから、賭けは始まっていた……。今の私の……いや、俺の全てを以て、この場を切り抜ける……！)

日輪刀を鞘に収める。

そんな凜を見て、童磨は怪訝な表情を浮かべた。

「あれ？もうおしまいなのかい？拍子抜け……」

「蒼き焰よ……我が剣に集え……！」

凜という人としての限界。

その力の総てを込めて。

渾身の一撃を放つために、掌に神経を集中していく。

ゆっくりと、そして力強く抜き放たれたその日輪刀の刀身が赫く、そしてそれを超えて『蒼い焰』が纏いゆく。

「う、嘘だろう？ 炎の血鬼術かい!？」

氷を得とする童磨にとって、炎は相性が悪い。

人が刀に炎を宿すなどと想定もしないし、かと言って松明などを用いようとも、その炎など自身の血鬼術を用いれば容易く封じることができた。

だが目の前にいる少女が持つのは、鬼殺隊が用いる日輪刀。そしてそこから発せられるのは、赤を超えて蒼く燃え盛る炎だ。

童磨の本能が告げる。

『あれは危険だ』と。

「はあああつ!!！」

童磨が対策を考える間もなく、凜は踏み込む。先程まで自身が優位と感じていたにもかかわらず、一瞬にして形勢逆転と言わんばかりに不利に立たされた。

迫る凜の、燃えるような紅い双眼が童磨を貫く。

白く染まった髪が、それを追うようにふわりと舞い上がる。

鬼

それに相違ないが、どこか浮世離れたその美しさに、一瞬童磨は先の恐怖を忘れた。

「吉!!！」

その一言で、彼は意識を現実に戻させられる。

次いで感じたのは、右肩に走る得もしれぬ激痛。見れば右肩から先が泣き別れしているではないか。

斬られた痛みなら幾度とあれど、永らく生きてきた中で感じたことがないその痛み。

(いや…俺は…この痛みを、知っている…?)

童磨の視界に、昔の記憶のような映像が流れる。

月が照らす真夜中の竹藪で。

相対する赤く長い髪と、そして額に走る痣の男。

彼の放つ捉えきれぬ斬撃に成すすべもなく斬られ、その傷跡から焼け付くかのような痛みが駆け巡った。

まるで自身が実際に斬られたかのような記憶が終わるとともに、現実へと意識が引き戻される。

(なんだ……何なんだ……!?この人間……!)

今まで味わったことのない感情。

右肩は熱く痛むのに、背筋は凍えるほど寒い。

「弐!!」

それを恐怖と理解する間もなく、凜は振り下ろした刃を返し、逆袈裟に切り上げる。

次は上半身と下半身が泣き別れとなる。

宙を舞う自身の視界に混乱が隠せない童磨。

今確かにわかるのは、迫りくる死が見えていること。

何せ童磨の目には、自身の頸目掛けて振り上げた刃を振り下ろそうとする凜の姿が、ありありと映し出されているのだから。

「これで為す!!蒼焰ノ太刀!!」

童磨の頸を焼き斬り落とす一撃が振り下ろされる。

見ていたカナエですら、これで首を落とすと確信できた。

しかし……

べべん!!

何処からともなく響いた琵琶の音。

それに呼応するかのように童磨の足元に現れた襖が開き、彼を飲み込む。

一瞬

本当に一瞬だった。

凜が太刀を振り下ろしたときには襖は跡形もなく消えていたのだから。

「……逃した……のか。」

太刀の焰が消え、残されるは二人の鬼殺隊剣士。

観の眼を以て気配を探るものの、周囲に奴の気配はない。その事実
に安堵したのか、凧はガクリと膝を付く。どうやら緊張の糸が切れた
ようで、集中して維持していた神気合一も解かれ、元の黒髪へと戻る。

「凧ちゃん！」

蹠跟めきながらも、項垂れる凧に駆け寄り支えるカナエ。遠目から
見ている、凧の受けた傷は浅くはなく、明らかに重症だ。

「すいません…カナエさん。取り逃がしました。」

「何言ってるの！退けただけでも十分よ。それよりも貴女の怪我の方
が！」

「カナエさんも…結構重症でしょう？クロウを飛ばしてて正解でし
た。」

観の眼を以て、予め童磨の力のある程度把握していた凧は、乱入前
に鎧鴉であるクロウを飛ばし、万一を想定して少しでも早く隠が駆け
付けられるように前準備をしていた。

それが功を奏し、隠達が闇夜から次々現れ、カナエの介抱にあたり、
そして凧は後ろ手で縛り『拘束』していく。

「凧ちゃん！貴女達！なにを…!？」

「御館様の指示です。暁葉 凧を連行せよ、と。ご了承ください、花柱
様。」

「でも…！」

「構いません。」

食い下がるカナエを制すように、凧は声を持って彼女を止める。さ
しもの当事者たる凧に止められては、カナエはそれ以上のことは言え
ずに踏み止まらざるを得ない。

「こうなることはある程度は予想出来ていました。大人しく連行され
ます。」

「凧ちゃん…！」

隠に連れて行かれる凧。総てを悟っていたかのように取り乱さず、
至極冷静に。

対してカナエは困惑を隠せずにした。

凜という少女のこと。

そしてあの力のこと。

理解に及ばぬ問題が彼女の頭の中を駆け巡る中、夜は静かに明けていった。

第29話 『人である証』

「おはよう皆、今日もいい天気だね。2日続けて皆の顔を見れて、私は嬉しく思うよ。」

再び始まる柱合会議。2日連続での会議など前代未聞であった為、柱の誰も彼もが怪訝な表情を浮かべている。

更に柱に加え、二人：それも柱を除く最強戦力として名高い暁葉夫婦：讓治郎と千代も参列していることがそれにさらに拍車をかける。

極めつけは後手を縄で縛られ、白州の上に正座させられている年若き鬼殺隊の少女がいる。その風貌はボロボロで、見るからに激戦を終えてこの場にやってきたことが明らか。治療も最低限の応急処置のみであり、服に至っても所々痛々しく破れて、肌や傷が生生しく頭となっている。

そんな少女：娘である凜の姿を見て、内心今すぐ蝶屋敷に運び入れて治療を受けさせたい、もしくは肌を隠すなにかを羽織らせたい千代だが、御館様の前ということもあり、正しく断腸の思いと言わんばかりに我慢していた。

「御館様におかれましても御壮健で何よりです。益々の御多幸を切にお祈り申し上げます。」

涙を流しながら手を合わせ、ジャリジャリと数珠を鳴らす巨漢：岩柱である悲鳴嶼行冥が、恒例の柱代表の挨拶を述べる。

それに満足した御館様こと、産屋敷輝哉は変わらぬ微笑みを浮かべながら頷くと、口火を切った。

「君が暁葉 凜だね。君のことは両親：とりわけ讓治郎の方から常々聞いているよ。」

「…はっ！御館様とお会いできて、至極光榮に御座います。」

讓治郎の話には聞いていたが、こうして御館様と呼ばれる人物と実際に会ってみて、成程。それほど顔を合わせて時間が経ってはいないが、確かに物腰柔らかく、両親とは別の意味で親かと思えるかのような安堵感が感じられる人物だ。

「皆も昨日の今日で集まってもらい申し訳ないね。昨日は讓治郎が上

弦の壱と、そして不可思議な鬼邂逅したという話だったけど、今日は上弦の弐の話だ。」

途端、柱の皆の目の色が変わる。今まで下弦の鬼はともかく、上弦の鬼の遭遇など滅多なことではなかったからだ。

「報告によると、昨晚に花柱のカナエが上弦の弐と交戦。危ういところを、次いで暁葉夫妻の娘である凜、君が交戦して撃退。という内容だったんだけど、相違ないかい？」

「はい、相違ありません。」

「同じく。」

重症を負っているカナエは、簡易の椅子に腰掛けつつ、輝哉の問いに応じ、追うように凜も同意する。

「なんと……！一隊士が柱を追い詰める鬼……しかも上弦の弐と交戦し、加え撃退とは……!?!」

驚く煉獄楨寿郎。対し、讓治郎は口許を緩め、密かに笑みを浮かべる。『流石は我が娘だ。』と言わんばかりに。

「強い剣士子供が居ることは、親としても、そして私としてもとても喜ばしいことだよ。いい子を育てたね、讓治郎、千代。」

「はっー!」

「もったいなきお言葉です。」

あの二人の娘ならばあり得るか、と柱の面々が納得する中で、ならば何故そのような功績を残した隊士が拘束され、一昔前のお裁きのようにされているのかという疑問が生まれ始める。

「ただ、同時に交戦の中で由々しき報告が入ってね。その事実確認をしなければならぬ。」

カナエと、そして凜はいよいよかと気を引き締める。報告する上で避けて通れない議題だ。

だがカナエは信じる。きっと御館様なら良い裁断をしてくれる、と。

「凜。」

「はい。」

「君が上弦の弐と戦ったとき、まるで鬼と言わんばかりの姿と力を見

せた：…そう報告があつたけど、それは事実かい？」
やはりそこか。

想定はしていたためにたじろぎはしない。誠心誠意を以て答えることを意に決していた凜は、コクリと頷く。

「なんと…：讓治郎殿の娘が鬼であると!？」

「嗚呼…可哀想に…。鬼となつてしまふなど…！」
柱の面々がどよめく。

何せ自身らが絶対的な信頼を置く讓治郎と千代。その娘なのだ。約一名は、見えない眼から涙をドバドバ流しながら、祈るように手を擦り合わせている。

個人的な付き合いのある榎寿郎ですら、『どういうことだ?』と言わんばかりに横目で彼を睨む。

「皆、驚くのもわからなくはないよ。私としても、報告を受けたときには耳を疑つたんだから。でも、本当に凜が鬼だとしたなら、今こうして天の日を浴びていることが異質な鬼である事の証左。とりわけ、私達の言う鬼とは違う存在なんじゃないかと思うんだ。」

確かに真昼のお天道様が照らすこのお白州の上で、こうして平然としている鬼というのもおかしな話だ。何よりも未だ傷が癒えていないことをみるに、鬼の驚異的な自然治癒もない。

鬼という言葉に過剰反応していた柱達は平静を取り戻すに至る。

「凜、君の…鬼の力と仮定しよう。君のその力はいつから持っているのかな?」

「それは…。」

言つて信じてもらえるか…。その迷いに口をつぐむが、横目で見た両親。その目はしっかりと凜を見つめ、力強く頷いた。

「幼少の頃、今の呼吸を編みだす過程で、無念無想に至る型を使用した際、その力を発現するに至りました。」

「ほう…。」

「父もその場に居合わせており、判断を仰ぎ、未知の力ゆえにいざという時まで秘匿する様に厳命されました。」

「そうなのかい?讓治郎。」

「相違ありません。」

迷いなく、讓治郎も応じる。

「私としても驚くばかりで……。当時齡六という歳に関わらず、発現させたそれを間近で見っていた私は、その能力に力強さとともに得体のしれないものを感じました。故に、有事の時以外はその力の使用を禁じたのです。過ぎた力は身を滅ぼす。そしてあの鬼と思われても致し方無い外観に変貌するのは、鬼殺隊に身を置く以上、他の隊士を混乱させるのも……。」

「成程、そうだね。二人の言う内容は確かに理に適っている。」

納得はしてもらえたようで、胸を撫で下ろす暁葉家三人。

「もし凜の力が、私達が滅すべき鬼のものなら、彼女にあの男：鬼舞辻無惨、もしくはそれに近い血を持つ上弦の鬼が幼少期に接触し、鬼に変えたことになる。けれども陽の光は問題ない鬼を、あの男がみすみす見逃すはずもないだろうね。だとしたら、凜は限りなく白だ。」

「限りなく……というのは？」

「この俺が派手に教えてやろう。小娘。」

凜の疑問に答えるように、跪いていた派手な白髪の男が応じる。
「俺は音柱 宇髄天元。地味なお前が、鬼ではないと派手に証明する最後の課題だ。」

「よろしく頼むよ。宇髄。」

「おい宇髄。貴様、私の娘を地味だと？たしかに派手ではないが、かと言って地味でもない！そこらの町娘などより余程整っておるわ！」

親バカ極まる。愛娘を地味と言われて黙っていられないのがこの讓治郎。娘自慢をここぞとばかりに開始した。

「今はまだ幼いなれど、数年後にはすれ違う老若男女誰しもが振り返るほどの絶世の美女になろうことは確定的に明らか！艶やかな黒髪！整った目元！ハリのある唇！細すぎず、たましくない手足！透き通った声色！胸部こそ未だ慎ましいが、それを補って余りある！わかるか！わかるだろう！？わからんか！？では命じよう。自害しろ宇髄。ぶふあ！？」

「御館様、宇髄殿。私の愚夫が話の腰を折ってしまい、申し訳ありません。」

ん。」

更に畳み掛ける讓治郎に、千代は埒が明かないと言わんばかりに頭を鷲掴みにすると、力の限りに振り下ろす。哀れ讓治郎は、その頭をお白州に埋められ、ようやく静寂を取り戻す。

「いいよ。愛されているね、凜。」

「いえ…私の愚父が失礼しました。」

このような場で親バカを發揮するなど思いもせず、そして公衆の場であのようなことを言われて、凜は堪らず顔を伏せる。その顔は耳まで紅潮していた。

「私もね、三歳の子がいるんだけど、やはり我が子は可愛らしいものだね。目に入れても痛くないと思うのは正にこのことだと感じたよ。常々讓治郎が娘の自慢をしてくるのも同感だ。そうだ、宇髄も奥さんが三人いるんだから、そろそろ子供はどうなのかな？子供は可愛いものだよ。」

「いえ…俺はそういうのは地味にボチボチと……じゃねえ!!何御館様も親バカやってんですか!?讓治郎の旦那に触発されないで下さいよ!?話の腰が派手に折れまくってるじゃねえか!?!」

「ははは、そうだね。私としたことがつい……。それで、何の話だったかな?」

「オイイイツ!小娘が鬼じゃねえっていう証明でしょうがあ!」

「嗚呼……混沌極まれり…柱として不甲斐なし…。」

宇髄の血圧がヤバいことになりそうなので、本題に入ることにした。

落ち着いた宇髄が懐から取り出したのは、赤い液体が入った小瓶。「この中には血が入っていてな。こいつをお前に嗅がせて、鬼としての食人衝動がねえか派手に確かめてやるんだよ。」

「はあ…。奥さん三人もいるんですか?…不埒ですね。」

「ちげえよ!だれが不埒だ!三人共平等に毎晩派手に愛しとるわ!!てか地味に話脱線させるなつての!」

やはり親子か、と宇髄の中で、暁葉親子に苦手意識が芽生え始めてきた。

「話を戻すぞ。血つつつても、これはただの血じゃねえ。鬼が匂いを嗅ぐだけで、思わず派手に飛びつきたくなる希少な血…稀血だ。」

稀血

人間の中で珍しい系統で、鬼にとつてとても栄養価の高い血の事だ。鬼が稀血の人間一人を食らうことで、五十から百人分に匹敵する栄養を得られるらしい。つまり、鬼にしてみれば欲して止まないものだ。

「なるほど。私を試すにはうってつけですね。それなら早く始めましょう。少し怪我が痛んできたので。」

「余裕じゃねえか。だったら派手に我慢してみせろよ。」

瓶を開けると、正座する凜の目の前にポタリと稀血を垂らした。真っ白なお白州に鮮血が飛び散るものの、当の凜は全く意に介さないと言わんばかりに微動だにしなかった。

「…どうなんだよ?」

「何がですか?」

「ほしくねえの?」

「寧ろ早く終わらないかなって思ってます。」

「……………」

「……決まりだね。」

何やかんやあったが、凜の潔白は証明されたことで、お白州に居た誰もが大きな溜息を一つついた。

片や安堵の、

片やようやく終わったかと言わんばかりの。

「でも凜。皆がその力を認めたことは良いけれど、安全性については何とも言えないのが現状だ。決して、乱発や無理はしないようにね?」

「はい、ありがとうございます。」

「じゃ…これで柱合会議を終わりにするよ。」

輝哉の一声で会議の終了が宣言され、凜はようやく縄を解かれて解放された。

しかし、傷が浅くないこともあり、隠に背負われて、千代の付き添

いで蝶屋敷へと直行となった。

お白州に埋められた讓治郎を残して。

第30話『夢』

「いだだだ!! いだいって!!」

「当たり前です! 無茶してこんなに怪我だらけなんですから!」

「全くです。傷跡が残らぬよう、徹底的に治しますよ!」

蝶屋敷 処置室

柱合会議の後、ここに運び込まれた凧は、千代としのぶの二人がかりで拘束されて、消毒を受けている。浅い傷が全身にできているのに加え、脇腹に受けた大きめの裂傷は縫合が必要なほどのものだ。消毒に次ぐ消毒。それが終われば縫合と、処置のオンパレード。痛み慣れているはずの凧でさえ、冒頭のように悲鳴を上げてしまうほどに沁みていた。

「治癒力を高める薬は沁みるんです! ほら、昔から言うでしょう? 良薬は口に苦しと!」

「だ、だからって!! 限度があいだだ!!」

「我慢しな…:さいつ!」

「いつ! いつ!!」

「いいいいいい!!!」

そんな感じで少女の悲痛な叫びは、しばらく蝶屋敷を支配していたとかなんとか。

一生分の痛みを味わったような気がする。

とんでもない処置からか、凧は魂が抜けたように病室のベッドで休んでいた。

蝶屋敷の技術は確かなものだ。あつという間に消毒と縫合と終えて、次の患者の処置にかかっていたのだから。

千代も、前世で伊達に数百年も生きていないらしく、その年月で培われた技術はしのぶと遜色ないものだった。

とはいえ、全身が傷だらけだったということもあり、入院着から見える肌には、あちらこちらに痛々しい傷を隠すガーゼが貼られているのは致し方ないものだが。

「これに懲りたら、もう無茶はしないように！いいですね！」

「…善処します。」

入院のため、病室の札を付けに来たしのぶに、改めてと言わんばかりに怒られていた。

…解せぬ。

脇腹の傷以外は軽傷なので、そう長らく入院にはならないだろう。だが凧としては、脇腹に受けた傷は不名誉の証であった。

(前世ならあれくらいなんとか捌けた筈…。まだまだ鍛錬不足ということか…。明日から訓練量を増やして…。)

「…今、訓練を増やそうとか考えてます？駄目ですからね！千代様からも、しっかり治すように厳命を受けていますので、悪しからず！」

「…はい。」

心が読めるのか、釘を差されてしまった。千代からもそういう命が下ったとあれば、万一訓練しているのを見られ次第報告され、即座に駆けつけて説教の嵐が吹き荒ぶことは想像に難くない。何時間も、下手をすれば夜通しになるので、幼い頃から幾度となく経験してきた凧にとつてはトラウマだったりする。

「でも…。」

激おこぷんぷん丸から一変。申し訳無さそうに俯きながら、しのぶは言葉を続けた。

「凧さんのおかげで、姉さんは危ないところを助けられたのも事実です。その件は、とても感謝しています。本当にありがとうございます。凧さん。」

「委員長…。」

「…台無しですよ、凜さん。ここは名前を呼ぶのが筋じゃないんですか?」

やれやれ、いつもどおりかと、少し笑みを浮かべながら溜息を一つ。いつもの調子に戻ったお互いに微笑み合うと、しのぶは踵を返す。

「とにかく、傷が塞がるまでは安静にしておくようにお願いします。」

「わかった。これ以上説教は傷に悪いからね。大人しくしておくよ。」

「よろしいー!」

その返事に得心したのか、満足げに部屋を後にするしのぶ。残された凜は再び横になると、間もなくして瞼が重くなってくる感覚に見舞われた。

(あれ…う…なんだ…これ…う?みよう…に…ねむ…く…。)

そう時も経たず、凜の意識は暗闇に沈んだ。

(あれ…う…う…は…どこだ?)

意識が浮上したとき、見覚えのない景色が飛び込んできた。

見るからに豪華絢爛な城。その廊下を、自身の意識とは関係なく、ゆっくり、ただゆっくりと歩いていく。

見渡せば、その豪華な城は何処かおかし。襖や引き戸、その隙間から見える畳がそこらかしこにあるが、それは城としてままたある光景だ。

だがどうだ?はるか前方には、まるで横から城が生えたかのように柱や引き戸が築かれているではないか。

独りでに歩が進む中で、まるで重力がおかしい空間であることを認識する中、まるで舞台のようにせり出た広めの床がある空間へと辿り着いた。

『よくもまあオメオメと…柱のみならず、一般隊士の女に手酷くやられて帰ってくるとは…上弦の弑としての立場を理解していないと見えるな？童磨よ。』

西洋の服に身を包んだ黒髪の男が、先日戦った上弦の弑の生首を掴み、青筋を立てて咎めている。

その身体からは途轍もない力を感じるのがありありと凛には感じられ、只者ではないことは確かだ。

『俺としてもまさかあそこまでやられるなんて想定外でしたよ。ややもすれば、既に柱としての実力が…』

『言い訳はいらん。貴様らに私が課しているのは青い彼岸花の搜索、そして鬼殺隊を滅すること。よもやそれを忘れたわけではあるまい？』

『まさか！俺が貴方様の御命令を忘れようはずが…』

『ならばなぜ最初から殺しに掛からなかった？なぜ遊んでいた？なぜだ？答えよ童磨？なぜだ？』

ミチミチと、童磨の頭を握る手に力が入っているのか、嫌な音が響いてくる。それでもなお童磨は余裕の表情を消さない。

『よしんばたかが柱一人を消したとて、それが何なのだ？結果、貴様は双方取り逃がし、鳴女がいなければ頸を斬られていた。違うか？』

『いやあ、俺はそのような…』

『お前は私の言うことを否定するのか？』

ぐしやり

男の指が頭蓋骨にめり込む音が響き渡った。

『何も違わない。私は何も間違えない。』

『流石にちよつと痛くなってきたなあ…。』

『痛ければ何なのだ？貴様がオメオメと敗れ帰ってきたことがそもそも原因ではないのか？なぜそれが理解できないのだ？』

童磨！

童磨!!

童磨!!!

『うぎゃー！』

とうとう余裕も保ちきれず、情けない悲鳴を上げる童磨。

一頻り癩癩を童磨にぶつけ終えた男は、興味を失ったかのように童磨の頭を床に投げ捨てる。

『上弦の弐も堕ちたものだ。これでは貴様の存在すらも必要か考えさせられるな。いつそ…!』

『まあ待て、同志。』

見ているだけだった凧の身体から声が発せられる。

『上弦の弐が戦ったことでその一般隊士。その異常な力の片鱗を感じることができた。それは思わぬ収穫だ。故に、私に免じて処分は控えてはくれぬか?』

『ほう…?』

思わぬ童磨への助け舟に、男はこちらへ振り返る。身体の主の発言に興味を湧いた、といった様子だ。

『貴様がそこまで気に掛けるあの小娘…何かあるというのか?』

『何、我が力の欠片を持つ、かつて贄だった者だよ。』

鬼舞辻無惨。』

黒髪の男を呼んだその言葉を最後に、凧の視界は再び黒に染められた。

「はっ!」

再び目を見開いた。

視界には木目の天井。

体を起こせば、自身が入院している蝶屋敷の部屋だと思い出す。外が真っ暗なところを見るに、真夜中のようにだ。月明かりがほのかな光

となつて差し込んできている。

「な、なんだったんだ…今の夢…。」

果たして夢なのだろうか？

それにしても現実的で、しかも鬼舞辻無惨が出てくるとは…。

疲れていたのだろうか？

「ん…？」

自身の隣に何かしらの違和感を感じた凜は、そつと布団をめくつてみる。

そこには、自身の隣ですやすやと寝息を立てているカナヲの姿。

「カナヲ…いつの間に…？」

察するに、入院している自身の様子を見に来て、そのまま添い寝してくれていたのだろう。

その寝顔に、凜の中で前世の義妹であるエリゼのことが思い浮かぶ。

成長したあの時は流石にないが、幼き日はこうして添い寝していたものだど、懐かしい思いが溢れてくる。

「お休み、カナヲ…。良い夢を。」

そつとその黒髪をひと撫で、再び横になると目を閉じる。

あの妙な夢が少し気になったが、心地よい安堵感によつて、程なくして眠りにつくことができた。

翌朝、カナヲと寝ていたことがばれ、心配していたしのぶから凜共々に大目玉を食らったのは言うまでもない。

第31話 『療養中の一幕』

「まさか凜が負傷して入院するとは、明日は槍でも降るか？」

「入ってきて早々、言うことはそれ？」

「それだけお前の実力を買ってるって事だ。」

ベッドの上に莫塵を書いて、全集中の呼吸の鍛錬をしながら、負傷箇所の治癒促進をしていると、面会者が来た。

自身の同期で、最終選別以降も時折任務を共にしてきた男、錆兎だ。

その手には風呂敷に包まれた見舞いの品。備え付けのテーブルにそれを置くと、錆兎は面会用の椅子に腰掛ける。

「だがまあ…流石のお前でも上弦には敵わなかったのか。」

「まあね。過去百年近く、上弦を討った記録がないんだし、そうそう討ち取れるものでもないよ。生きているだけでも儲けものなんだから。」

「それもそうだ。先達達の実力を以てしてもなんだからな。」

ちなみに、

凜が上弦の式を討伐寸前まで追い詰めた、というのは、輝哉の案で伏せておくことになった。

というのも、カナエが倒せなかった鬼を、一般隊士の凜が追い詰めたというのには信じられないだろうし、かと言って『鬼の力』を公表すれば、少なからず混乱が生まれる。それを避けるためにも、凜は何とか夜明けまで耐え凌いだという内容に落ち着くことになった。

凜の功績を落とす事に対して輝哉は申し訳無さそうにしていたが、こればかりは致し方ないものだ、凜も納得の上である。

「そういうえば、入院中に風の噂で聞いたけど、錆兎と義勇が柱候補に上がったんだって？」

「話が早いな。」

「女の間で噂が広まるのは早いものらしいからね。」

「そういうものなのか。」

「そういうものなの。」

曰く、空席だった水柱を立てるために、水の呼吸の使い手の中でも、抜きん出た実力を持つ隊士を精査したら、義勇と錆兎が候補に上がったらしい。

型の一つ一つの力強さが光る錆兎と、自ら編み出した拾壺の型と共に洗練された技の冴えが魅力の義勇。他の柱の面々からも、どちらを柱とするべきか悩みどころだとか。

「よかったね。どっちが柱になっても、鱗滝さん鼻高々だ。…って、お面で既に鼻が高いか。」

「違いないな。…あと、花柱様が柱を退くとか。」

「そっか…カナエさんが…。」

やはりか、と凜も納得する。

童磨との戦いの中で、血鬼術によって肺を大きく傷付けられたのが要因だろう。全集中の呼吸を用いる鬼殺隊にとって、肺は重要器官だ。呼吸に支障が出るなら、戦闘力が著しく下がる原因となるので、柱として戦えないなら、引退もやむなしだろう。

「花柱様の席が空席となれば、新たな柱の選別もあり得るだろう。やもすれば、お前も候補に上がるんじゃないのか?」

「…へあ? 私が? 柱候補?」

思いもしない錆兎の考えに、凜は思わず変な声が出てしまった。

目を点とした凜だったが、数秒ほど後に我を取り戻して焦り始める。

「そ、そんな。私なんてまだ14だよ? 柱なんて大役…。それに、実力だって。」

「歳はともかくとして、お前の実力は確かなものだ。何故そう謙遜する? 驕れとは言わないが、自信は持つべきだぞ。」

「そ、そもそも! それはまだ錆兎の憶測の域でしかないんだし!」

「…言われてみればそうか。だが凜。お前の実力は、お前が思っている以上に高い。それが周囲の意見だということを覚えておいてくれ。」

「~~~~うう……。」

言うだけ言うと錆兎は立ち上がり、部屋を出ていく。去り際に、『早

く治せよ。』と言いつつ残して。

一人残された凛は、ポフンとベッドで横になり、天井を仰ぎ見る。

お前の実力は、お前が思っている以上に高い。

その言葉が頭の中をぐるぐると駆け巡っている。

(今も昔も：私の実力は足りないことだらけの場面が多すぎるなあ。。。)

そもそも、イシユメルガを前世で仕留めきれなかった事が今回の原因だ。今更悔やんでも致し方ないが、それだけは心残りになっている。

(柱なんて、私には身に余る。十二鬼月を狩れない私は、きつとまだまだ実力不足なんだ。)

と、あいも変わらず自己評価が低い凛ではある。

しかし階級は既に柱に次ぐ甲となっており、まず柱となる条件を一つ満たしている。加えて十二鬼月は未だ倒せてはいないが、条件である鬼を五十体倒している。つまり、いくら凛が柱に相応しくないと自分で思っているにしても、推される可能性は十二分にある。

十四という年齢は未だ年若いと思われるやもしれないが、その実力は確かなものだ。

(とにかく、まだまだ足りない。。。あの鬼を次は倒せるように、明日から鍛えないと。。。バレないように。。。)

そんな決意をしながら、凛はゆっくりと全集中の呼吸を始め、治癒を促していった。

「こっさりやればバレない。そう思っていた時期が私にもありました。」

案の定、治りきっていないのに修行しようとして、物の一分でしの

ぶにバレた。

いぎ、道場で木刀を構えた瞬間、背後から『なにしているんですか？』と、母である千代が説教する時のようなものすごい威圧感で聞いてくるものだから、ちよつと涙目になってしまったのは内緒だ。

ともあれ、修行鍛錬厳禁と改めて念を押されたのだが、散歩くらいならと許可が降りた。

そんなわけで：

「カナヲ、何処か行きたいところとかある？」

「…特にない。」

カナヲ随伴のもと、こうして街へ繰り出したのだ。一人でもいいのではないかと思われるが、カナヲは所謂『御目付役』であり、凧がまたこつそり鍛えようとしないうようにするためだという。つまり、凧が鍛錬に及ぼうものなら、カナヲは容赦なく報告する流れになっているのだ。これは単に言われたままをこなすのではなく、カナヲが純粹に凧を案じているからの行動であった。

「…まあぶらりと歩くのも良いものかもしれないな。適当に歩きながらお昼御飯を済ませに行こうか。」

「ん…。」

ちなみに凧の服は、再びカナエから借りたハイカラファッションで、カナヲも外行き用に色違いのデザインのものを着用している。端から見れば、本当に姉妹に見えるような出で立ちだ。

(しかし…。)

街道を歩く中、凧はふと思考を巡らせる。

(…女の子って、買い物に出たら何をかうものなんだ?)

未だ男としての頭が残っている故に、年頃の女子の考えることがわからない。趣味という趣味も、修行一択で育ってきた凧は、カナヲがどんなことを望んでいるのかすら想像がつかなかった。

前世の同級生を思い出そうとも、アリスはラクロスを部活とし、エマはセリーヌ猫の世話と怪しげアッチな本糸の執筆。ラウラは水泳でそれ以外の時間は修行し、フィーは園芸か昼寝…ミリアムは調理部で活動…。

教え子に至っては、ユウナは料理が得意で、部活はテニス。ミュゼは茶道部と、何やらエマと同じニオイのするナニか……。アルティナは、水泳部に所属するとともに街のパンケーキをよく食べに行っていた。(パンケーキ…パンケーキか…。)

最近この街に様々な外国の文化が流入し、装いはもちろんのこと、料理関係も盛んに交流してきている。その一環で、橋を越えた大通り沿いに洋食レストランなる食事処が最近開店したと言う話を小耳に挟んだ。そうだ、女子ならば甘味を嗜むことはハズレではないだろう。

「カナヲ、パンケーキって聞いたことあるかな？」

「ぱん…けえき？」

小首をかしげるのを見るに、初耳というのが見て取れる。

「外国のお菓子で、ふわふわで甘々なんだって。それを今から食べに行かない？」

「……………」

ふわふわで甘々という聞き捨てならない言葉に、一瞬で目を輝かせたカナヲは、首が振り切れん勢いで頷く。少し、アルティナに似てるなあ、と思いながら、大橋に差し掛かったときだった。

「ようやく見つけたぜ…このガキ。」

二人の進行上にどこかで見たことあるようなハゲ男が立ち塞がる形で立っていた。その表情は怒り心頭で顔を真っ赤にしている。

「えっと…どちら様でしょうか？」

「巫山戯んな！この間にこの橋で！そこのガキを攫って行っただろうが！」

「……………あゝ。たしかに貴方あの時の。」

「完全に忘れてやがったな…。」

「でもあの時、私はこの子…カナヲのお金を支払いましたけど？」

「あんなもんで足りるわけがねえだろ？アレの十倍は持ってこなきや、話にならねえな。」

凜は察した。

所謂タカりに来ている。以前、ぶち撒けた料金で、存外羽振りのい

い事に目をつけ、前回は正式な取引で無かったことをネタに強請るつ
もりの様だ。

「払わない……と言えば？」

「無論、ガキは返してもらおうし、この間から今日まで、ガキを貸し出し
た料金分、お前さんに払ってもらおうか。見た目は悪くねえし、遊郭
あたりに売りや良い金になるだろうよ。…身体は貧相だがな。」

身体が貧相。

その言葉に怒りのボルテージが上がって行く。ただでさえ気にし
てるし、何なら同年代の真菰や、あまつさえ年下であるしのぶにすら
負けているというのに。

俯いて震えている凜の心象を知らず、男は凜を拘束せんと、その手
を取ろうとした。

だが…

「なんだ…ガキが。」

男のその手を左手で握り、制するのはカナヲ。いつもの表情の読め
ない目でじつと彼の目を射抜くように見つめている。

「お前もまた売りに出してやるんだ。だから離せ。」

「……………」

「離せ！」

「……………」

堂々巡りだ。

男の怒号にも全く動じず、彼の手をしっかりと握ることで完全に制し
ている。

「離せって言ってるだろうが！」

力尽くで離させようと、もう片方の手でカナヲに殴りかかってく
る。

このままではどうなるか、火を見るよりも明らかだ。野次馬になっ
ていた通行人の誰かが小さな悲鳴を上げる。

だが…

「コオオオオオ…！」

そんな聞き覚えのある呼吸音に、怒り心頭だった凜は我に返る。

この音は、自身が使う『閃の呼吸』の呼吸法のそれだ。

そんなもの、誰が使うのか？と横を見れば、カナヲが迫りくる拳を見ながら全集中の呼吸をしていた。

「ッ……………!!」

拳がカナヲの顔面を捉える直前、掴んでいた男の手を真下に引き、その襟首を右手で掴むと、呼吸によって底上げされた腕力そのままに、彼を真上に放り投げる。

「はっ!?!」

「ゴオオオオ……!」

再び呼吸を練り直す。

同時に、左手を真下に、右手を真上に、呼吸を吐きながら、ゆっくりとそれぞれが半円を描き、互いの位置を入れ替える。そして練り上げられた筋力と気を、弓引いた右手に集約していく。

そして、放り投げられた男が眼前に迫ったとき。

「全集中 閃の呼吸 捌ノ型 破甲拳」

「ぐえっ!?!」

力が込められた掌底が男の腹にめり込む。幼いカナヲからは想像できないほどの一撃により、男は吹き飛び、橋から飛び出して、眼前の川へと姿を消した。

「……………」

「……………」

「えと……………カナヲ……………さん……………?」

「……………?」

「今の……………破甲拳……………?」

「うん。」

確かに以前、やり方を教えていたし、あくまでも護身術程度には身に着けさせていたが、あそこまで威力はないものと思っていただけに、思考が追いつけない。しかも、呼吸法まで身につけているとは、どれだけ学習能力が高いのか。もしかすれば、とんでもない才能を持っているのかもしれない。

「あ……………その……………、ありがとう、カナヲ。助けられちゃったかな。」

「私も、凜姉さんに、ここで助けられたから。だから…これでいい。」
「…そっか！」

姉さん。

そう呼ばれたとき、凜の中に懐かしい思いが蘇ってくる。

義理ではあれど、血の繋がらない自身を兄と慕ってくれていた妹のことを。

「じゃ、気を取り直して、パンケーキ食べに行こっか！好きなだけ食べていいよカナヲ。」

「ぱんけえきー！」

こうして、凜の中で前世で同級生や教え子から苦言を呈されていた病気が再発した。

そして近い未来、市松模様の羽織を着た少年に、その矛先が向くのは、また別のお話だったり無かったり。

第32話 『馴れ初め?』

蝶屋敷の道場。

普段、療養を終えた隊士が、機能回復の為に使用することが多いこの場。

だがこの主の家族に至ってはその限りではなく、彼女達自身の鍛錬にも使われたりする。

現に、

「やああつー!」

手に握られた木刀が、相手の頭目掛けて突き出される。

だが相手：凜は驚く事もなく最低限の動きでかわす。

その余裕が癪に障ったのか、木刀の主であるしのぶは更に速度を上げ、目にも留まらぬ突きの連打で畳み掛けに入る。

だが悲しいかな、実戦経験は前世も合わせれば凜の方が上だ。更に鬼という括りを無くせば柱以上に命のやり取りを経ている。それが凜にとって何よりの強みであった。

しかししのぶの突きの速さに置いては、他の追随を許さない物があるのも確か。だからこそ、反射神経と勝負勘を取り戻すために、しのぶに打ち込み稽古を手伝うように凜は頼み込んだ。結果がご覧のよう様である。

「ん…のお!!」

当たらない現実にしびれを切らしたしのぶは、まるで弓引くかの様に右手を思いつき引き絞ると、その体躯から繰り出されるすべての運動エネルギーを乗せた突きを放つ。

その速度にさしもの凜も目を見開き体を大きく横に逸して躲すに至ってしまったのは、しのぶにとって喜ばしいことだった。

だが：

「あつ…い!」

すぽーん、という間抜けな音が聞こえんばかりに、しのぶの握力で耐えられる以上の運動エネルギーで繰り出された突きで、その手に持っていた木刀は、まるで流星の如く投げ放たれた。

そして…

「胡蝶妹…：すまないが軟膏を…：ぐふっ！」

「あ…：！」

運悪くしのぶを探して道場に入ってきた義勇。投げ放たれた木刀は彼の額に直撃。スコーン！という見事な音とともに、卒倒と言わんばかりに彼は綺麗に地面に倒れ伏した。

「義勇!!」

「富岡さん!!」

額に大きなたん瘤を膨らませて。

「すいません富岡さん。」

数十分後には運ばれたベッドの上で目を覚ましたものの、平身低頭、しのぶは義勇が目覚めるなり土下座である。

目を覚ました矢先、年若い女性がそんなことをしては、当の義勇も困惑しきりである。

「…何を謝っているんだ？」

「その、私が不甲斐ないばかりに怪我をさせてしまったのですから、謝罪は当然です。」

攻撃が当たらないからと平静を忘れ、後先考えずに力任せの打突を繰り返したのだ。自身の感情の制御を怠ってしまった結果がこれである。

「いや、お前は悪くない。」

「え…：…？」

「俺が反応できなかつた。それだけだ。」

「…つまり、私程度の突きを躲せなかつたのが悪いと…？喧嘩売って

るんでしょうか、この人は……」

若干煽り耐性が低いしのぶは、額にピキピキと青筋が浮かんでくる。

それに気づかぬまま、義勇も義勇で『まだまだ力不足だな。』と溜息を一つ。それがさらに火に油を注いでいく。

「義勇、相変わらずいくらなんでも言葉が足りなさすぎるよ。」

険悪な空気になりつつあった病室を見かねた凜が間に割って入る。

「義勇が言いたいのは、『俺が反応できなかった（程の良い突きだ）。それだけ（良い鍛錬を積んでいるということ）だ。（反応できなかった俺は）まだまだ力不足だな。』ってことじゃないかな？」

「……う・そう言ってるが？」

「言つてない。」

（心外!!）

やはり無自覚か。

言葉足らずなところは相変わらずのようで、彼がこれが原因で、他の隊士と険悪な状態になっていることを、凜はちよくちよく耳にしていた。

単に言葉が足りない話の内容が、前述の様に煽っているかのようなものになっているだけで、本人は謙虚に思っているのだが、それが中々理解されず。仲の良い隊士といえば、彼と付き合いの長い鏑兎や真菰、凜……後はなぜか村田という、やけにサラサラな髪の毛の男くらいだったりする。

「……つまり？」

「義勇は委員長の突きの速さに驚いたってこと。もちろん、いい意味で。」

「なんだか釈然としませんが……まあいいでしょう。そういえば富岡さんは確か……軟膏を御所望でしたか。持って来ますので、少しお待ち下さい。」

「ああ。」

足早に退室したしのぶ。

残された二人は話題が見つからず、静寂が続いていたが、ふと凜は

訪ねたいことがあったのを思い出した。

「そういえば錆兎に聞いたんだけど。」

「柱のことか?」

「やっぱりわかるんだ。」

「ああ。」

「柱になれって言われたら、なる?」

「興味ないね。」

バツサリと義勇は切り捨てた。

確かに柱という存在は皆からの羨望と尊敬の的だ。五十を超える鬼を斬り、十二鬼月を討ち倒した実力者。その証とも言える最高位の隊士。

しかし柱となれば、その高い実力からあちらこちらへ助っ人として引つ張り尻になる。つまり多忙を極めるということ。憧れを抱きつつも、その忙しさと危険性から柱になるのは嫌だという隊士も少なからずいる。中にはそこそこ鬼を倒して、安全に出世して、賃金を貰えばいいと言う男もいたりいなかったり。

ともあれ、危険や忙しいという理由で義勇が柱を辞退しようとするだろうか?

「なんで興味ないの?」

「俺は柱にふさわしくない。錆兎こそ柱にふさわしい。」

確かに錆兎の実力は高い。一つ一つの型の練度が端から見てもずば抜けているというのが、違う畑の凜ですらひしひしとわかつている。柱の候補として上がってもおかしくないほどに。

だがしかし、かと言って義勇が柱として実力不足かといえそうでもない。独自に編み出した拾壺の型という大きな武器に加え、他の型も高い練度を誇っている。さしずめ力の錆兎と技の義勇、といったところか。

どちらも水の型を収め、極めた実力ある隊士だけに、その選考は難航しそうだ。

「お前こそどうなんだ?」

「え？私？」

「実力、実績から言えば、お前も候補たりうるだろう？」

「錆兎と同じ事言うんだ。私は誰かさんみたいに興味ないってバツサリとはいかないけど……。でもやっぱり柱なんて大任は身が重いつていうのが本音かな」

「そうか」

「そうだよ」

義勇からしてみればこれ以上深堀りするつもりはないらしく、そこからは口を噤む。変に食い下がられるより、凜にとつてはそちらのほうがありがたいもので、ドライ気味に感じる彼の性格はこういう時は功を奏する。

「おまたせしました富岡さん。御所望の軟膏です」

「助かる」

病室に戻ってきたしのぶから軟膏を受け取り、用が済んだとばかりにベッドから降りるとスタスタと玄関へ向かう義勇。ドライ気味と言ったが、あまりにもである。

土間に降り、自身の草履の鼻緒に指を通した時、鼻をひくつかせて義勇の動きがぴたりと静止する。

「どうかしたの？」

「……この匂い」

「あ、お昼の拵えをしていたんですよ？今日の当番は私でしたので」「鍛錬前から仕込んだの？」

「そりやもう弱火でじっくりと！ゆっくり火にかけることで、鮭から出た旨味が大根にじっくりしっかり染み込んで……」

「鮭大根か……？」

だんまり静止を保っていた義勇に動きあり。めっちゃや食い気味で。

「え、ええ。そう、ですけど」

「……そういえば義勇、前に鱗滝さんのところに泊まった時も鮭大根を希望してたよね？もしかして好物？」

凜の問いに目を向けぬままコクリと頷く義勇。どうやら好物が蝶屋敷の昼食とあつて惹かれる物があつたらしい。

「まあ沢山作ってますし、食べていかれ「馳走になろう」ます……？」
めっちゃ食い気味に履きかけた草履を脱ぎ捨てて踵を返し、足早に
スタスタと蝶屋敷の居間へと姿を消す義勇。

残された凜としのぶは目を丸くしたまま顔を見合わせ、ややあつて
どちらからともなく苦笑いを浮かべたのだった。

「おかわりを」

「早っ!?!」

そしていざ胡蝶家と凜、そして義勇で食卓を囲み、鮭大根を主菜と
して昼食を始めたのも束の間。

食べ盛りの男というものもあるだろうが、それにしてもあつという
間に丼飯一杯を平らげておかわりを要求してきた。

「は、はいはい」

隣に座っていたしのぶが義勇の茶碗にご飯を盛って再び彼に渡せ
ば、またしても凄まじい勢いでかつ込んでいく。

「ぎ、義勇? 誰も盗らないからもうちよつとゆっくり……」

「ふおん問ふあい題ふあい」

「富岡さん、ご飯粒が顔中に付いてますよ……?」

がつつくあまりか、義勇の顔に飯粒がそこかしこに引っ付き、整つ
た二枚目の顔が台無しになる惨状と化していた。見兼ねたしのぶが
布巾で顔を拭いてやることで、何とか義勇ファンが離れない位に戻
る。

「あらあら、しのぶってば奥さんみたいね」

「なっ!?!お、奥さん!?!へ、変なこと言わないでよ姉さん!」

ここぞとばかりにからかうカナエにしのぶは食いつく。だが、顔を
少し赤らめているのを見るに、少しは満更でもないのだろう……多
分。

「全く……姉さんのからかいグセも困ったもの……」

「胡蝶妹」

「何ですか富岡さん。またおかわりですか？」

「いや……違う」

「だったら何だ？と睨む先。先程までご飯粒塗れだった悲惨な顔の人間と同一人物かどうか怪しいくらいに凜々しく、真っ直ぐしのぶを見つめる美青年が。」

その眼差しに、しのぶのオトメゴコロは『雫波紋突き』を食らったかのごとく打ち穿たれる。

「この鮭大根。実に美味だ。これから毎日、食わせてはくれないか？」

つまり、つまりだ。

義勇の言うこの言葉の意味。

それ即ち

『毎日俺に料理を作って欲しい』

⊠

『毎日味噌汁を作って欲しい』

的な捉え方をしてもおかしくないわけで。

「~~~~っ!?!?」

あつという間に鮭の身よりも赤く顔を染めゆくしのぶ。

そしてそれを見てあらあら、と嬉しそうに……いや、楽しそうにしているカナエの姿。

「……義勇……天然か？天然なのか？」

もはや収集つかない混沌としてきた食卓に、呆れの目を向ける凜と。

「義姉さん、富岡様の言ってた意味って……？」

その隣で彼の言葉の意味を想像できず首を傾げるカナヲ。

「カナヲにはまだ早い。まだ、ね」

だがしかし、そんな言葉をカナヲが掛けられる未来を想像したくない凜もいるわけで。

蝶屋敷の昼餉は一人加わることでいつも以上に賑やかなものとなっていた。